
ウエストエンド

全宏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウエストエンド

【Nコード】

N8699N

【作者名】

全宏

【あらすじ】

舞台はロンドン。日本が嫌で逃げ出すようにロンドンにやって来た崇史^{タカシ}。世間知らずの崇史が2人のイギリス人男性に翻弄され、彼らとの恋愛、失恋を通し傷付きながらも、なんとか幸せをつかもうと奮闘します。最終的には、日本人やアジア人の友人にまで裏切られ人間不信に陥ってしまい、生きる目的を見失ってしまうが、自分自身も恋人や友人の気持ちを理解しようとしていなかったんだと気が付きます。などなどひたむきに生きていく姿を描いています。

第1章

崇史^{タカシ}はウイリアムの話し声を聞きながら、チャリングクロス地下鉄駅までの道のりをゆっくり歩いていった。ウイリアムは電話の相手をからかっているようで、時折、携帯電話から笑い声が聞こえる。

彼はまるで崇史が側にいることを忘れているかのように会話に夢中になっているように見えた。話の内容は？ライブパーティー、DJがといったのが聞こえてくる。でも、それでいて実のところウイリアムは神経をしっかりと崇史^{タカシ}に集中し、時折速度を緩めて立ち止まっては、気付かれないように彼の様子を探っていた。

？

崇史には彼らの快活な会話が自分を主人公に置いてなされているかのような錯覚を味わっていた。きっと彼らの話しているライブには僕も招待されるのであろうといった具合に。その為、わざわざ会話を中断させようといった気持ちは起こらず、彼らの爽快なリズムが却って心地良かった。それに、この幸福感と並行して、先程までの出来事をもう一度思い出し空想できる事もちょうど良かった。

？

だが、ウイリアムにはその姿（思い出し空想している様子）が何か物思いに耽っているように見えた。その原因は、崇史が考え込んでいるように見える全ての原因は、自分が今、電話をしている事と、崇史に対する無関心さから起こっていることは明白だと感じていた。ウイリアムは、恋愛とは何たるかについては大いなる自信があった。彼には相手が何を思い、何を考えているかが手に取るように分かる と確信していた。それに引き換え、今、自分の目の前にいる青年はなんと純粹で世間知らずなことが。わずか数時間前に出会った俺にもうこうまでも心を寄せているのだから。まるで、崇史^{タカシ}の感情は自分に委ねられているかのようにすら感じた。そして、そんな純朴な彼をかわいくも思った。

?

崇史は『そろそろ電話を止めて、僕の元に戻ってきて』といった意味合いを込めてウイリアムの肘を軽くつついた。決して強引に話を中断させようといった気持ちはないのだけれども、駅にはもう数分であつてしまふのだから。それに僕にはまだ彼の何もかも全てを知らない。そう言えばお互い携帯番号すら交換していなかった。そういう意地らしい気持ちの方が彼をそうさせた。

?

ウイリアムは彼をいたずらっぽく見つめて、大きな溜息をして、「分かった、分かったよ」と言いながら電話を切った。いつも何もかもが俺の予期しているように事が進む。人間というものはシンプルで、今まで一度だつて俺の法則から大きく外れた事は無い。彼はやれやれと呟きながら、崇史を軽く引つ張つて引き寄せ、自分の前に立たせた。そして、上から下まで舐めまわすように見つめた。ただお互いにクラブの中の暗がりでしか姿を見ていなかった。はつきりと崇史の容姿を確認する為に、また彼が愛するのにふさわしい対象であるかどうかを判断する為に、彼はもう一度じっくりとチェックした。ウイリアムは満足そうな笑みを浮かべて、「ちよつと待っていて」と言つてドリンクを買いに走つて行つた。

?

二人はチャリングクロス鉄道駅の壁にもたれて甘いコーヒーを飲んだ。ウイリアムはそれを子供っぽく音を立てて啜り、目の前にかわいらしい青年が通ると、じつと見つめてウイリンクをした。それに対し、青年は恥ずかしそうにはにかみ軽く手を振つた。そんな彼の不良な？行為を見て崇史は唸り声をあげ抗議した。ウイリアムはすぐそれに反応して、「おいおい、俺達はまだ出会つてほんの少ししか経つていないんだよ。俺は君の何ものでもない。それは分かつているか」と怪訝そうに言つた。でも、それでいてウイリアムは崇史の反応を楽しんでいた。

?

「それくらい分かっているよ、でもなんでそんなに冷たくするの。そもそも、君が僕を誘ったんじゃないか。」「崇史は話し始める。ほんの数秒前まで少しも感じていなかった不満が湧き出てきた。なんだか侮辱されたような気分、いつそ今立ち去ってしまおうかとも思った。でも、何も知らないままではこのまま別れるのはあり得ない事だった。」

「?」
「もじもじしている姿を見てウイリアムは心地良く感じ笑った。」「分かったよ。ごめん。それで君はいつも何をしているの？学生それとも仕事をしているの？」「崇史は本当に彼が自分について知りたがっているかどうかは疑わしいと思った。もしかして、全く興味が無いのかもしれない。それでもやっと会話が始まったことに彼は嬉しく感じた。」

「?」
「それはそうと。君にはボーイフレンドはいるの？」「その後、小声で、「いなければいいんだが」と真剣な顔をして、崇史の顔を覗き込んだ。その最後の一言はとても重要な意味を含んでいた。」

「?」
「残念ながら、誰もいませんよ。いればクラブに一人では来ないよ」と何かを訴えるように輝く目をして答えた。」

「?」
「それは、良かった。俺にもチャンスがあるってことだね」とウイリアムの顔はわざとらしく、満足そうな笑みを崇史に見せた。」

「?」
「ウイリアムはまるで自分達がこの先友達以上の関係になるかもしれない、といったニュアンスを含んだ言い方をした。崇史には、自分に彼氏がいないという告白に対してウイリアムが明らかに喜んでいるように見えた。」

「?」
「しかし、ウイリアムは実際には自分と崇史が恋人関係になること

など想像もしなかった。そもそも、特定の誰かと限定して関係を保つなどできない話であった。でも、恋愛ゲームは相手を本気にさせることが何よりも大きなポイントであった。それはただのセックスフレンドとは味わえない、もっと深いものを楽しめるからである。それは今、目の前にいる崇史を見ているも明らかである。たった小声で言ったその一言の後で、彼の顔は数秒前の何倍にも晴れ晴れとし、幸福感でいっぱいといった風に輝いていた。きつともう彼にとつて自分は特別な存在になってきているに違いない、と意地悪くにやっていた。

「じゃ、君の携帯番号を教えてください」ウィリアムは番号を聞くとすぐに崇史の携帯電話にかけ、「これで、何かあったらいつでもメールを送ってよ」といいながら、側に落ちてあったガーディアン（日刊紙）を破ってGmailのアドレスを書いた。「もし長い文章ならこっこのほうにね」とそれを二つ折りにして、崇史の掌に置き、軽く手を握った。

彼らが地下鉄の改札口まで来ると、ウィリアムはまた崇史を引張って前に立たせ、舐めまわすように全身を見た。その視線はこそばゆいようで、まるで、全身を裸体にされたかのようなぞくぞくとした感覚が体中を走った。彼の野獣のような目は崇史の抱いている考えを確固たるものにした。そして、周りの通行人達『皆僕らを見ている！』の視線に興奮を覚えた。

次の瞬間、ウィリアムは崇史を自分の方に引き寄せ軽く唇にキスをした。

たった今のこのシーン、この感触は崇史にあまりに強い感動を与えた。それは異様なまでの快感であった。

その後、ウィリアムは一度も振り返らずに地上階へと上がって行った。その時の彼の顔にはいたずらっぽい笑みがあった。それはまるで勝利者のような表情であった。彼は今、崇史の頭の中でぐるぐる回っている感動を想像していた。そして、これから起こるであろう、様々なドラマに対してにやついた。

？

ウィリアムは駅のトイレで鏡に映る完璧なまでに整った顔とハイセンスな容姿を見て勝利に浸った。彼は今、世界の全てが自分を中心に回っているかのような錯覚に陥っていた。また遠い東の国の日本人であるタカシ、あまりに純真で無垢な彼を思い描いて微笑んだ。

？

すっかり満足していたウィリアムはまだまだ続く夜を考えた。この時、時計の針は一時十分前を指していた。このまま家に帰るべきか、それとも……。 たった今、彼の頭の中の全てを占有していた崇史への思い、この興奮した気持ちは次の段階、すなわち崇史を通り越し、まだ数時間残っている夜の何やら幸運、浮き浮きした事が起こるかもしれないという予感が彼を再び元のクラブに戻らせた。もう彼の心を占めるのは崇史ではなくクラブにいる美青年達であり、今晚ベッドをとにもするかもしれないまだ見ぬ相手であった。

？

たった今起きた出来事を思い出して崇史は動けなかった。頭の中では先程のシーン、それは第三者が見たような二人と通行人までが映っている映像であり、また次の瞬間はウィリアムが自分を強引に引き寄せたノーを言わせない支配者的な顔であったり、それに続くのは唇の感触であったり、次々にわずか数十秒間の事が、様々な映像や感触となって彼を取り巻いていた。それにしても何と大胆な行動か。都会の真ん中で、しかもこれほど大勢の人がいる中で男X男がキスをするなんて。彼はその行為はウィリアムの純粹さ、真剣さを率直に表していると考えた。そして、ウィリアムの大胆かつクールな行為は、崇史を興奮させ、彼の想像を遙かに超えた行為を解読

し現実のものにするには時間が必要であった。今の段階でそれは破裂する直前までに膨れ上がった風船のように、体いっぱいに充満した歡喜であり、一体それが何なのかは分からなかった。

？

そして、今の幸せな気分を再度味わってみたい、壊したくないという気持ちが彼をその場から動けなくした。まるで、その場を動くと彼を取り巻く幸福感（それは手で触る事のできるかのようで、それでいて、触ってしまうと崩れてしまうかのような感覚）が消えてしまうのを恐れているかのよう。そうなるまでに、もう一度全てを回想し、思い出し、脳裏に鮮明に記憶しなければ。

？

日本の片田舎出身で、しかも日本の都会（東京や大阪？京都など）を経験せずそれを飛び越えてロンドンに來た彼には、ウイリアムの頭の中にある複雑な恋愛ゲームなるものは想像だにできないことであつた。彼にとって理解できるのはただ目の中に入ってきた出來事、すなわちウイリアムの真剣で強烈な自分に対する気持ちのみであつた。彼はウイリアムの強い思いに圧倒され、感動していた。

？

気がつくと乗車するはずであつた終電はとづくに発車し、駅員が地下鉄駅のシャッターを閉めているところであつた。崇史はもう一度手を唇にあて軽く撫で、ナイトバスに乗る為に先程來た階段を引き返した。その時の彼の足取りは軽やかで浮き足立っていた。

？

ここには昼のロンドンとはまた違った夜のロンドンがあつた。バスを待つている人々の年齢も昼のそれよりもずっと若返る。デイタイムの主人公達（ビジネスマン、ビジネスウーマン）はもうとづくにベッドの中だろう。そして、この場所は夜の静寂とは無縁であつた。彼の目の前では、二人の青年がバスに向かって、きつと乗り遅れたに違いない、何やら喚いている。すぐ隣では愛を囁き合ったり、キスをしあつたりしている若々しいカップルがベンチに座っている。

マッチョな黒人青年を連れだ白人マダム、痩せた浮かぬ顔をした二十代前半の白人女性の手を強く握って、生き活きとして興奮気味な中年日本人???ビジネスマン、彼らだけではなくあの人もこの人も興奮した野性的な顔をしている。そして、崇史自身もまた彼らと同じように快活な表情をしていた。

?

崇史はバス停で待つている人々、目の前を行き交う歩行者を観察しながら先程の出来事を基にこれからの展開（それはまるで現在進行形のような映像であった）を想像していた。彼にとってウイリアムは運命の人、出会うべくして出逢った人であった。わずか数時間の事ではあったが、彼の空想がますますウイリアムの存在を特別なものに仕立て上げていった。

?

その時、誰かに見られているような気がして、彼の空想は中断された。視線の元をたどると三十代前後のきりつとした男性が立っていた。彼はいったいどれくらいの間僕を見ていたのだろう。崇史はきつとにたにたしていたに違いない自分の顔を思うと恥ずかしくなった。その男は一瞬、満面の笑みで素晴らしい微笑を作って崇史を見た。そのやさしい微笑みは崇史もにっこりしてしまうような心地良いもので、二人の視線は数秒間交差した。

?

だが、崇史はそれまでの彼にはあり得ない事であったが軽蔑的な気のない顔を返した。彼には自分を求める資格がありませんよ、といった風に冷笑を浴びせたのだ。そして、何か汚いものでも避けるかのように数歩今までの距離から遠ざかった。

?

この二人のやり取りは数人の男達によって見物されていた。言うまでもなく崇史に声をかけようとした数人はそうすることを諦めた。彼らは最初に声をかけなかったことにほっとした。なぜなら、彼らの頭の中でその男は笑い者になっていたからである。少なくとも彼

らがそうなることは避けられたのだから。とはいっても拒絶された男は誰が見ても外見上は魅力的なオーラが出ていた。その醜男な見物人達は伊達男が屈辱を受けたのに歓喜する一方で、今度は敗者に声をかけるべく彼の後を追って彼らもまたバス停から去っていった？

崇史にはそのような事が起こっているとは何も知らず、ただ、その男によって今晚起きた出来事の回想を中断されたのが許せなかった。だが、普段は誰かに見られる事などなかっただけに一瞬嬉しく感じた事は事実である。ただタイミングが悪すぎた。何者によってモウイリアムとの思い出を穢されたくはなかったから、どうすることもできなかつたのだ、と自分を納得させた。それでも、やはり彼は冷淡な態度をとった自分に後悔した。人の心を傷つけることはやってはいけない事であり、自分に置き換えて考えてみるとそうなった場合、やはり恥ずかしい思いをするのだから。なんだか言い訳をしたくて、崇史はもう一度回りを見渡したが、もうその男はとつくにいなくなってしまうていた。もし、これが今日でなければ今のよ様な態度はとらなかつただろうに。でも、そういった反省の念は今のあまりに大きすぎる幸福感によってすぐに消えていった。

？
今晚の僕はいったいどうしたというのだろう。昨日までの自分とはまるで違う人物になったかのように思った。何もかも全てが根底から変わったのだ。

？
ただ崇史は自分自身についてほとんど何も知らなかった。魅力があるかないか客観的に判断する事ができなかった。彼のまわりにいる人は誰も一度も彼の容姿を褒め讃えたことはなかった。それに生まれて一度も男性から愛の告白など受けた事はなかった。崇史の背はそれほど高くなくどちらかと言えば痩せているほうだ。あと、声音も高い。彼は自分とはちょうど反対の背が高くがっしりとした体格、そして、低い男らしい声に憧れていた。そのせいで彼は自分が

愛される機会の少ない恵まれない男だと判断していた。

？

だが、崇史は自分が考えているほどには不細工ではなく、実際どれだけ多くの男達が彼を見つめていただろうか。ただ崇史は自分に恋いこがれている人がいる事に、そして、そもそも自分自身の魅力に気がついていないだけなのだ。でも、そうは言っても今まで誰一人として彼に声をかけなかったではないか？その答えは彼から溢れ出る純粹さ、何も穢されていない無垢な姿を見ると躊躇してしまうからかもしれない。それに、崇史がそうであるように、誰でも思いを寄せている人に声をかけるのは勇気がいるものなのだ。

？

バス停についてから一時間近くも崇史が乗車する予定のバスが来ていない。時刻表には一時間二本の割合で運行されているのだけれど、ロンドンの日常通り今夜もまた運行状況が乱れているのだ。そのせいで、バス停には溢れんばかりの人が集まっていた。これではバスが来ても乗れるかどうか分からない。

？

その時、その中のある二組のカップルはもう待つのを諦めたようで、ミニキャブ（私営タクシー）の運転手と料金の交渉を始めた。その他の運転手もそろそろと集まって来てハイエナのように彼らに続くであろう客を待ち構えていた。

？

そして、まるで誰かが号令をかけたかのように一斉に彼女、あるいは女友達を連れている男達はミニキャブに駆け寄りアプリカ系、カリブ系、アラブ系……様々な国籍の運転手達と交渉し始めた。きつと、彼らの夜はまだまだ続くのだろう。それには女性達の機嫌を損ねてはならない。ティーンエイジャーにとっては、わずか十数ポンドの出費だったけれど、余計な大きな出費に違いない。バス停に残ったのは悲しいかな、男達だけだ。

？

崇史もバスを待つのを諦めた。というよりも、何か先程から続いている、或は、更に高まつている感動に満ちた気持ちで全身で味わいたい、そして、体いっぱい感じたかったので夜のロンドンを歩くことにした。

？

だが、崇史がほんの数メートル歩いてすぐに、すぐ脇を乗るはずのバスが通り過ぎて行った。呆然としてバスを見ると目の前の信号で停車している。本能的に彼は全速力で走った。ただ飛び乗るのだという意識だけが支配し、もの凄いスピードで彼を動かしていた。しかし、残念なことにナイトバスは後ろから自由に降り降りできる旧式のバスではなくて、前乗りの新型のバスであった。仕方なく崇史は哀願するようにドアをたたいた。運転手は彼の情けない弱々しい姿を一蹴した。その運転手の顔は、君のような者が社会の風紀を乱しているのだよ、規則はしっかりと守るべきだ、と語っていた。その運転手にとって、乗客がバス停以外で乗ろうと試みることは許容範囲を大きくはみ出しているのだ。彼すなわち運転手は一時間以上もバスが遅れているといった事実については、完全に忘れていたようだ。

？

バスは無情にも発車した。バスに乗っているティーンエイジャー達が一斉に窓をたたき大笑いして崇史をからかった。気が付けば何人もの通行人が唇を緩めてこちらを見ている。少しの間、恥ずかしくて静止状態であつたが、気を取り直して歩き始めた。彼は今、自分が演じた喜劇を思い笑った。

？

一人無惨に取り残された崇史であつたが、そんな事ですら今の彼には無邪気に幸せに感じるのであつた。

？

にやついた顔を真顔に戻そうと周りを見渡すと、そこは幻想的な世界、目の前にはネルソン將軍の像が建っており、その後ろにはナ

シヨナルギャラリーが、そして、いくつもの荘厳な教会や建物が連なっていた。恐らくこの光景は百十数年前のビクトリア朝とそれに続く時代にも存在し、そして、きつとネルソンはこの先何百年も同じ光景を見続けるのであろう。ただ、彼の目に映る人々の姿は変わっているが。崇史はしばらくの間、とても強い、圧倒的な神秘的ともいえるエネルギーを感じていた。何世紀にも連続する超越的な力を。過去、現代そして未来。あゝ何て美しいのだろう。どつと押し寄せてくるビジョン、彼を取り巻くパノラマ、この今の感動を言葉に表すことはできなかった。「生きていくというのは何と素晴らしきことか」崇史は感動のあまり、周りを気にせず両手を天空に向かつて広げて大声で叫んだ。彼はまるで様々なエネルギー、それは何世紀にも渡って生き続けた建築物から、或は、広場を闊歩する青年達の若々しい力、或は、セントジエームズパークで眠っている鳥達、それに、木々達そのものが発するエネルギー、を大きく吸収しているかのようにであった。

？

崇史は興奮しながら再び歩き始めた。先程の荘厳なエネルギーは消え、まさしく現代の象徴とも言えるシーンがそこにあった。オデオン（映画館）の前には無邪気に？クラブから出て来たのである。うかかんバーガーをくわえた若者達が大勢たむろしていた。周りにはちらかし放題のごみが、或は、立ち小便をしている奴もいる。もうこんなに遅い時間なのに彼らは疲れを知らず叫んだり、はしゃいだり、また、熱心に愛を語り合ったりしている。これこそが若者のエネルギーなのかもしれない。制御不能の彼らのエネルギー、行き場を常に探し求めている彼ら、そんな彼らのパワーがここに集結していた。

？

オデオンのスクリーンに出てくる華麗なハリウッド俳優達。ウエストエンドのシアターで踊るトップスター。ライブを盛り上げエキサイトさせるDJ。セックスショップに男女の娼婦（夫）。若者達

の憧れとあらゆる欲望が満たされる都市それがロンドンである。
?

ピカデリーサーカスにあるジャパンセンターの前のバス停にも人だかりができていた。きつと、またバスが遅れているのだろう。だが、今度は運良く崇史がバス停に着いてすぐにナイトバスN9がやってきた。待ちかねていた人達は満員のバスに乗車拒否されるのを恐れて入り口に殺到した。

?

崇史はすぐに満員の一階をさけて二階に上がった。ここでもまた幸運にも空席が一つあった。彼は駆け足で席に向かったが、そこにはいかつい顔をした男性が座っていた。一瞬座るのを躊躇したが、大柄なその男は体を窓際に寄せて、崇史が座りやすいようにした。それでも、その男性は座席の三分の二を占有し足を屈めている。ロンドンにありながらバスの座席はヨーロッパアンやアフリカンには少し小さいようだ。

?

バスの中は騒がしかった。各々が今晚、起きた出来事を話している。「俺なんか、今週10人と寝たよ。それも全て別の女性」また別の男は「俺が今までで一番良かったってさ」皆、目を輝かせながら活き活きとした声で武勇伝を語り合っている。彼らには自信が溢れ出ていた。

?

「XXは俺と別れる時、涙を流しながらも一緒にいたいってせがむんだよ」そう言った青年は彼の相手の女性がかわいくて仕方がないというような顔をしていた。崇史は彼と彼女が抱き合って、別れを惜しみながら、そして、彼が彼女をやさしく慰めているシーンを想像した。何て素敵な映像だろうと彼は思った。

?

崇史はそんな彼らを初々しく感じ、また羨ましくも感じた。彼は大きな溜息をついて、自分が彼らと同じ年齢だった頃を思い出した。

それは決して彼らのような輝かしい過去ではなかった事は確かである。少なくとも彼の田舎町には男X男が集まるエリアもなければ店もなかった。そもそも、自分がゲイである事も知らなかったし、同性を愛する人々が存在する事すら知らなかった。そういう意味では彼は青春時代を奪われたのかもしれない。

？

バスがハイドパークコーナーにさしかかった頃、崇史を無視したバスが故障の為停車していた。もうあの時からかなりの時間がたっているのに、まだ辛抱強くバスの復旧を待っている人が大勢いた。下車を余儀なくされた乗客達はバスに気が付くと一斉に駆け寄ってきた。でも、このバスには全員が乗れるスペースはなかった。

？

乗車できたのはハイドパークで降りた数人分だけである。先程崇史をからかった青年達はバスに向かって罵声を浴びせていた。そして、再びバスは彼らを残して無情にも発車した。

？

崇史が降りるランドパークの近くに来ると二階にいる乗客は皆眠っていた。いびきをかいている人や、よだれを垂らしている人もいる。彼らは皆爽快で美しい表情をし（きつと楽しい彼らを満足させる夢を見ているに違いない）、純粹で若いすべすべした肌をしていた。彼らを見ていると彼らの持つ力強いパワーや純情な青い幸せな気持ちも自分にも感染するような感じがした。

？

崇史はランドパークに着くとそんな彼らを置いてバスを降りた。そこから彼の住むフラットまで瞼が閉じそうになりながらふらふらと歩いた。ベッドに入りやすさと気持ちよく眠るのを想像しながら。彼はもうほとんど夢の中に入り込んでいたような気がした。だが、思いがけなくフラットの扉の前から自分の名前を読んでいる誰かがいるではないか。崇史はその人物を見てがっくりと肩を下ろした。今最も会いたくない人物〃李がそこにいた。

「やあ、李君！こんな遅くにいったいどうしたんだい。僕はもう今晚はくたくたで何もできないよ」崇史は諦めて帰ってくれるのを期待しながら、疲れきった様子でそう言った。

「I am tony. 僕をトニーと呼んでと何度も言っているのに」トニーすなわち李は崇史が疲労しているかどうかなどおかまいなしに話を続けようとした。

「トニー。ホントに今日は駄目なんだ。帰ってくれないか」後もう少して素晴らしい夜の一幕が完成し閉幕しようとしているのに、とんだ邪魔者が入ったものだ、と、半ば諦めながらいらいらを隠そうともせず、そう言い放った。トニーはくねくねと体を揺らしながら崇史に近寄った。あゝ彼は何て今晚の舞台にふさわしくない人物なんだろう、げんなりしながら崇史はトニーを見つめた。

「ん」。そんな意地悪な事言わないでよ。今、私が何をしていたのか知りたくないの？」トニーは崇史が嫌がっているのを見て、わざと更に女性っぽさを強調した言葉で崇史にすり寄りながら言った。

「悪いけど。僕は興味ないね。で、何してたの？」崇史は嫌悪感をいっぱいに漂わせ、あからさまに邪魔くさそうに質問した。トニーは待っていましたと目を輝かせながらルイヴィトンのバックの中から財布を取り出した。

「タカシモリーもどうしたの？」パジャマ姿のジエーンが不審そうにフラットの玄関扉の隙間からそう言った。

「ジエーン、I am tony. 何度言ったら分かるの。それよりあなたにも見せてあげるわね」そう言いながらフラットの扉を

勝手に開け中に入ってしまった。彼は強引にずかずかとダイニングルームのソファに座り込んだ。「私今とっても喉が渴いているの」と物欲しげに崇史の目を見た。崇史は肩を怒らせながら、側にあったコップに水道水を入れ、音をたててそれをトニーの前に置いた。トニーは大げさに驚き、もつたいぶりながら、財布の中を見せた。その中には1000ポンド近くも入っていた。「そのお金はいつたいどうしたんだい？」崇史は少しずつ目が覚めていくのを感じた。

「どうしたと思う？今日の顧客が私を気に入ってくれて、こんなにもお金をはずんでくれたの」

崇史もジェーンも唾然とし目を見合わせた。李すなわちトニーがエスコート（売春夫）であるというはごく一部の人々の秘密であった。ただ、崇史もジェーンもその事実は疑わしいと相手にしなかった。いったいどんな物好きがわざわざお金をだしてまでトニーを買うというのだろう。トニーの容姿はお世辞にも美しいとは言えなかった。醜い？決してそういうことではないのだけれど、不健康に見える程色白で、怠惰な生活によるものと思われる肥満、それに彼のファッションセンスは異常だった。僕がルイヴィトンの店員だったら間違いなく彼には商品を販売しないであろうと崇史は思った。もっとも李の持っているルイヴィトンコレクションの数々は本物だとは思えないけれど。そして、彼は化粧をしていた。何より問題なのはトニー自身は自分が絶世の美男だと確信していることであった。トニーが完全にメイクアップした時、道行く人は皆、驚いて彼を振り返った。そして、彼には未だかつて恋人がいない。トニーはその理由は自分があまりに美しい為に人々が振り返り、また高嶺の花的な存在な為に皆声をかけずらいのだと断言していた。

ジェーンはたびたびこのように言った、「なんてかわいそうなたー。彼はどんなに馬鹿にされ笑い者にされているか気づいていな

いんだわ」と。「でもある意味幸せかもね。彼自身は世界一の美男だとそう思っているんだから。僕なら現実を知ったらとても生きていけないよ」と崇史はうんざりしたように言った。そして、二人はいつも大きな溜め息をついた。二人ともトニーが嫌いという訳ではないのだけれども、何かあまりにも世間離れしているというか、超越しているというか、訳の分からない彼の行動にただただ戸惑うばかりであった。

崇史とジエーンは無理に驚いた様子を見せ、トニーを褒めなんとかフラットの外に連れ出し、そして、バス停まで彼を見送りに行った。彼がバスに乗ると、二人は足早にフラットに戻った。その間、彼らは無言であった。それに、彼が持っていたお金は実際には体を売って得たお金ではない事は明白だと思っていたし、万が一そうであったとしてもあまり関心がなかった。彼らは何度もトニーについて話し合ってきたので、もう彼を話題にする事も疎ましく感じていた。結局は彼を変える事はできなかつたし、救い出す事もできなかつた。何を言っても彼に本当の彼の姿を見せる事ができないのだ。なぜならトニーは彼らの助言は彼らの自分に対するひがみややっかみからくるものだと思われ、全く受け付けようとしなかつたからだ。

時計の針が夜中の三時を指した頃、崇史はようやくベッドに入る事ができた。そして、もう次の瞬間には彼はぐっすり寝入っていた。
た。
？

第2章

何かびっくりしたような感覚で目が覚めた。とても長い夢を見ていたようで、それでいて、その内容は一切覚えていず、実のところ夢を見ていたのかどうかすらはつきりと覚えていない状態、いったい何が起こったのか、しばらくの間分からなかった。

一瞬考え込むようにして俯いたが、次の瞬間、昨日の様々な映像がいつそうの輝きもって崇史の頭の中に蘇った。彼はしばらくの間、至福の時を味わった。彼は反射的に、枕元に置いてある携帯電話を確認した。『きつとウィリアムからメールが届いているに違いない！』だが、彼の期待に反して、そこには誰からも着信はなかった。

その失望感が興奮状態の崇史を空想の世界から引き離れた。閉め切った部屋はどんよりとした空気で充満し、床にはゴミが散らかっていた。そういえば、もう何日間も換気や掃除をしていない。彼は急いで下着を穿き（彼は裸体で寝るのが健康に良いと信じていた）、窓を勢いよく開けた。ロンドンには珍しく眩いばかりの日光が差し込み、冷たくて清新な空気が部屋に入り込んできた。その美しい冷気が彼を蘇らせた。

崇史はいつもより自分が何だか軽くなったような、さっぱりしたような、晴れ晴れとした空気に包まれていることに気付いた。きつと昨日の最高の体験が彼そのものを変えてしまったに違いない。

台所に入ると、フラットメイトの一人であるデイビットがもの凄いい勢いで朝食を食べている最中であった。崇史は彼の真向かいに座った。眺めているだけで楽しくなるような彼の食事の勢いである。

「今日はいつもより早く起きて来たけど、何か特別な事でもあるのかい？」デイビッドは早口にそう言った。

そう言えば、いつも土曜日は、僕が起きる時には誰もこのフラットにはいない。崇史は時計を見た。時計の針は六時を少しばかり過ぎた所を指していた。毎週土、日曜日は八時頃が起床時間なので、早すぎる時間だ。だが、わずか三時間の睡眠にしては素晴らしい目覚めだ。

「いや何もないよ。ちょっと早く起きてしまったようだ」

崇史の返答に対して、デイビッドは軽くウインクをした。彼のウインクには挨拶程度のものであって、他意は含まれてはいないが、欧米人がよくするこの種のウインクにはいつもどぎまぎさせられる。崇史は恥ずかしそうに軽く肩を上げた。その間にも、パンやサラダをどんどん口の中に押し込んで飲み込んでいる。先日も彼がチキンを一羽丸ごと食べているのを目撃したばかりだ。今日のデイビッドの姿は記憶のページに組み込まれ、きつと日本に帰った後、彼の驚異的な食欲について家族や友人達に話して聞かせることだろう。

上機嫌な崇史は、続けているいろいろな話をしようとしたが、デイビッドには時間がないらしく話を遮断するかのように手を挙げて、最後に「ウォー」と叫び声をあげてオレンジジュースを飲み干した。そして、「良かったら残りのものを君にあげるよ」と、またウインクをし、子供っぽい満面の笑みと美しく並んだ真白な歯を見せて仕事に遅れないように急ぎ足で彼は行ってしまった。

テーブルの上には食べ残しのパンやらサラダ、ソーセージなどが散らばっていた。とても食べる気など起こらない。「やれやれ」と独り言ちて、テーブルの上を片付け始めた。デイビッドは陽気で素

晴らしい性格の持ち主だが若干清潔感に欠け、整理整頓が苦手だ。崇史はそんな大人になりきっていない少年のような彼を思って一人微笑んだ。

彼は一つの選択肢であるもう一度ベッドに戻って寝るという事を止めて、すがすがしい朝を満喫する為に、公園の林道を歩く事にした。

崇史のフラットがあるホランド公園には、まだ七時前だということに、もうたくさんの人々が散歩やジョギングをしている。歩いていると清々しい空気が体を包み込み、一秒ごとに体の細胞が新しくなっていくようであった。いろんな種類の小鳥やリスが側を通り過ぎて行く。彼はゆっくりと歩いて木の葉にふれたり、或は少し寝そべってみて草の香りをかいでみたりした。崇史は立ち止まって、念の為、また携帯の着信を確認した。だが、もしかしてと思う気持ちはまたしてもあっけなく裏切られた。そして、いつメールが届いてもすぐに分かるように音量を最大限にしておいた。彼は林道のベンチに腰を下ろし再び昨晚の出来事を空想した。

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

そこはまるで異次元のような世界であった。あらゆる者が受け入れられて、あらゆる事が許される。美しく化粧し着飾ったドラッグクウイーン、激しくキスをする男達。空中には光線が流れ、テクノが鳴り響いている。ほとばしる汗。若々しい汗。

崇史はただ一人その世界から離れて、二階の壁にもたれて階下を眺めていた。ホールでは若者達がテクノにあわせて、思い思いにダンスをしている。彼はある一人の男性を見ていた。彼の鍛えあげられた肉体と、真つ黒い肌、そして何よりも柔らかくて分厚い唇。崇史はやさしくて甘い笑顔のその黒人と想像の中でキスをした。彼の大きな唇は崇史のそれを覆った。だが、もう一度彼の方を眺めると彼の腕は若くて、かわいらしい青い目をした男の子の腰にあった。崇史はあっけなく振られたのだ。

崇史はもう別の男性を見ていた。彼にとって、自分以外の全ての者が美しく輝き、決して自分の手には届く事ができないように思えた。この二階の通路が自分にとっては限界、もうこれ以上は踏み込めないような気がした。彼はがっかりしたように溜息をついた。どうしても勇気がでてこないのだ。

でも、それでも良かった。崇史は十分に満足していたのだ。きつと来たるべき時に運命の赤い糸で結ばれた未来の配偶者が自分の元に来て来る。神様がその人物を選んで下さる。『僕はただ待てばいいのだ』そのような運命的な出会いを期待していた。それは単なる期待だけではなく必ず来るものと思っていた。

だが、階下に広がる世界はなんて美しいのだろう。自分もその世界の一部になりたい。彼らと同じように光線の中を羽ばたきたい。そして、彼は再び空想の中を舞い始めた。

その時、ある人物がしらしらしく崇史にぶつかった。一瞬、びくっとしてそのぶつかった者を目で追った。その男は少し歩いて振り返り、意味ありげな視線を彼に投げかけた。崇史はがっかりしたように、またホールに視線を戻した。いやらしい視線が彼には受け入れ難かったのだ。その男は怒ったように何やら罵声を浴びせた。だ

が、大音響の中、何を叫んだかはとも聞き取れなかった。崇史は彼を完全に無視することにした。「僕を罵るなんて彼は所詮その程度の心の狭い人物だよ。彼は僕が待っている人ではないのです。全然違うのです！」と崇史は心の中で呟いた。もしも、先程のクールなカリビアンが側に来たら僕は彼を受け入れるのに。彼はきつともっとセンスの良いシグナルを送るのだろう。それに、もしもは常にありえない。あくどうすれば彼のような人物と関係を持てるのだろうか。神様どうか教えて下さい。崇史はまたしても重い溜息をついた。

そして、『待っていても恋人は現れないよ、もっと積極的に自分から行動しないと』『手当り次第にあたれば、きつと恋人が見つかるよ』など何百回も複数の友人から説教された言葉が頭の中をぐるぐる回っていた。やはり、彼らの言っていた事は正しいに違いない。目の前に白馬に乗った王子様が表れるなんてありえないに決まっている。

その時、崇史はある視線に気が付いた。少しの間、気が付かない振りをしていたが、その視線は一向に自分から離れようとしなかった。崇史はそっとその源の方を見た。そこには自分をいたずらっぽいで見つめて、自分に微笑んでいる青年がいた。二人の視線は少しの間絡み合った。男は崇史に向かって小さく手を振った。崇史は周りを見て彼が手を振っているのは自分に対してである事を確かめてから、軽く手を上げた。

その後、その男「ウィリアムは当然のように自信ありげに崇史の方に歩いて来た。それはまるで拒絶される事を知らないかのようにであった。ウィリアムは崇史を以前から知っていたかのように自然に彼の心の中に入り込み、崇史もまた、彼にはほとんどあり得ない事であったが、何の緊張もなくウィリアムを受け入れ話す事ができた。

つまるところ、彼はまさに崇史が長年思い描いていた人物そのものであった。崇史はまだ彼の何についても知らない。だが、すでに彼はもう全てを知っているような感覚であった。なぜなら彼はずっと僕の心の中にいたのだから。この感覚こそが崇史が長年待ちこがれていたものであり、また、たった今、彼を取り巻いている感情が、彼が以前から想像していたものとあまりにも符号していた為に、彼はもう運命なるものを確信していた。

だが、繰り返して言っておかなければならないのは、崇史はまだウイリアムの全てを知らない。それにも関わらず彼は全てを知っていると、まるで前世からお互いが恋人同士だったのですよと言った具合に錯覚していた。これは、何の根拠もなく完全に一方通行の感情であった。

ウイリアムは崇史の側に立つと、手をそつと彼の腰にまわして、彼と同じように階下の様子を眺めた。崇史にはそれが心地良かった。ずっとそのままであつた。

ウイリアムは突然、崇史の手を取って光線の中を歩き始めた。崇史は周りの人々が自分を羨ましそうに眺めているようにみえた。意気地のない彼はどこかに消え、今は完全に、先程まで彼が溜息をついて見ていたその世界の一部になっていた。もう何も恐れる事はないのだ。自分こそがこの舞台の主演なのだから。

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

ケンジントンハイストリーの週末の人混みの中を、崇史は空想しながらゆつくりと歩いていった。もしかして彼の顔はにやけていたかもしれない。特に何かを買うというわけではないが、ストリートにぎっしりと連なるいろんな店を一軒ずつ入って品物を吟味した。普段はあまり興味の無い家具や食器なども、じつくりと品定めをして、彼の頭の中に設定された新たなアパートの一室、それは自分とウイリアムが住む小さな部屋で、このベッドをどこに置こうだとか、どの食器を朝食に使おうだとかを想像していた。

途中、彼はビッグイシューを定価以上の十ポンドも払って「おつりはいらさないよ」と声をかけた。懸命に未来を創ろうとして、必死に道行く人々にビックイシューを売っているその男にも、自分と同じように幸せを勝ち取って欲しかった。どんなに無視されても、冷たい目で見られても頑張っているのだから、きつと夢は叶うよと願うような気持ちでそう思った。そして、その男は大げさに「ありがとう」と言って手を振った。

何か大きすぎる幸福な気分をどのようにしたらいいのか分からなのまま、崇史はウィンドウショッピングを続けた。ほんの数分前まで雲一つなく晴れ渡っていたのに、みるみるうちに雲が空を多い、土砂降りの雨を降らした。道行く人々は大急ぎで軒先に避難し空を見上げている。また別の人は大きく手を振ってタクシーを呼んだ。今も目の前を大柄な男が体を縮めて、バスを目がけて走っている。傘を持っている人々は悠々とそれを見せびらかすかのように闊歩している。急に騒々しく賑やかになったそんな雰囲気は崇史は楽しんでいた。彼は横に立っている見知らぬ男に「こんなに強く雨が降るなんて、服がびしょ濡れだよ」と小言を言った。その男も同意するように肩をすくめた。側に立っていた初老の女性が二人の方を向き、ずぶ濡れになったカーデガンを見せながら、「まったく天気予報はあてにならないね」と不平を言った。彼らの周りにいる数人も頷い

たり、その女性に話しかけたりした。それでいて、誰彼もが実のところは興奮し、またこの非常事態を楽しんでいるのである。

それに、もう雨は小振りになり、南西の空には光が差し込んできている。彼の周りに立っている人々も一人また一人と立ち去っていった。

崇史もまたその場を離れ、十分に週末ののんびりとした午前を満喫する為に、再びハイストリートを歩き始めた。

夢の中を歩いているような気分でいると、思いがけずトニーが道路を挟んで反対側の歩道を見知らぬ男性と歩いているではないか。崇史は反射的に身を隠すかのようにすぐ側のマークス&スペンサー（スーパー）に入りかけた。

「タカシ、ごきげんよう。今、そちらに行くからそのまま動かないで」ととてつもなく大きな声でトニーがそう叫んでいるのが聞こえた。歩道を歩いている人が一斉にトニーの方に振り向き、次には崇史を見た。崇史は恥ずかしさに真っ赤になりながらも、他人の振りをしてその場を離れようと体を動したい衝動をなんとか堪えて、トニー達が道路を渡って来るのを待った。

ちょうどその時、マークス&スペンサーから崇史の親友である克か也ちやが出てきた。克也は崇史やトニーが目の前にいるのに少し驚いたが、満面の笑みで「やあ」と崇史だけに挨拶をした。

トニーは克也を見て急に晴れ晴れとした顔になった。彼は機会がある度に克也に近付こうとする。言うまでもなく克也はあからさまにトニーを避けようとしたが、崇史の前ではトニーを露骨に侮辱する事はできなかった。なぜなら崇史とトニーは親友だと思われている

たからだ。トニーは克也を憧れと羨望のまなざしで見ている。どうにかして彼のグループの一員になろうとアピールをするのだが、いつも空回りしていた。そして、克也の前ではトニーはまるで崇史と大親友であるかのように振る舞った。崇史はトニーの態度が白々しく、利用されているように感じむつとしたがあえて何も言わなかった。

克也はそんな二人の関係を不思議そうに見つめた。それに崇史がトニーに親切にする事が全く理解できなかったし、その行為は間違っていると思つた。

トニーが入るといつもその場が一変する。それでも今日の彼はいつもより控えめであった。きつと克也に遠慮しているに違いない。

トニーはまた新しい友人を連れていた。彼に会う度に彼の横にいる人物は変わっていた。その男性「ジエームズはなんだか戸惑っているようだった。おそらくはまた強引に連れて来られたのであろう。トニーは崇史に意味ありげな目配せをして、「例のお金でこのバックを買ったんだ」とエルメスのバックを自慢げに見せた。今日のトニーは女性っぽい言葉を使っていない。「ふんそうなんだ。凄いな」昨日の金額では本物のエルメスのバックは買えないよと言いたいのを必死にこらえ無理に驚いた。そもそも彼のような人物、まだ若造で社会的地位を確立していない男性がそんな高価なバックを持つのは異様に見える。そして、それを自慢の対象になると誤解し、周りの人々が羨んでいると感じているのがまた滑稽に思えた。

克也は吹き出しそうになるのを必死にこらえていたが我慢できずに笑ってしまった。他の二人もつられて笑いが止まらなかった。トニーは何の理由で笑われているのか分からず戸惑ったが、侮辱され克也をきつと睨めつけた。

「じゃ俺の家で昼飯でも食べる？」笑いをこらえながら克也が皆を自宅に誘った。崇史は驚いて克也を見た。克也がトニーを自宅に招くなど今まで一度もなかった。きつと、トニーの横にいる男性「ジエームズを気に入ったのに違いない。一同は再び歩き出し、ノッティンゲルにある克也のフラットに向かった。崇史の憶測通り彼のフラットまでの道のり克也はずっと少し興奮気味にジエームズと話をしていた。トニーは克也に誘われ有頂天になっていたが、それもほんの一瞬で、克也の意図するところを知りトニーは不満げに克也を睨み続けていた。まるで恋人を横取りされたかのような表情だった。

克也のフラットの中に入るとそこに金がいた。崇史は喜びの表情を隠さず「やあ、レスリー」と満面の笑みで叫んだ。なぜか、金も英語名を持っていた。彼は崇史の理想の男性であった。トニーは金と崇史が嬉しそうに握手をするのを怒ったような表情で見ている。もう誰もトニーに関心を示さなかった。金は軽蔑的にトニーをじっと見据えた。金に見られているトニーはおどおどし落ち着きがなかった。トニーは金を恐れているのだ。

そして彼は突然何かを思い出したかのように飛び上がり、「そういえば今から行かないといけない大切な用事があったんだ」と手を叩いた。彼はジエームズの手を握って慌てて玄関に向かった。

「俺はもう少しここにいるよ」ジエームズはトニーの手をほどきながら冷たく言った。

トニーは助けを求めるかのような目で崇史を見つめたが、崇史ももう少し彼らと話したかったので目をそらした。トニーは怒りに震えながらも部屋から出て行った。

「これで邪魔者はいなくなった」金がそう言つと皆が一斉に笑つた。 崇史だけがなんだか李がかわいそうで笑えなかった。

彼ら三人が楽しそうに会話が盛り上がる中、崇史は再び昨夜の出来事を思い出して微笑んだ。

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

ウイリアムは崇史の目をじつと見つめた。彼の口元はいやらしく歪んでいた。彼は目の前にいる人物「崇史を見つめていただけでなく、想像の中で彼を裸体にし、全身を舐め回していた。少しも視線は崇史の目から逸らさずに、今晚これからするであろうことを思案していた。このまま俺の部屋に連れ込もうか？それともどこかの路地で・・・、いやいや今夜はまだ早すぎる。じっくりと時間をかけなければ最高の収穫には到達できない。

崇史は異様に光るウイリアムの目にたじろいだ。彼の目はまるで獲物を狙う狼の目のようであった。女性の前にいる男達は皆彼のような目をしているのだろうか。本能剥き出しの表情をしている彼は、いったい何を考えているのだろうか。

ウイリアムは突然、崇史を引き寄せ力強く抱きしめた。長く強く永遠に続くかのような時間。崇史はされるがままになっていた。そして、彼自身もずっとそうしていたかった。崇史はウイリアムの胸の中で何度も顔をこすった。

しばらくして、お互いに十分愛を満喫したかのように離れ、ウイリアムは「ちよつとごめん」と言つてその場を離れた。そこには、彼を不安そうに目で追う崇史の姿があつた。彼がどうかまた戻つて来てくれますように、と祈るような気持ちで彼の背中を見ていた。

ウイリアムはトイレに向かう途中、自分の方をじつと見て、後をついて来る何者かの気配を感じた。トイレに入る直前、彼は振り向いて自分に向けられている視線の元を探った。すると、彼の知らない男が自分を敵意の混じつた目で睨めつけているではないか。ウイリアムは彼を完全に無視したが、その男の横にはおどおどして彼の手を引つ張っている青年がいた。ウイリアムはじつとそのか弱い男の子を見て、思い出したかのように、そして、小馬鹿にしたように鼻で軽く笑つた。その瞬間、睨めつけていた男は怒つてウイリアムに殴りかかった。

ウイリアムは軽くよけてあざ笑つた。彼は男の胸倉を掴んで、「はお前の事は何も言わなかつた」「もし　にカレシがいるのを知つていれば俺は何もしなかつたよ」「俺は　を心底軽蔑するよ」とゆつくりと小馬鹿にしたように、そつ言い捨ててその場を去つた。

ウイリアムは再び崇史の元に戻つた。崇史はウイリアムの姿を見てほつとしたが、何か先程とは違つたように見えた。何か怒つているようであり、動揺しているようにも感じた。でも、彼にはその原因が何であるか分からなかつた。

ウイリアムは先程の事件のせいで、崇史に対する高揚した気分が少し冷めていた。今晚はこれ以上崇史と時間をとにもするのを苦痛に感じた。彼は何も言わず崇史の手をとつて出口へと向かつた。そして、もうかなり遅い時刻だよというように時計を見せて、「送つ

だ、決してそれには反応せず、見つめ返す事はなかった。

若干、この夕食の団らんから浮いているかのようなジャックは時折不安げな表情をした。ジエーンは自分だけがこの場を楽しみ、ジャックがそうではないのを申し訳なく思った。彼に楽しんでもらおうと、そして毎週日曜日に繰り広げられる素敵なひと時を共有してもらおうと招待したんだけどと少し言い訳をするように彼を見つめ軽く手を握った。

ルーカスは全ての者が満足げに食事をしている（彼にはそのように見えた）のを観察していた。彼はカリーナを誇りに思った。彼自身は幾分食べるのを控えて、少しでも多く友人に食べてもらおうとした。すっかり食べ尽くされ、しかも、ほとんど何も残っていないお皿を、更に舐め回すかのように最後まで食べているデイビットを見て微笑んだ。

「チエコの男達は世界一幸せだよ。なぜなら、チエコの女性は美人でこんなにも料理がうまいからね」ハベルは心からそう思った。

「それに、愛しくて男性に献身的につくす。少なくともイギリス女のように攻撃的ではない」ルーカスは笑いながら付け足した。

「全く同感だよ。俺もチエコの女性を彼女にするよ」とデイビットは頷き、残りのビールを飲み干した。

ジエーンはからかうように、「全く、どうしてこうなのだろう。何て、男は単純なのだろう。サッカーと女とビール。まったく男って」と呆れたようにそう言った。

男達はいつせいに笑った。この種の会話は毎週決まって繰り返さ

れる。またそれはこのフラットだけではなく、学校でも職場でも世界中で繰り返されている。この話題は彼らに活力を与え男達は満足する。どの国の男達も世界中で一番自国の女性を誇りにし、世界一幸せだと思っているのである。それに、その後必ず彼らは己の国に生まれた事に満足する。

同性を愛する崇史はルーカスらとは同じ想いを共有することはできなかったが、彼らの男らしい、誇らしい様子を見るのは好きだった。

男達はほとんど例外なくサッカー狂である。何と単純な人達なのだろう。ある女性は言った。「ただボールを蹴っているだけのスポーツがなぜそんなに楽しいのかしら」と。また、ジエーンは毎週サッカーのルール（特にオフサイド!!!）について同じ質問をした。これでいったい何度同じ事を聞いたら覚えるのだろうか。だが、ルーカス、或は、デイビッドは毎回丁寧に説明する。まるで今回が初めてであるかのように。そして、説明するのを楽しんでいる。彼らが始めますサッカーに夢中になっている間に、まず前半にジエーンが後半に崇史がシャワーをする。ハーフタイムは残りの四人のトイレ休憩だ。彼らが大量に飲んだビールを一気に排出するかのごとく順番にトイレに行く。この十五分はサッカーを中継していないのにも関わらず、まるでゴールシーンを見逃してしまうのを恐れるかのごとく大急ぎですませる。そして、また再びたった今見たばかりのサッカーについて語り合うのである。恐らく、彼らはジエーンや崇史がシャワーを浴びているのには気が付いていないであろうし、そんな事（サッカーを見ていないなんて）は考えられないであろう。

今晚の試合は彼らのお気に入りのチーム「アルセナル」がチェルシーに二対一で勝利した。彼らは勝利に歓喜し、またビールを飲んだ。その後、いつまでも今晚行われた全てのチームの試合について

議論されるのであった。この時はさすがにジャックすらも興奮していた。

崇史は早々にリビングルームを後にし、明日の仕事の準備、それに英語塾の予習をした。リビングから大声が聞こえる度に彼らを羨ましく思った。「なぜ僕は彼らと同じように会話し、同じように楽しめないのだろうか。不公平だ」彼はそう呟いた。彼ら男達四人は選手のプレイについて、監督の采配について語り合い、方や崇史は選手の容姿、誰がかっこいいとか、誰のヘアスタイルがいているなどそういった方に自然に目がいつてしまうのである。そもそも彼が青年時代、或は、少年時代を少しも楽しめず、彼ら大多数の男達が共通して持っているような思い出は何もなかった。これは残酷な事ではないか。

崇史はいつもと同じように憂鬱な想いを追いやった。考えても仕方がない事、何も生み出さない事は心の外へ捨て去るようになっているのだ。過去は過去であり、取り戻すことはできない。それならばその労力を現在に使うべきであり、そうしないとまた現在は数年後、悲しい過去となって思い出されるに違いない。

ルーカスは部屋に戻ってリュックサックに入った一週間分の下着やら、Tシャツやらを取り出した。それらはカーリーナが洗濯をし、きれいに折り畳まれていた。彼はプラハからロンドンに来てもう一年以上経つというのに未だに洗濯機の使い方を知らない。

ルーカスはその事に何も疑問を抱かないばかりか、それを自分は幸福な恵まれた男だと思っている。洗濯なんてやろうと思えば誰でもできる。簡単さ。でも、俺にはカーリーナがいる、といった具合に。

ルーカスはベッドで寝ている崇史を見た。幸せに包まれているルーカスには彼もまた幸福に見えた。彼は「おやすみ」と言って気持

ちよくベッドに入った。

崇史は最後にもう一度、着信を見落としていないか確認する為に、携帯電話を確認した。でも、やはり、そこにウイリアムからのメールはなかった。

第3章

ウイリアムと最初に出会ったあの晩から、一週間が過ぎた。残念な事に、彼からは一通のメールすら送られてこなかった。今となつては、自分からメールを送る勇氣も、きっかけもなく、悲しさを超えて自分が馬鹿らしく思えた。そもそも、たった数時間の出会いが運命的な関係に発展するなど、冷静に考えればありえない事だった。それなのに、僕は一週間もじつと彼を待ち続けてしまうなんて。

？

その一方で、自分からもっと連絡をとるべきだったという後悔の念もあつた。なぜなら、ウイリアムにとって、きつと自分は彼の大勢いる選択肢の一人にすぎないのだから。それに、彼にとって、あの晩の出来事は別段特別な事でもなければ、運命的な出会いでもなかったはずである。そういうことであるならば、自分が積極的にならない限り、永遠に偶然の出会いを具現化することなど不可能なのだ。残念だが、今回はウイリアムを諦めるほかないようだ。もう手遅れである。何か惜しい気持ち、大きな可能性^{II}ようやく自分の元に来た幸福な未来が、自分自身の自惚れによって、手の届かない所へ、離れて行ってしまつのはあまりに悔しかった。

？

「ウイリアム」また崇史はそう呟いた。心の中では自分が馬鹿だったと諦めたのだが、何度追い払っても、彼の映像が再び脳裏に浮かび上がってくるのだった。彼の汗ばんだ手の感触、暖かく分厚い胸、それに、少年のような微笑。「あゝ」崇史は何度もしたように大きな溜息をつき、記憶の中にあるウイリアムの映像を眺めた。彼を忘れるどころか絶え間なく彼の姿が思い出された。

？

このような落ち込んだ気持ちを一蹴する為に、崇史は再びウエストエンドへ向かった。バスの窓に映る彼の顔はどこか自信なげで、

時折、知らず知らずに溜息が漏れた。今は周りではしゃぐ青年達の姿も、一切目に入らなかつた。

？

クドース（バー）には、すでにこれからクラブへ行くであろう人々で溢れかえっていた。こんなにも大勢の人々がいるというのに、何と出会いというのは難しいのであろうか。「決して、決して僕は相手を選び好みしているわけではないのに」と崇史は呟いた。

？

同性愛者でない人々にとって、ホモセクシャルな人々は遠い存在で、得体の知れないものなかもしれない。だが、彼らが思い描いているより、遥かにゲイ人口は多く、また多様性に富んでいる。ただ、彼らの身近にいる男性或は女性（それはもしかして自分の兄弟姉妹、または息子や娘というのもありえる、そして親友も）が同性愛者であるという事に気が付かない、もしくは事実を無視しようとしているのだ。すぐ側に別の世界が広がっているというのに、その世界に対して盲目な人々が多いのだ。実際、崇史の家族の誰一人として彼が同性愛者である事実を知らない。きつと想像した事すらないであろう。そう、それは彼らにとって決して重なりあうことのない世界なのだ。

？

崇史は一瞬間、クドースに入るのを躊躇した。なぜならば彼はホモセクシャルの男性の多くが異常に強い性的欲望を持っていると思ひ込み（崇史は何十人も男性と性的な関係を持った事のある人物を大勢知っていた）、彼らに襲われてしまうかのように、怖かつたからである。男女の愛がそうであるように？精神的な部分をもっと大切にしかつた。この場所は自分が望んでいるような愛を、求めて得られる所ではないような気がした。きつとここにいる男達はセックスを求めて集まっているのだらうという風に。だが、崇史はすぐにその考えを追い払った。崇史は自分がこの世界の表面、一部分しか見ていない事、そして、あまりにも物事を単純に考えてしまう

のを責めた。勝手にありもしない偏見を作るのは、それだけ自分の可能性や選択肢を減らしているのと同じ事だ。自分の僅かな経験や人から聞いた話だけで、世界を判断するのは全く馬鹿げているに違いない。

？

崇史は大きく深呼吸して店の中に入って行った。すでに獲物を物色している（彼にはそのように見えた）鋭い目つきをした幾人もの男達が壁に寄りかかっていた。彼らはたった今入って来た崇史を見ようと一斉に振り返った。その中の幾人かはつまらなそうに、馬鹿にしたように軽く鼻であしらい、再び元の品定めを始めた。残りの二、三人の男達は引き続き崇史を目で追っていた。彼はその視線から逃げるように、急いで知り合いを探した。そして、彼は容易に克也を見つけた。なぜなら彼はいつも集団の中心にいる人物で、今も数人の男達が彼の話に熱心に耳を傾けていた。それと違って格別彼の容姿には際立ったところは見当たらない。それなのにどこか彼は人の心を引きつける要素がある。

？

崇史は羨ましそうに克也を眺めた。いったいどうすれば彼のようになれるのか。彼はその答えを探そうとしばらくの間克也を観察した。だが、崇史はなぜ彼が特別なのかさっぱり分からなかった。自分と彼の相違点は彼には積極的、或は強引なところがあるように見える。『やはり僕は克也のようにはなれないよ。彼と僕は同一種類の人間ではないから』と崇史は重い溜息をついた。彼は克也のようになりたいと思った気持ちを捨てて明るい表情を作って、克也のいるグループの座席へと向かった。

？

崇史が克也の前に座ると、克也はうれしそうに微笑んだ。崇史は彼のお気に入り友人であった（少なくとも崇史自身はそう思った）。ロンドンに来て何から何まで世話をしてくれたのは克也であった。何もこの世界について知らなかった彼には、その当時全てが斬新で

目新しく衝撃的であった。そんな彼に得意そうにいろんな事を教えてくれたのも克也であった。

？

挨拶に彼らは頬にキスをした。他の数人も克也に続いた。崇史は今だにこの習慣には慣れなかった。いつもドギマギしてしまう。彼らの薄い唇が冷たく感じた。最後に息が荒く、肥満体型の中年の男が彼を抱きしめた。一瞬、彼はたじろいだが、拒否するのは申し訳ない、しかも彼を侮辱することになるであろうと思いきすを受けた。驚いた事に、そして、無礼にも彼は崇史の唇にキスをした。その男は中々唇を離そうとしなかった。舌が唇の間から侵入し、それともにも生臭い口臭が入ってきた。どうにも耐え難く強引にその男を引き離し咳払いをした。そして、そうまでされても、相手を傷つけないように「すいません、急に胸焼けがして」と丁寧に言い訳をした。

？

周りの人達が面白がって笑っていたが、当の本人は文面通り受け止めて「大丈夫だよ。気にしてないから」と崇史を見てにこりとし、横の席を勧めた。崇史は仕方なくその男の隣に座ったが、目は極力合わさないようにした。彼はそもそも、容姿は劣っているのだから、せめて、洋服や口臭に気を付けダイエットをしないと。もし彼があらゆる努力をしてなおも醜男であったとしたら、僕は快く彼を受け入れるであろう、と崇史はそう思った。そして、また彼らは元の話題に戻った。崇史もまた克也の話に耳を傾けた。彼の生き活きた声には元気づけられる。

？

そこここで話されている会話、その中には内緒話(きっと誰かのとっておきの噂に違いない)をしているのであるうひそひそ声、または興奮したように大声を出して叫んでいる男達の轟音、または携帯の音、様々な声や音が混ざり合って大音響となっていた。崇史はそんな喧噪の中、克也の話を聞き逃さないように近寄った。それでも彼の声ははつきりとは聞こえなかった。周りを見渡すとほとんど

全ての人が例外無く話をしている。それも熱心に。いったい皆どんな内容の話をしているのだろう。崇史は飲みたくもないギネスを注文した。アルコールが苦手な彼にとってはどの種類のお酒も同じであった。ただの社交辞令として飲んでいるに過ぎない。彼は旨そうにカクテルやら、日本酒、ビールを飲んでいる仲間を恨めしそうに眺めた。崇史には彼らが接待とかではなく、本当においしそうに飲んでいるように見えた。それに楽しそうだ。彼はまた軽く一口ギネスを口に入れた。決してまずそうな表情を見せないように。心が浮かない時に努めて楽しそうな表情を作るのは何と苦痛なことか。時間がゆつくりと過ぎ、克也らが話をしている内容がともつまらなく聞こえた。

？

そんな中、何か聞き覚えのある声が彼の耳に付いた。崇史は反射的にその方に振り向いた。その音源は彼の心を一週間ずつと覆っていたウイリアムであった。崇史は次の瞬間、何か恐ろしいものでも見てしまったかのようにもう克也の顔を見ていた。彼の胸は高鳴った。ようやくウイリアムに会えたのだ。この一瞬で彼を取り囲む空気が一変した。それはつまらない無関心な時間の流れから熱い激情の瞬間の連続への変化であった。そして、もう一度彼を確認するかのように恐る恐るそつと振り返った。今度はウイリアムが座っている場所をじつと凝視した。彼の目に焼きついた映像はウイリアムが楽しそうに自分の知らない誰かと話をし、全くこちらに気付かず、そもそも自分の入り込む余地がないような完成された映像であった。崇史はウイリアムが自分を忘れ、自分の見た事のない誰かと楽しんでいる事実が悔しかった。そうはいっても今の崇史はマイナスの気持ちよりも彼に対する愛情の方が勝っていた。それどころか少しも彼に対する非難めいた気持ちはなかった。ただただウイリアムが自分からほんの少しの距離にいる事実、今の空間を共有しているという気分、そして、後僅かで、彼と再び一緒になれるだろうという予感が彼を有頂天にした。

?

先程まで聞き役であった崇史は急に饒舌になった。彼の浮き浮きした高揚した気分が彼をおしゃべりにした。きつと間もなくウイリアムは自分に気が付くであろうという期待が、彼をますます楽しい気分にしたのだ。そして、彼の表情も活き活きとし生気が漲ったかのように、克也を中心とするグループは彼のリズムにつられるかのように極めて賑やかであった。

?

ウイリアムがいるテーブルと崇史はわずか数メートルの距離である。崇史の目は克也と彼の仲間の方を向いていた。だが、彼はあらゆる神経を使つて全身でウイリアムを感じ、またウイリアムへ自分の気持ちを送つていた。崇史は自分と彼のオーラが呼応し合っているのを感じた。それは暖かいやさしい温もりで包まれたエネルギーの塊のようなもので、彼らは離れているがお互いがテレパシーを使つて気持ちを送り合っているかのようにであった。

?

ウイリアムは視界の中に崇史を認めた。先程から彼がちらちらとこちらの方を伺っているのにも気が付いていた。ウイリアムはすぐには、彼に声をかけず様子を見るのを楽しんだ。崇史が、自分がすぐ側にいるのに気付き、とつても楽しそうにしているのが心地良かった。そして、ウイリアムもまたますます饒舌になっていった。体の一方の感覚は崇史に集中し、彼を感じ、観察するのを楽しみ、残りの意識は目の前に座っているたった今出会ったばかりの青年Sに集中していた。

?

その青年Sもまた興奮していた。彼は今日、ウイリアムと出会った事に幸運な自分を見た。Sは今後、起きうるであろう様々な可能性が頭の中に展開し有頂天になっていた。Sとウイリアムの波長は完全に一致し、崇史が二人の間に入り込む余地はありそうになかった。

？

ウイリアムは目の前にいるアイルランド系の青年のすべすべした肌、透き通った目に見とれていて。彼のペニスは勃起した。『きつと今晚俺は彼とベッドをとにもするであろう』と彼は青年Sが熱心に楽しそうに話をしているのをじっと見つめていた。ウイリアムは彼が自分に惚れているのを確信していた。もう何をしようとも彼は自分から離れないであろうと。

？

ウイリアムはSが話をしている最中であるのにもかかわらず、それを遮断するかのよう突然立ち上がり、冷たい視線で彼を見下ろした。そして、彼が何かを言おうとするのを口の前に手を持っていき、「トイレに行くだけだよ」とまるで怒ったように冷たく言い放った。ウイリアムはその男性Sの不安げな心配そうな物問いたげな様子を、目を細めて無視し、彼を置いてトイレへ向かった。

？

ウイリアムの頭の中はもう別の事を考えていた。そして、彼の顔はにやけていた。彼はわざとらしく崇史にぶつかり、彼が自分の方を振り向くと何も知らなかったかのごとくトイレへ足を進めた。

？

崇史はくすくす笑った。彼のいたずらっぽさがくすぐったかった。彼は自分が鼻歌でリズムとっているのに気付いた。彼は鼻をクンクンしその場に残っているウイリアムの匂いを嗅いだ。もちろん彼の匂いは巨大な悪臭。タバコ臭、アルコール、汗の臭いに掻き消されていたにも関わらず、彼にはウイリアムの男らしい体臭を感じられたように思った。たった僅かの接触だったけれども彼は十分にそれを味わった。崇史は今、目前のテーブルで話されている平凡な至極一般的な会話がとても興味深い話しのように思えた。彼は何でもない発言に対しても自然に大声で笑ってしまうのであった。そして、それに気を良くした発言者達は一層饒舌になっていった。だが、そんな彼を不安そうに見つめるSの視線には気が付かなかった。

？

ウイリアムがテーブルに戻ると青年Sはほつと肩をなで下ろした。強く握られた手に安心し彼もまた強く握り返した。そして、媚びるようにウイリアムの目を見つめた。その時Sが見た目は野獣の目そのものであった。彼はその目に今晩起こるかもしれない行為を確信した。ウイリアムは少しも視線をそらさず、じつと彼を見つめたまま突然キスをした。じらすかのように彼のキスは離れたりくついたりして安定せず、その後Sのじれったそうにキスを求める尖った唇を見て、ウイリアムはとても深く長いキスをした。

？

彼らのキスは強烈であった。彼らの情熱的な激しいキスはあらゆる視線を浴びた。二人の美声年が演じる接吻はそれはあまりに美しい画であった。その観衆の中には崇史もいた。崇史は他の傍観者とは全く違って、冷徹な目で彼らのキスを見ていた。それはあつてはならないものであつた。彼は今いったい何が起こっているのか理解できなかつた。彼の浮き浮きした気分は一瞬で消え去り吐き下がした。『僕のオーラはウイリアムのそれと絡み合っていたではなかつたか。彼のシグナルは僕に興味を示してはいたではないか。それではあれはいったい何であつたのであろう』崇史の意識は混乱した。結局僕は思い違いをしていたのだ。ウイリアムは少しも自分に気が付いていないどころかすっかり忘れているのだらう。自分はなんておめでたい男であらうか。

？

ウイリアムは崇史が落ち込んでいるのを横目で見て知つた。崇史の表情は暗く信じられないといった風であつた。だが彼にはどうでもよかつた。「俺に近付くのはそんなに容易いものではないのだよ」と無言で言い放つた。あいつは己の地位をもつと理解すべきだつたと優越感に浸つた。ウイリアムは再度崇史を汚らわしい下僕を見るかのような目で見つめた。だが、もう崇史は自分の方を見ていなくなつた。彼を何とかしたかつた。彼をもつと痛めつけたかつた。彼の

ような思い違いをしている男を見るとぞつとするのだ。ウイリアムは崇史から一週間も何の連絡もなかった事（媚びるような、縊るようなメールがくるのを確信していたというのに）、バーに入ってきて一度も自分の前に来て無礼を詫び、許しを請わなかった事に腹を立てていた。自分の想像する恋愛のルールから決してそれではならないのだ。ウイリアムはそれが崇史のシャイで自信の無い性格に起因しているのは知っていた。だが、自分の魅力はそれをも凌駕するものであると彼は信じていたのだ。ウイリアムは先程感じた崇史に対する浮き足たった感情を怒りとSに対する思いとで打ち消した。

崇史はその後、何事もなかったかのように元の会話に戻っていた。幸い誰も彼の動作の異常に気が付く者はいなかった。だが、その後、崇史の耳には克也達の声は一切入らなかった。彼はほんの僅かに聞こえるウイリアムの声を追っていた。そして、あらゆる情報を体全身で感じ、取り逃さないよう神経を緊張させていた。それを見た時の崇史の顔には異様なものがあつた。

ウイリアムは崇史がバーに入つて来た時に、すぐに彼に気付いた。そして、その後崇史が自分に気が付くまで時々彼の様子を目で追っていた。ウイリアムは崇史が先週とは全く違っているのは一目瞭然であると思つた。自信に満ち溢れ活き活きとし、常に喜びの表情が顔に出ていた彼が、今日は頼りなく何か思い詰めたような悲しげな顔をしていた。そして、その原因が自分自身にある事は十分に承知していた。また、これからの自分の行為が崇史をまた元の彼に変えられる事、或はそれ以上の喜びを与えることができるというものも分かっていた。でも、ウイリアムは彼にやさしさを与えるといった種類の人間ではなかった。彼は崇史の運命が自分に握られていることに狂氣的な興味、興奮を覚えたのだ。だがどうだろう、崇史が自分に気が付いた途端、彼の表情は急に晴れ晴れとし活力が蘇つたではないか。そして、また再び自分とSとの接吻を見た後の彼の落胆し

きつた表情を！崇史の運命は完全に自分に握られているのだ。ウイリアムは意地悪くにやりと笑った。『そうだというのに、何と意地のない男であろう。俺の事が好きならば堂々と俺の元に来れば良いのに。ま、どちらにしても俺はあいつを捨てるが』ウイリアムはこれから自分がするであろう様々な事を思案した。

？

崇史は何とか落胆した気持ちを隠そうとして、克也達の会話に集中しようと思命になった。そして、呼吸を整え平静を装った。ウイリアムには何があってもおろおろしている姿を見せたくなかった。彼が僕を忘れてるように、僕はもう彼なんかどうでもいい存在ですよと思いたかった。だが、冷静にしようと思えばするほどその姿はぎこちなく、崇史は完全に克也を中心とする集団から浮いていた。

？

苦しい時間が過ぎていった。元気を取り戻す為、或は全てを忘れて、新たに出直そうとウエストエンドに出て来たのだが、今の彼はあまりに苦しく、堪え難い時間を過ごしていた。そういった様子にさすがに周囲の者も気が付き始めた。

？

「どうかしたの？顔色がすごく悪いようだけど」と心配そうな顔をした克也が言った。

？

「何か悪いものでも食べたのかな。ちよつと胸がむかつくんだ」崇史はそう言つてトイレへと席を立った。確かに今の彼の精神は極度に混乱し吐きそうだった。

？

トイレには小便をする目的以外にもやって来る者がいて大変混雑していた。落ち着いて考える暇も精神的余裕を与える余地もそこにはなかった。崇史は後ろにも人が並んでいるので素早く事を終えて、トイレを離れようとした。だが、その洗面所にまたもやウイリアムが入って来た。彼は明らかに崇史をからかおうと彼を追ってきたの

だ。ウイリアムは鏡に映る自分の顔に対してにやけていた。彼をにやけさせている原因は？その答えを考えることなど到底崇史にはできず、その姿は今の彼が幸福の真つただ中にいる証のように思えた。

崇史はとうとう精神をコントロールできなくなつて、何かが爆発したかのように彼に突進し、すぐ脇に立った。そして思い切つてやつのことで「ハイ」とだけ発した。その顔は青白く、無理に作つた笑顔がそこにあつた。ウイリアムは？そんな崇史を完全に無視し、まるで誰もそこには存在しなかつたかのように彼から離れていった。そこには確かに軽蔑と嘲笑の表情があつた。

崇史は一人呆然と立ちすくんだ。そして、幾人かの見物人が愉快そうに事の成り行きを見ていた。先週自分自身がバス停でやった事を今度はされている。今、苦しいほどにどんなに公衆の面前で侮蔑されるのが気まずいかを知つた。彼は観衆に向かつて叫びたかつた。「今僕を無視した男はほんの一週間前、僕に夢中だつたのですよ！」

そこになかなか戻つて来ないのを心配して、克也が入つて来た。真つ青な顔で立ちすくんでいる崇史を見て、びっくりし駆け寄つた。

「いったいどうしたんだい？もう今晚は帰つた方がいいよ。今日の君は普通じゃない。俺が家まで君を送るよ。それとも、俺の家に泊まるかい？」克也は本当に崇史を心配しているようだった。

「ありがとう。でも、やっぱり家に帰るよ。それに、一人のほうが落ち着くから」そう言つてにっこりした。

崇史は落胆しきつてクドースを出た。これで何もかもはつきりした。ウイリアムは僕を完全に忘れている？無視している。何か自分

の不幸を恨みたい気持ちであった。わずか一週間前の今日、あれほどの大きな幸せを感じたのに、今はどうだろう！！全く（百八程度）違った世界だ。先週以前の自分よりも更に憂鬱な気持ちであった。人間不信？その言葉は適切ではないだろう。でも、ウイリアムはいつたい何をもって行動しているのか。彼は僕の立場、弱い立場を考慮してくれるべきだ。それとも、僕があまりにも意気地がないのであって、彼を批判できる立場ではないというのか。それとも、そもそも僕が考えているような純粹無垢な恋愛なるものはこの世界には存在しないのであろうか。

？
実際、今、回りを見ても目をぎらぎらさせて男達を物色している男どもが大勢いる。『僕は彼らの恋愛対象にはならないのですか？見て下さい！！』 たった今僕の側を通り過ぎたアジア人のがっかりしたような顔を！！』 『僕は彼を満足させることはできないのですか。何をもって君たちは僕を判断しているのですか？』 崇史はいらいらとし、今にも発狂しそつであった。

？
自暴自棄な崇史は先週と同じ道を全く違った感情で歩いていった。輝かしい大英帝国の象徴である広場は、何千年にも及ぶ残虐であり、差別であり悲しみの蓄積であった。それでも、今もなお僅かなお金可能性、そして、成功を求めて世界中からここロンドンに人々が集まり、世界では戦争が繰り返される。人間なんて所詮、動物にすぎない。決して、過ちから学ぼうとしない。現に過去数百年でいった何が変わったのであろうか。崇史は自分の人生に対して、世界の現状に対して絶望しながら帰途についた。

？
ウイリアムは気だるそうにSを見た。どうして自分はこうも人にモテてしまうのだろうか。彼はもううんざりだといった具合に肩を窄めた。ウイリアムは崇史があっけなく帰ってしまった事に落胆した。もう一幕おもしろい出来事を想定してただけに、物足りない気分

であつた。だがウィリアムはまた崇史と接触するであろう事、そして、彼とはベッドをとにもするであろう事を確信していた。なぜ彼にこだわるのか、なぜ彼をそのままにしようとしなのか、なぜ彼に対してそうまで残酷なのか、その答えなるものは崇史の純粹さウィリアム自身には無いものを持つているからであり、また彼の周りにいる者がことごとく失つていゝるものを彼は持つていゝるからであつた。そして、崇史も間もなく彼らと同じようにそれを失うからであつた。

崇史は無性に寂しかつた。そして、惨めであつた。こんな最悪の日を締めくくるのに李ほど適当な人物はいないであろう。もし、今李に出くわしたなら100%無視するであろう。もしかして、怒鳴りつけてやるかも。なんとなく李が今日の悲劇の最後の仕上げをする為に自分に合ひに来ていゝるよゝに感じた。彼は恐る恐る角を曲がつて自分のフラットを眺めた。フラットの前には誰か人がいたがそれは李ではなくジャックであつた。しばらくして、フラットからジーンが出てきた。二人は仲良く手をつないで自分のいゝる方に向かつてきた。彼らはまだ崇史に気が付いていない。彼は誰とも会いたくない気分なので物陰に隠れよゝとしたが、ジーンは崇史に気づいて大きく手を振つた。崇史は軽く手を挙げ無愛想に挨拶をした。でも、幸せいっばいジーンには彼の心の中で起きていゝる悲しみやいらだちに気が付くことはいゝるはずはなかつた。彼女は立ち止まり何やら崇史に話しかけよゝとするのを彼は気が付かない振りをして急ぎ足でフラットに向かつて。「ちえつ、今日に限つて李はいない」崇史はそうぼそぼそつぶやいていららと音をたててドアを閉めた。いゝつも鬱陶しくつき回つてくるのに感情をぶつきたい時に限つてあいつはいない。全くあいつは役立たずだ。ほんの先程まで李が来るのをうとましく思つていたのにも関わらず、いなければいゝないでこれもまた彼をいらだたせた。

崇史は部屋に入り、ルーカスがいないのを知るとなぜかほつとした。そして、ベッドの上につつ伏せになると堰を切ったように大粒の涙が溢れ出てきた。そして、いつしか深い眠りについた。

克也を中心としたグループがいるテーブルは閉店間際まで賑やかに盛り上がっていた。克也は今晚見たウイリアムとSの熱いキスに興奮を隠しきれなかった。彼はいつもウイリアムを羨望の眼差しで見つめていた。ウイリアムは彼らの間ではよく知られている人物であった。克也は自分のグループをウイリアムのグループのようにする事、或は、いつかは自分が彼のグループに入ってみせると強く思っていた。彼は改めて自分を慕って集まってくる友人達を見て、自分が理想としている集団にはほど遠いように感じるのであった。

第4章

恐ろしい悪夢から目が覚めた。たった今、断絶された映像が現実ではなく、夢であったことにほっとすると同時に、崇史は今、悪夢以上の出来事を背負っている事実を思い出した。体は鉛のように重くなかなかベッドから起き上がれない。昨夜から脱がずに着たままっていた服は多量の汗でびったりと肌に貼り付いている。どこといって頭が痛い訳でもなく、体調を崩しているというのではないのだが、今日は一日何もしたくない、ずっとベッドで寝ていたい気分であった。だが、崇史は強引に気だるく重い体を起こし、新鮮な空気を吸う為に思いっきり強く窓を開けた。だが、外は雨だった。窓からは激しい雨のせいで、せっかくの日曜日だというのに散歩をしている人はほとんど見えず、子供達のはしゃぐ声も聞こえない。それに何層にも重なった雨雲は光を遮断し、心を一層落ち込ませるようななどんよりした暗闇がロンドンを覆っていた。

崇史は思い悩んでいる自分が嫌いだった。だが、今の彼はまさに最も嫌いな自分を演じているかのようであった。何度もマイナスなイメージを追い払っては、数秒後にはまた別の更なる暗い映像となつて舞い戻つて来るのである。僕は何てついていない男なのだろう。これはどうにも変えられない運命なのだろうか。彼は先週からの不運を思い出すだけでなく、すっかり忘れていた幼少から現在まで自分に降り掛かった様々な不幸な事をも思い出し、自分にはそもそも幸福な時間を持つ資格がないのだと暗い気持ちになつてしまっていた。そして、彼は思い出したかのように「駄目だ、駄目だ。いつまで僕はぐずぐずしているのか。さあ、元気を出さないと。輝く未来はきつともうすぐやってくるよ」と自分に言い聞かせた。

崇史は、波長の法則つまり悪い気はますます悪い事態を引き寄せ

るといふ事をいつも気にしていた。だが今の彼にはどうすることができよう？ただでさえ自信のなかった人物が完全に侮辱されたのだから。

崇史はシャワーを浴び、歯を磨いた。洗面台に映る自分の顔はぞつとするほど惨めで、これまでの自分が見た中で最も魅力のない男がそこにいた。彼は無理に笑顔を作り、鏡の中にいる自分に微笑んだ。その後、先週録画しておいたお気に入りの番組ポップアイドルとビッグブラザーを見た。これらの番組はどちらも視聴者参加型の番組で優勝者が地位と名誉それに大金を獲得できる。それはまさにシンデレラストーリーを体現できる番組なのだ。崇史はそんな番組が大好きであった。彼がいつも夢想する世界、それに類似するストーリーが実際に見られるのだから。それに、門戸は誰にでも開かれている。よって、彼にも優勝者になる可能性は0%ではないのだ。片手にはリモコンを、もう一方の手にはジャンクフードを持って。全ての思考を現実から逃避させ、悲しみの感覚を麻痺させた。そして、床に脱ぎ捨てられた服を着て、髪をなで付け、香水を吹き付けた。

崇史は今、空想の世界にいた。彼はポップアイドルの決勝戦でマイクを手にUNCHAINED MELODYを熱唱している自分を見た。その人物は燦然と輝いていて、英国国民の羨望の眼差しを受けていた。『さあさあ、元気を出して、彼こそが本来の自分の姿なのだから。今の僕は僕ではない他の誰かだ。きっと、あとほんの少しで僕はその世界に到達できるはずだよ』彼はそう強く自分に言い聞かせた。崇史は窓ガラスに写る自分の姿を見た。その姿は少し自信無げではあったが先程の絶望的な無気力な彼ではなかった。

崇史は特に決まった目的地があるわけでもないが外に出た。先程の大雨は一時的なものだったらしく、雲の間から太陽の光が差し込

んでいた。そして、子供達は雨が止むのを待ちかねていたのか、もう楽しそうにサッカーをしている。彼はそんな無邪気にはしゃぐ少年達を置いて、ホランド公園を通り抜け南へと歩いていった。途中アールズコート駅を越えテムズ側のほとりに出た。そこは、ロンドンの他の部分とは別世界で、全く種類の異なる景観（それは美しいものだった）が広がっていた。川辺にはいくつものボートが停泊し、対岸には川沿いに連なる自然の中でジョギングする人々、そして、こちら側には長閑な川の流れを眺めながらビールを飲み昼食をとっている人達がいる。無数のビルが立ち並び、バスや自動車、それに頭上に飛行機が飛び交う喧騒の中を、ビジネスマン、ビジネスウーマンが闊歩するロンドンシティとは対照的にゆっくりと時間が流れているようだ。

この辺りの住民は移民の割合がぐんと減りイギリス人（アングロサクソン人）が大半を占める。彼らはこんなにも素晴らしい景色を楽しんでいるのだ。世界中からやって来る移民は仕事やら勉強やらで、景色や空間を楽しんでいる余裕などないのかもしれない。そもそも自然を楽しむのを目的としている人々はロンドンを選ばないであろう。でも、ロンドンにはそういった人々が知らないような隠された秘密の美しいエリアがたくさんあるのだ。

崇史はそこで何十分も同じ川の流れを見ていた。そして、その流れを見ながらウイリアムとの事、そして、今までの二十数年間の人生の中で起きた様々な悲劇（失敗の数々）を思い浮かべていた。それは残酷に崇史の心を切り刻んだ。彼は真つ暗闇にいるかのようで自分自身を侮辱し、罵声を浴びせた。『何をやっても駄目なのだ』『人間失格だね』『そもそも君はきもいのだよ』『努力するだけ無駄ですよ』『自分の顔を見てごらん、それが全ての答えだよ』『次々に浴びせられる屈辱的な言葉、それは、彼の心の中に住む住民からの声だった。それを彼はじっと聞いていた。その時の彼には何の感

情もなかった。怒り、悲しみ、反抗心そういつたのはまるでなかった。彼はじつと耐えていた。その姿は中学、高校生時代の彼そのものだった。いやいや実のところ生まれた時からそうだった。崇史が記憶する最も古い映像は、両親が彼の容姿を批評する会話であった。大人の彼らは幼い子供には分からない？或は聞こえていないとでも思ったのか、自分達の子供の醜い鼻がどちらに似たのかで言い争っていたのである。その時の悲しい気持ちは今も浄化されずにじつと心の奥底に潜んでいた。だから？もう今さら何が起きても、動じませんよ。とことんまで耐えてみせる。崇史は悔しさに震え拳を強く握った。

崇史はまだまだ無限に続きそうな連続する悲壮な感情の流れを断ち切つて、何度もしたようにそれらを見えない箱に詰めて川へ流した。不運の連鎖を終わらせる為に、もう一度人生をリセットする為に。

体からどつと鉛が出て行くかのようで、体が幾分か軽くなった。それと前後して、新しいイメージが次々に脳裏へ入り込んでくるように思った。そう、崇史は強引に自分を高ぶらせていた。人工的に造られた快樂を彼は得たのだ。その感情は彼を幸福へと導いてくれるのである。少なくとも次の悲しみまでは。だが、彼は自分がたつた今とつた行為に空しさを感ぜない訳ではなかった。なぜなら結局は、それは根本的に事態を解決させる訳でもなく、一時しのぎの逃げ道であつたからである。それでも、それより他の方法を彼は何も知らなかった。この解決策が彼にとっての唯一の手段であつた。

「いくぞー」と対岸に向かってあらん限りの大声で叫び、最後に残った心の深淵に潜む鬱憤を空へぶちまけた。崇史はこれで完全に解放されたのである。マイナスの塊、ストレスの山、あらゆる負の気持ちで雁字搦めにされた体、そして、精神は呪縛から解放され

たのだ。それじゃ今から何を食べようかな。インディアンそれともチャイニーズ？それに今までずっと節約していたんだから今日はいっぱい欲しい物を買ってみせる。そうそう、美容院にも行かないかね。あゝ人生は何て素敵なんだろう。彼の心は興奮していた。

彼は、自分はそもそも単純な男であると決めつけていた。自分はいかに大きな不安や心配を抱えられない。仮にそれが降り掛かったとしても、それは爆発しまた元の自分に戻るのである。そして、そうなるように彼は自ら努力していた。実際の彼は繊細であり、傷つきやすい性格であったが、彼はそれを嫌っていた。というより、そもそも自分の性格がそのようであることを認めなかった。

崇史は今までの人生の二十数年間があまりにつらく長いものであったと思っていた。しかし、彼はその原因がつまるところ自分自身の心に問題の根源があるのを発見した。その大きな事実を突き止めた後、彼は強引に物事の見方、捉え方を変えるようにしたのだ。それは一種のマインドコントロールのようなものかもしれない。いやいやそうではなくて心の解放である。つまるところ日本社会の価値観、それはいつの時代の日本人が作ったものかは分からないが両親、そして、祖父母の価値観である。その凝り固まった価値観、雁字搦めにされた呪縛からの解放なのである。その結果、全く同じ生活が大きく姿を変えて感じられるようになった。もう少し詳しく言うのなら、同じ生活の中に様々な感動や喜び、或は勇氣なるものが隠されているのに気が付いたのである。でも、それらはそれまでの彼には何の意味も持たず、感じる事すらできなかつたものばかりである。そして、平凡な無味乾燥な生活がまるで違ったものとなった。それによって得た勇氣や感動は更にずっと人生の可能性を無限のものにした。今、彼がロンドンにいるのも自分自身の解放から得た勇氣から生まれた行動による結果である。

そして、何より最も大きな違い、現在の自分と過去の自分の大きな違いは複雑な考えをする人物から単純に物事を考えるようになった事であろう。あれやこれやと考え過ぎたところで、誰も幸福を運んで来てくれないのだから。それならばいっそ全てを簡単・率直に、或は、少しはいい加減に捉えた方が良いのではなからうか。それは不安、恐怖、懊惱、そして落胆からの解放である。

崇史はアールズコート駅に戻り、カムデンタウンまでの切符を買った。地下鉄に乗車すると改めてここロンドンには人種の坩堝であることが実感させられる。肌の色の違い、服装の違いそれに四方から今までに聞いた事のない何種類もの言語が流れてくる。イギリス人と同じヨーロッパ人も、ロンドンに来るまでは気が付かなかったが、外見上の違いがある。驚いた事にこちらの人は日本人も中国人もタイ人も外見上区別がつかない人が多い。

それだけこの都市は人々を引きつける何か大きな魅力をもっているのだろうか。それはいったい何であろう？決して経済的な理由だけではないように思う。自由？平等？包容力？それとも？。一攫千金を求めて、或はまじめにこつこつと小金を稼ぐ人々、また別の者はイギリスの福利厚生を悪用しずる賢く生き・・・、それに旅行者、売春婦（夫）、フリーター、ニート、テロリスト、動物愛護者、宗教家、ホームレス・・・、あらゆる者が世界中から集まる都市それがロンドンだ。（では僕は何に属するのだらう、日本人、男、ゲイ、仏教徒、それに仕事もしている・・・）

そうやって、ぼんやりと空想したり、前向きに人生を考えて、心地良く身体のリズムが回復し活性化してくると、偏狭な事柄以外にも思考が回るようになった。そう言えば昨夜とつても心配してくれていた克也にメールを書かなければ。きっと今も心配しているに違いない。携帯を手に取るとそこには五通もメールが入っていた。や

っぱり心配をかけてしまったんだ。こんなにもたくさんメールを送ってくるなんて。彼の友情に感動すると同時に、迷惑をかけてしまったことに対して反省した。それに早く返事を出さないと彼の事だから今にもフラットに来かねない。もしかして、もう来てしまっていて、部屋から応答がないから玄関で慌てているかも、という焦りが彼を急がせた。

だが驚いた事に確かに一通は克也からであったが、残りの四通全てがウイリアムからのものであった。ようやく取り戻した心の平安は一瞬で吹き飛び、高鳴る鼓動を押さえながら震える手で内容を確認した。

「君は残酷な人だね。昨晚同じバーにいたというのに君は俺を無視した。どれだけ悲しかったことか。俺はずっと君が楽しそうに君の仲間？恋人？と話をしているのを見ていたよ。すぐ側に俺がいるというのに君の態度はなんだい、君は本当に冷酷な男だね」

「君は一週間、俺に何も連絡をしてこなかった。そして、昨晚はまるで俺がいないかのように振る舞った。それはそれで構わないよ。でも、無視するなんてあんまりじゃないか。俺は勇気をだして君の体に触れたというのに、あの時の君の反応はなんだい？まるで俺を物にでもあたったかのように・・・」と厭味の含まれた内容が書かれてあった。

次のメールには「やっぱり君は無慈悲な人間なのだ。君は俺に向いて返事をくれない。今すぐにメールをくれ」そして、つい三十分前に届いたのには「分かった。じゃ諦めるよ。俺にはノーチャンスということだね。さようなら」という内容であった。

はっとした。正常に頭が機能しなかった。いったいウイリアムが

何を言おうとしているのか全く理解できなかった。崇史はもう一度同じ文章をゆつくりと読み返した。それでもまだウイリアムが意図しているのが何なのか掴み取る事は容易ではなかった。彼は残酷な男だ。彼が悲しんでいるとは思えない。彼は僕をじらすのを楽しんでいるのだ。僕が彼を無視しただって！そんな事は言わせない。僕は彼にはつきりとハローと言ったはずだ。

でも、このような憤りはすぐに消え失せ、返事をしよう、まだウイリアムは僕を待ってくれるかもしれないといった気持ち支配的になっていた。崇史は克也にメールを書く事をすっかり忘れ、まだ彼からのメールを開けてすらいなかった。頭の中ではどういった文面が一番効果的か、或はウイリアムを怒らせないで済むのかななどを考え、早くももの凄いスピードで文章を構成していた。

数時間前のどんよりした気分は完全に消え失せ、人工的に作ったのとは違う希望に満ちた強いエネルギーが崇史を覆っていた。だが、彼はウイリアムの偽りを知っていた。メールの文面をそのまま受け入れてはならないというのは分かっていた。それでも、彼は心の警笛を何の躊躇もなく無視し、結局は自分の望んでいる偽りを信じそのまま受け入れてしまった。

今、崇史は幸せであった。なぜなら、第一に再びウイリアムと赤い糸が結ばれ直した事、第二にウイリアムは決して自分の魅力を否定した訳ではなかった事が分かったからだ。そういう訳で、今日の前半を費やして得た結論は破棄されて、彼の頭の中には新しい未来像が次々に現れていた。当然の事ながらそれらは虚像であり、実現される可能性は限りなく低い。それでも、彼は1%の確率にかけた。いや、もしかして彼には数十%の確率に思えたのかもしれない。

崇史は震える手を押さえながら必死にメールを書いた。そして、

「どうか返事が来ますように」と念じるように神様に祈りながら送信した。その時の彼の顔には、必死で深刻な表情の中に、時々思いつき笑いのような笑みが浮かんでいた。

その後、彼はもう一度昨晚の出来事を見つめ直し、隅々まで思い出していた。だが、その映像は先程まで何度も思い出したのとは百八十度違って、全く別の角度から見られていた。一つ一つのシーンを思い返していると、はっとするかのごとく、別な意味合いが出てくるのであった。もしかして、ウィリアムも自分と同じように勇気が無く何も言えなかったのかもしれない。もしそうならどうして彼を非難できようか。彼はきつとシャイなのだ。よくよく考えてみると彼は確かに緊張した張りつめた表情をしていたかもしれない。崇史の頭の中のウィリアムの誇張された軽蔑、嘲笑の表情は悲しげな思い詰めた表情にすり替えられていた。彼の頭の中に記憶されている映像はハイスピードで修正され新しい画像として作り替えられた。崇史はもう一度ウィリアムと会って話したい、真意を確かめたいと強く思った。

カムデンタウンについた頃にはすっかり気分が晴れていた。先程の人為的に作り出したプラスなイメージではなく、自然に湧き出てくる笑顔がそこにはあった。彼の目に入る一つ一つの物が新たな輝きをもって見え始めた。その時、二週間後の土曜日がルーカスの彼女カリーナの誕生日である事を思い出した。彼女への贈り物に何を買おうかな。先程買おうと決心した自分自身へのご褒美を買うのを諦めて、彼女のプレゼントを探す事にした。それを受け取ったときの喜びの表情を思い浮かべながら。そして、見た事のないルーカスの彼女カリーナを、ルーカスからよく聞かされる彼の理想の女性像を基にして、頭の中に思い描いた。崇史はルーカスなる人物があまりに素晴らしいので、きつと彼女もまた彼と同じように輝きを放っているに違いないと思った。幸せな気分は崇史の想像力を増幅させ、

ますます彼を幸せな気分にしていった。そして、その高揚した気分はまたたくさんの幸せを運んでくれるのだ。

ウイリアムはメールの宛名を見てにやついた。彼は崇史からのメールをすぐには開けずに、そのままにした。ウイリアムにとってそれはどうでもよい価値のないものだからか？彼には分かっていた崇史が必死になって自分にメールを送っている事を。崇史の懸命さと自分の感情とのギャップ。そのそれぞれがお互いに対して持つ気持ちの格差は自分がそのメールに対して無関心であればあるほど広がっていくようだった。

ウイリアムは考えた、いつそ永遠にそれを放っておこうかとも。果たして一瞬でも崇史が愛するに値する人物かどうかも疑わしい。実際、今、自分のすぐ側ではSが眠っている。それじゃSが俺にとってふさわしい人物かどうかだ？そんなことは全くどうでもいい。ウイリアムは何か汚らわし物でも見るかのように、自分の横で気持ち良さそうに眠っているSを見下ろした。ウイリアムにとってSも彼の一時的な玩具にすぎないのだ。ウイリアムはまだ一度も本当の意味で人を心から愛した事がないのかもしれない。もしも、純真な愛を経験したことがあるのならとても彼がするような相手の気持ちを軽視するような事はできないように思う。

だが、ウイリアムはもう別の事を考えていた。彼は美しすぎるSの裸体に溜息をついた。そして、美しい者は美しい者と引かれ合うものだと、満足したかのようにSを力強く抱きしめた。その後、ウイリアムは邪魔くさそうにやれやれとぼやきながらようやく崇史からのメールを確認した。

「こんにちは。たくさんメールありがとう。僕の事をこんなに強く思っていてくれたなんて、とってもうれしいよ。それと、僕は少

しも君の気持ちを理解していなかったようだね、ホントごめん。実は、僕も君に振られてしまったかと思つてずっと落ち込んでたんだ。でも、これでほつとしたよ。では、またメール待ってます」

ウイリアムは途中で読む気がしなくなった。それにしても、なんて馬鹿馬鹿しい内容であろう。まるでセンスのない文面。俺はこれからもあいつと関係を持たなければならぬのか。彼は崇史を思い描いた。自分とあいつとの間には少しも重なり合うところがない。価値観がまるで異なっている。ただ、崇史は限りなく純粹である。それにびっくりするほどかわいい。彼を味わいたい、犯したい、痛めつけたい。ウイリアムはそのシーンを思い浮かべて意地悪くにやりとした。

そして、ウイリアムは仕方がないなと溜息をつきながら、実際はまんざらでもないのだが、崇史へのメールを書き始めた。

ウ「やっと返事をくれたね。俺をじらすきかい？」

ほんの短いメールにも関わらず、そして、一時間以上も返事しなかったのにも関わらず、メールを送信してすぐに崇史からの返事が来た。ウイリアムは今度はすぐにメールを確認した。崇史がどんな内容を書いてくるのかとても興味深かったのだ。

崇「よかった。僕のメールを見てくれたんだね。僕はほんのつい先程君のメールに気が付いたんだよ。無視していた訳ではないんだ」
ウイリアムもすぐにメールを送った。

ウ「それじゃ、昨晚君が俺に対してした侮辱をどう説明するきだい？」

崇「君こそ、あの男の子は誰？君がキスをしていたのを見たよ」

ウイリアムは崇史のメールにいらついた。いったい何をもって崇史は自分とSの関係に疑問を持つのか理解できなかった。崇史には自分の領域に侵入する権利は少しもないというのに。それに、崇史が望んでいるようなメール、すなわち彼を安心させるようなメールを書こうとは全く思わなかった。ウイリアムは少しの間、どのようなメールを書こうかと考えた。あくまで俺は彼に対して無関心でなければならぬ。自分と崇史とはそもそも次元が違うのだから。ウイリアムは天上の神が下界のものを哀れむように、貴族が下僕に見せる偽善的なやさしさをもって、それは哀れみや、軽蔑の意味が多分に含まれているのだが、メールを書いた。

崇史はカムデンタウンのバス停のベンチに心を弾ませながらドキドキしながら一心にメールを待った。すぐには自分の疑問に対する返事を送ってはこなかった。ともすると、先に自分がメールを送ってしまいそうなのをなんとかこらえていた。カムデンタウンのバス停のベンチに彼はもうかなり長い間じつと座っていた。まるでその場を動くとうイリアムから送信されたメールを取り逃してしまうかのように。今もまた、彼の面前をケンジントン行きのバスが通り過ぎていった。彼はそれすら気が付かなかったし、自分の乗るべきバスについては全く興味がなかった。

ウ「俺がどんな気持ちでそれをしたか。どちらにしても、君にはそんな事なんともないんだろうけど。その証拠に君は平然としていたように俺には見えただけ」

崇史は彼の返事を待ち構えていたかのようにすぐに返信した。

崇「僕がどれほど苦しい思いをしたか、昨日は悲しくて眠れなかった」

ウ「俺もだよ」

崇「僕は君が好きだよ」

その後、いつまでたつても返事が来なかった。勇気を出して、勢いで、愛の告白をしたというのに、この満たされない気持ちはいつたいたんだろう。つい先程まで、崇史を覆っていた希望に満ちた空気が、それに、これこそが恋愛なんだという実感があつたのにも関わらず、今はただやりきれない充足されない気持ちで崇史の中に残っているだけだった。時間が刻々と過ぎて行く中、念じるかのように携帯を強く握りしめ見つめた。本当は自分からメールを送ればいいのかのらうが、あの最後に送った一文の後にどうして自分から先に送ることができようか。「あゝ全く」崇史はくらくらしながら立ち上がり、バスに乗り込んだ。恋愛というのはこうも難しく、心を不安にさせるものなのか。それは彼が想像し期待していたものとは大きくずれていた。彼は今日一日を振り返り、一体何の為の日だったのか分からなくなった。それに、ぐったりと疲労しきっていた。結局心の平安は得られず、振り出しに戻っただけだ。その時、着信音が手の中で鳴り響いた。崇史に笑顔とエネルギーが蘇った。これで、今日一日が意味のあるものとなる。それに、明日からの日々に希望の光がとるのだ。彼は想像した、ウイリアムはきつと自分に愛しているといった言葉をかけてくれるに違いないと。一時間も待たせるなんてもつたいぶつたけど、それも許そう。彼は味わうようにゆっくりと短いメールを読んだ。だがウイリアムからのメールは期待していた内容ではなかった。

ウ「俺は君をまだ完全には信用できない。もう少し時間が必要だ」

崇史はその返事にいらいらした。説明を求めたいのは自分であるはずだ。いったい僕は彼に対して何の無礼を働いたというのであるうか！じっくりと記憶を辿ってみたが少しも思い当たる節はなかった。

崇史は返事を送るのを止めて無視した。ウイリアムをじらして、彼から釈明のメールがくればそれに返答しようと思った。もう彼に振り回されるのはご免だった。自分のリズムを突き通さなければならぬ。

だがウイリアムからはいつになっても次のメールがこなかった。それがまた崇史をいらいらさせた。彼は仕方なく、

崇「ごめん。ちょっと忙しくて返事が書けなかったよ。あなたがどうして誤解しているのか僕には分からないけれど」と送った。

ウイリアムは笑いがこらえきれなかった。彼は自分に振り回され一喜一憂している崇史を想像していた。彼はしばらくの間Sを完全に忘れていた。

Sは先程からずっと携帯電話に没頭しているウイリアムに対し、じれったそうに体をくねらせ、自分の体を彼の裸体に巻きつけた。だが、ウイリアムは一向に止めようとしなない。そんな彼にSは警告だよと噛み付いた。「分かった、分かったよ」ウイリアムは書きかけのメールを消去して携帯電話をソファアの上に投げつけた。そして、再び彼はSの身体全身にキスをして彼らは激しく愛撫しあった。彼らがそうしている間にも着信音が鳴り響いていた。それは崇史からだけでなく何人も男性からであった。決して出られる事のない電話、いつまでも返事されることなく、それは惨めに鳴り響いてい

た。そこにはいらいらと怒りに体を震わせ電話をかけている男達の姿、祈るような思いで彼の返信を待っている姿、或は悲しみに涙する姿が浮かび上がってくるかのようであった。

それをSは自分こそ選ばれた男なのだとは頂天になり、また、必死に電話をかけている男達の姿を思い浮かべ、馬鹿にしたように吹き出した。

ウイリアムは自分の体にぴったりと密着しているSの体を強引に引き離し、いつまでも鳴り響く携帯の電源を切りに立った。そして、その場所からSを眺めた。それは美しくまた無垢な体であった。Sの愛を信じて疑わない目、あるいは勝ち誇った目、自信に満ち溢れた目を見た。それにも関わらず、Sはまだ物足りないかのように媚びるような目をして早くベッドに戻るよう手招きをした。

なぜか彼のそんな自分勝手な態度がウイリアムの癪に障った。彼はベッドの側に立つと突然Sを引き寄せ彼の体を殴った。呆然と自分を見つめるSをベッドから引きずり下ろし、再度体を殴りつけ、その衝撃で彼は床下に倒れた。その暴力的な行為にすら、Sはうなづいて快楽を感じているかのようであった。なぜか？その理由はウイリアムの暴力に愛が含まれていると彼は信じて疑わなかったからである。憎しみから起こるのは全く意味合いが異なるのである。

だが、実際はそこには愛など含まれてはいなかった。ウイリアムはバカにしたようにSを見下ろし、心の中で、『決して俺はお前を愛している訳ではないんだよ。さあさあ、早く出て行ってくれないか。俺は忙しいのだ』と叫んだ。彼はSを起こし軽く抱いた。それは少しも愛のない抱き方であった。

Sは手をウイリアムの首にまわし泣きそうな顔を彼に見せ胸の中

に顔を埋めた。だが、ウイリアムは両手を上げ、面倒臭そうに彼を引き離しそそくさと服を着始めた。ウイリアムは、不服そうに自分を見てその場を動こうとしないSに服を投げつけて、時計をこんこんとたたいた。それには急いで服を着て家から出るようにという警告が含まれていた。だが、Sはその警告を無視しシャワーを浴びに不満を表すかのようにどしどしと足音を立ててゆつくりと歩いて行った。まるでウイリアムが自分に対して反省し謝ってくれるのを期待するかのように。Sはその時点でまだ彼のやさしさを信じ、自分は彼を意のままにコントロールできるものと思っていた。なぜならSはたった今、彼の自分に対する激情を見たのだから。

だが、ウイリアムは彼の予想と全く反対の行動をとった。

「時間がないんだ。早く服を着て出て行ってくれないか。さもないとまた痛い目にあうぞ」ウイリアムは大声で怒鳴りつけ拳を上げた。

Sは威嚇するかのごとく、鋭い目つきで彼を睨めつけ服を邪魔臭そうに着始めた。「分かったよ。出て行けばいいんだろ」彼はそう吐き捨てた。

ウイリアムは少しもSが自分の置かれている状況について分かっていないことにめらめらと怒りを覚え、何とか気を落ち着けようとするも制御できなかった。そして、彼は制裁を加えるかのようにSの胸倉を掴み、何度も殴った。気が付けばSは自分を恐怖に怯えさせたような目で見ていた。Sは素早く服を着てウイリアムを怒らせないよう無理に笑顔を作った。それでもSの顔は恐怖で引き攣っていた。ウイリアムは自分のした暴力行為にはっとした。興奮のあまりやり過ぎたことに対して、少し自分が怖くなったのだ。ウイリアムはSを引き寄せ、力強く抱きしめた。「気が向けばいつでも遊

びにおいでよ」と言葉とは裏腹に冷たい顔で、関心の無いような態度でSを見送った。

崇史はいつまで待っても返事がこないのにがっかりしていた。きつとまたウイリアムを怒らせてしまったのだろう、素直に謝れば良かったのかなと少し後悔した。だが、そうは言っても未だに彼の意図する事は分からなかった。彼はどんな性格の持ち主なのであるのか。崇史が今まで出会った人々には彼のどのような類いの人はいなかった。そもそも彼が自分を愛しているのかどうかすら分からない。愛してくれさえすれば自分は何だって我慢できるというのに。まずはどうしてもその確証が欲しい。それがなければ何も始まらないのだから。崇史の頭は混乱し、訳が分からなくしっくりとしなかった。

崇史は今の自分がかなりの部分ウイリアムに支配されているのが怖かった。彼の反応に一喜一憂し自分の感情がコントロールできなくなっている事、精神の安定を失ってしまったっている事に動揺した。崇史はこのままでは自分を見失ってしまう事は分かっていた。何とかしなければならぬとも強く思った。そして、次回からはウイリアムに自分の気持ちをはっきりと伝え、彼に左右されないと決意した。

克也は今日一日崇史からメールの返事がこなかったことにいらついた。あいつは日本人じゃなかったっけ？普通の日本人なら必ずすぐに返信するのに。克也は、なぜか崇史だけは自分の思い通りに動かす事ができないという事実が腹が立った。普段の彼ならとうに崇史を見放していただろう。だが、今の彼にはそれはできなかった。克也は打算的に物事をとらえる人物である。彼は崇史は今いける存在だと考えていた。それに、崇史自身はそのことに気が付いていないのも都合がよかった。実際、昨夜も大勢の人が彼を凝視し、また狙っていたではないか。それに彼の周りにはいつも大勢の人が

いるように克也には見えた。彼には日本人と欧米人の壁がない。彼は意識せずに彼ら外国人とつきあっている。それにゲイとストレートの垣根すらも。その証拠に崇史はルーカスと同じ部屋で暮らしているのではないか。その上、彼は何の苦労もなくロンドンで就職をし、たくさんの同僚に囲まれている。克也はそんな彼を妬ましく思った。それに引き換え自分はどうかであろう。ここまで到達するのにどれだけ努力したことが。彼はたくさんの友人に囲まれている現在の自分の姿を思い浮かべた。人生とは不思議なものである、一度車輪が回り始めると止まる事なく進み続ける。彼はうつすらと今までの苦労に涙した。そして、二度と絶対に昔の姿には戻らない、とことんまで登りつめてみせると心に誓った。

第5章

夜も更けた頃、携帯電話のバイブ音にびっくりして、ベッドから飛び起きた。すっかり気落ちしていた崇史は、いつもより随分早くにベッドに入り、いつメールが届いてもすぐに分かるように枕の下に置いていたのだ。崇史は寝ぼけながらも、目をこすり枕の下をまさぐって、急いで携帯電話を開けた。送信者の宛名はウイリアムだった。彼はそれを見てほっと肩をなで下ろした。嬉しくて本当に良かったと涙が溢れそうだった。だが、まだ安心はできない。内容によつてはそれが自分にとつて辛いものかもしれないのだから。崇史はほんの少し迷った。今はこのまま眠つて朝まで読むのを待とうかとも。でも、読まないで眠られない事は分かっていた。彼は布団の中に潜つて毛布の温もりに包まれながら、ドキドキしながらも、つとめて暖かい気持ちで内容を読んだ。その内容は？それは崇史が期待していた以上の内容、彼が今まで夢見ていたような内容であった。それは恋文といつてもよかつた。彼の目からは本当に涙が溢れ出た。昨日からずっと張りつめていた緊張からようやく解放されたのだ。

その後、崇史の頭は興奮状態で夜中遅くまで眠られなかつた。ベッドの上で彼はずっとウイリアムとの出会いから今までの時間の経過を繰り返し回想した。それはドラマチックで困難を乗り越えて、遂に彼の愛を勝ち得たといったストーリーに仕立て上げられていた。ようやく眠りについた後も、時々はつと目が覚めてはまた携帯のメールを読み返した。

明け方、部屋の中は冷えきっていたにも関わらず、崇史が眠っているベッドは暖かく彼を包み込み、素晴らしく落ち着いた精神状態で目が覚めた。もう少しベッドにいて、ウイリアムとの空想を続けたい。彼はその誘惑を何とか振り切つて大急ぎでシャツを着て、

パンツを履いた。フリーカメラマンのルーカスはまだベッドの中だ。彼を恨めしそうに見つめながら、そして、部屋の中にあるベツカムのポスターにウインクをして部屋を出た。

台所に入るといつものようにラジオをつけ、時計の時間をチエックした。家を出るまであと三十分しかない。急いで冷蔵庫を開け何か食べるものがあるか物色した。オレンジジュースとバナナを取り出し、それにたっぷりと蜂蜜をかけて口にくわえた。大急ぎで食べきって、そのまま、ズボンをずらしながら、トイレに直行した。トイレで用を足しながら、歯を磨き、それが終わると、ワックスを適当に頭髪の所々につけて、髪を立たせ、たっぷりとスキンケアアローションを顔に滲ませ、鏡の前でかつこ良くポーズをとった。鏡に映る自分に満足すると、「さあ、今日も頑張るぞ」と、気合いを入れて家を出た。

メインストリートには職場に急ぐビジネスマンやビジネスウーマン達が足早に歩いていった。崇史はいつも、満員で息苦しい地下鉄を避けてバスに乗って通勤する。本当に急いでいる時は地下鉄を利用するけれども、バスの方がゆったりとして、また外の景色を楽しめるのでリラックスできるからだ。

彼は毎朝必ず誰よりも早く出社する。誰もいない朝のオフィスは心地良い。制服に着替えた後、その日一日の仕事の準備、コピー用紙を補充したり、ボードの予定を書き換えたり、お茶の準備をしたり、そして、一通りそれらが終わった頃に同僚達がやって来る。大抵、出社する順番は決まっていて、いつも遅刻しそうにぎりぎりに来る人も同じ人物だ。それに偏見ではあるがなんとなく出社する順番と仕事の能力の順番が似通っているように思った。

大きく深呼吸をして、店頭のドアを開けた。カウンターのすぐ側

にある大きな飛行機（エアバス380）の模型を念入りに磨いて、「今日も一日宜しく」と呟いた。早くも、大きなリュックを背負ったバックパッカー風の二人のオージー（オーストラリア人）が航空券を購入しに店に入ってきた。彼らの話によると目的地はエジプトのギザで、可能な限り安い料金で行きたいとのこと。崇史はキーボードをたたきながら難しい顔をして、眉をひそめ、コンピュータの画面に料金タリフを表示した。スクリーンを旅客の方に向き直して、彼らには意味不明な内容をペン先で指し、丁寧に説明した。そして、ここだけの話ですがというように、もったいぶりながら、「航空会社で航空券を直接購入するよりも旅行会社を通して買われるほうが、ずっと安く買えますよ」と親切に教えてあげた。彼らが何かを言おうとするのを、ちょっと待ってと言いながら、崇史の友人が勤めている旅行会社に電話をした。崇史はオージーが少し心配そうに、でも、期待を込めて、自分をじっと見ているのを見た。そして、電話を切り、「エージェントでは、XXXポンドで航空券が買えるよ。今から電話番号と住所を書くから、一度あたってみてはどうか」と笑顔を見せながら、メモを彼らに渡した。それを受け取った男達は熱心に話を聞いていて、「ありがとう」ととても大きな笑顔を崇史に見せた。崇史は笑顔を見ると言いようのない快感を覚えた。彼は「ちょっと待っていて」と、オフィスの中に入り、何冊かのエジプトの資料やパンフレットを袋に入れて、彼らに手渡した。二人の男性はまた「ありがとう」と言って彼の手を握った。そして、彼らは店を去った。崇史の横に座っていたヴァイオレットは「男性にはいつもやさしいのね」と彼をからかった。崇史はとても今の仕事が入っていた。学生時代の彼が香港映画の「恋する惑星」を見終わった時、将来必ず航空会社で働くこうと決心した。そして、今でもこの映画を思い出す度にトニーレオンとフェイウオンの恋の旋律が心を奏でた。

今日もいつもと変わらず、辟易するようなお客様の苦情（大抵の

場合、彼らお客様側に落ち度があると崇史は信じていた)や我が儘、それに、冷やかしの電話が多数かかってきたけれども(いったい彼らの頭の中はどのようなになっているのか、どうしてそんなにも偉そうに話すのか全く理解できなかった)、今日はそんな電話の数々も苦にはならなかった。それは、暖かく柔らかいやさしい空気が彼を包み込んで守ってくれているように感じたからだ。

今日一日、オフィスの同僚達、誰彼もが上機嫌で浮き浮きしているように感じられた。まるで自分がいる環境が急速に変化をしているかのようだ。崇史は六時になると大急ぎで着替え足早にオフィスを出て、バスには乗らずゆっくりと、フラットに向かって歩き出した。オフィスが入っているビルから数分の公園のベンチでヴァイオレットが幸せそうな笑みを浮かべて携帯電話で誰かと話をしているのが見えた。崇史は彼女の方に駆け寄り、思わず「ゴージャス。今晚の君は最高に素敵だよ」と感嘆の声をあげた。彼女はちょうど話が終わったようで、「今からデートなの。ハイドパーク?コーナーで彼と待ち合わせしてるんだけど、そこまで一緒に歩かない?」とうれしそうに言った。崇史がうなずくと、彼女は崇史の腕に腕をかませた。まるで恋人のようだ。

克也は大声で怒鳴っていた。待ち合わせをしている相手が時間を二十分過ぎてもまだ来ないのだ。彼は電話で言い訳をしている相手にむかつき、今にも携帯電話を壁に投げつけそうであった。むしろくしゃしてメインストリートの向かい側を見ると、崇史が自分の知らない誰かと話をしている。一人は黒人女性もう一人は見たところ南米系男性である。克也は崇史を見てなぜかいらついた。タカシがあまりにも自然にアフリカ系女性や南米系の男性と話をしているのが許せなかった。彼には国籍や人種、宗教の壁がないのだ。全く意識せず、臆する事なくつきあっているその姿が妬ましかった。

崇史は克也が自分の方を見ているのに気が付いた。崇史は大きく手を振って急ぎ足で大通りを渡った。「何してんの？誰かと待ち合わせてんの？」今日の浮き浮きしている気持ちや彼の言葉を関西弁にした。「あゝうるさい。関西弁やめてくれないかな」克也は気取った言い方でそう言い放った。そして、「タカシの英語って、関西訛りで聞き苦しいよ。何か笑える」と軽蔑的に嘲った。崇史は自分の英語の発音がおかしいことは十分に承知していた。でも、改めて目前でそう言われると落ち込まれる。「何があつたか分からんけど八つ当たりするのはやめてくれへんか」崇史はかつとして関西弁で言い返した。克也は普段は決して怒鳴ったりしない崇史を驚いて見つめ、慌てて「ごめん。ちょっとむしゃくしゃしてて。悪かったよ」と肩を叩いた。

崇史はにっこりと微笑んだ。「そうそう、ずっと教えて欲しかったんだけど、カツヤはいつも大勢の人に囲まれて、人気者だけど、どうすれば君のようになれるの？僕はたった一人だけの愛で十分なんだけど、どうすれば愛を形にできるのか知りたいんだ」崇史は本心からそう言ったが、克也にはその質問が白々しく侮辱されているようにすら聞こえた。いったいどれだけ俺が努力しているか君は全く知らない。そう言ってやりたい衝動を抑えながら、彼の質問には答えず、「それはそうと君が先程まで話していた男女は誰だい？」無理に笑顔を作りながら質問した。「ヴァイオレットは職場の同僚だよ。彼女とつてもセクシーでしょ。ファッションセンスも抜群で、包容力もあるし、彼女はホントにゴージャスな存在なんだ」「俺にはそんな風には見えないけど。彼女のどこがそんなに魅力的か俺には分からないよ」克也は反抗的にそう答えた。

ヴァイオレットの美しさにカツヤは気が付いていない、それに今日の彼はどこかとげとげしい。何か大切な友人を侮辱されたような感じがした。崇史は不思議そうに克也を見つめた。でも、カツヤが

ヴァイオレットを見たのは今日が初めてだし、それに彼女の何も知らないから仕方がないか。それに、カツヤだっていつも完璧というわけではない。誰だって自分の気持ちをコントロールする事ができない時はあるものだ。何とか自分を納得させた。崇史は話題を変えて何かを話そうとすると、克也は崇史が知らない人物（その人物は大急ぎでこちらに向かって走って来た）に手を振った。きっとまた彼の新しい友人に違いない。「じゃ、俺は約束があるから行くよ。また今度ね」克也はたった今までの不機嫌そうな様子とは打って変わって光り輝く笑顔で崇史にさよならの手を振った。それを見て崇史は安心した。彼をいらだたせていた原因は自分ではなく、自分の知らない克也の友人であることは間違いなかった。それに、もう彼の機嫌は直ったみたいだしね。崇史は克也の子供っぽい態度にやっていた。そして、小声で「グッドラック」と微笑んだ。

ウイリアムからは毎日何通もの愛がいつぱいつまったメールが届いた。いったい、崇史は何度それらを読み返したであろう。だがそれは本当の恋なのであるのか？崇史の脳は今や完全にウイリアムによって支配されているかのように見えた。崇史は彼の愛に盲目で従順であるかのようにであった。しかしである、彼はもう知っていた。その愛が真実の愛ではなく、かりそめの愛であって、永続するものではないという事を。でも、崇史はそれでもよかった。万が一この愛が真実の愛に変化し二人の恋が成就するならば何と素晴らしい事であろうか。でも、それはどうにもこうにも無理な話である。彼ははっきりとウイリアムと知らない男との破廉恥なキスを見た。それは崇史にとって不良的行為で悪ふざけであった。

それではなぜ崇史は未だに彼に恋いこがれているのか。崇史はその答えを考えてみた。まずはウイリアムの容姿、彼は美しかった。ただ美しいというだけでなく、そこにはいたずらっぽさも含まれている。ただその一点をとっただけでも自分が彼に恋するのは正当で

はないか。男は動物である。たとえそこに愛がなくとも、彼らは興奮し性交をする。崇史は彼を想像する度事にぞくぞくとする自分がいるのを知っている。

ただそれだけでウイリアムを愛するのか。いやいや二番目に臆病でシャイな自分が彼と出会ったその瞬間に彼と打ち解けたではないか。そこには真実の何かがあるはずだ。そして、何より彼とのラブストーリーは永年思い描いていた少年的な空想と合致する。仮にそれが短期間の関係であったとしても、それは情熱的で、まるで映画のシーンのようであり、それは美しい思い出として、人生の輝かしい一ページとしてこれからの人生の中で繰り返し思い出されるはずである。それだけで充分である。一度どうしてみたい恋。未成年が一度は経験するような恋物語がそこにあるのである。

崇史は再度一日に何度も送られてくるメールを読み返した。その内容は「俺は君を愛しているよ。今すぐにでも会いたい。君は天使のように輝いているね。俺は君の唇の感触をやさしい声の響きを忘れられない」といった具合に単純な内容で大昔から使い古されてきたような陳腐な文章であった。どの内容も崇史自身を讃える内容でなかった。それは単に、彼の容姿であったり、響きであったり、臭いであったり、だがどれも具体的な内容は含まれていず、少し詳しい内容になってくると、それは明らかに崇史とは違う誰かについて書かれたかのような文章であった。実際、ウイリアムと崇史が会ったのはまだ二度しかないのだ。ウイリアムはまだ崇史の何も知らない、書きようがない。それなのにこの熱烈な文章は？だがその決まりきったような内容はどうすれば愛に飢えている人の心を揺さぶるのかを心得ているかのように崇史の心に響いた。

崇史はプレーボーイのウイリアムの姿を思い浮かべた。崇史は純粹な永遠の愛を求めると言っているにも関わらず、彼が惹かれてい

るのは、結局は正反対の快樂ではないか。ウイリアムとの恋が短期間のもので快樂を求めるだけのもの、そして、彼は崇史にとって単にアクセサリーにすぎないのかもしれない。ウイリアムと一緒にいると、道行く人々は二人を振り返るであろう。そして、崇史はこうも考えた。自分が今まで入る事のできなかつた世界に連れて行ってもらえるかもしれない。また、きっとそこで自分はたくさん新たな男性と出会うのであろうと。ウイリアムとの愛に溺れながらも、彼はすでにもう次の恋をも考えていた。一見彼はずるい人間のように見える。だが彼自身は、それはウイリアムとて同じであってお互いがステップであると自分を正当化した。

崇史は窓ガラスに映る自分にうつとりとした。彼はそこに映る自分に対して、かわいらしく微笑んだ。今、彼は自信に満ち溢れている。あれほどの伊達男に自分は選ばれた、それは自分が高い地位にいるという証ではないか。ウイリアムとキスをしていた知らない男もまた美青年であった。自分は今、彼らと同じグループにいるのだ、そう思うと笑みが押さえきれない程に込み上がってきた。

もうすでに彼は今までに入られなかつた世界に突入しているような気分であった。彼を取り巻く世界は今や全く異なつた見え方をしていた。彼は今これまで生きていた世界を見下ろすような視線でくらししているのである。

崇史は日々進化していった。恋心は人を美しくするというのは本当のようだ。以前よりもずっと服装のセンスに気を使うようになり、無意識に以前より念入りに髪の手入れもするようになった。それだけではなく、楽しいいうきうきした心は笑顔を作り、それは彼を照らすかのようであった。肌のつやも彼の気持ちに比例するかのようになりがでてきた。ウイリアムと再会したあの晩と比べて、今や格段に崇史は魅力に溢れていた。道行く人々が振り向いて自分を見てい

るかのような感覚さえ味わった。きつとウイリアムは僕を見ると驚くだろう。彼は僕の虜になるに違いない。崇史はますます自信を深め、そろそろウイリアムと会ってみたいと思った。

崇史は何とかがしてウイリアムがデートの話を持ち出してくれないかと期待した。彼は毎回、メールを送信する度に、文章の中にそれとなくその気持ちを書いてみた。上手くいけばウイリアムは僕の気持ちに気が付いてくれるであろうと希望を持ちながら。だが、ウイリアムからのメールの回数は日によってまちまちで、その内容も以前のような熱烈なものばかりではなく、冷たく素っ気ないものまで様々で、それに一喜一憂する崇史であった。

そして、一週間が経った頃、ようやく崇史は金曜日の夜、即ち明日の夜に二人だけで再会する約束をとりつけた。デートまでの時間はわずか一日である。崇史は仕事が終わった後、大急ぎで閉店間際のトップマンに向かった。なぜなら、彼の持っている服はどれもこれもロンドンに来るずっと前から着ていた物で、センスの良さには自信があつたが、少し流行遅れだったからである。

だが、残念な事に崇史が気に入って手に取つてみた服は全て彼にはサイズが大きすぎた。どうして？彼は内心むっとして店員に小さいサイズはどこにあるのかを尋ねた。女性の店員は申し訳なさそうな顔をして、これより小さいサイズがないのですよと丁寧に慰めるように言った。一体全体ロンドンはどうなっているのだろう。この都市にも僕と同じような体格の人は大勢いるというのになぜ？僕らにはお洒落をする権利がないという事なのか。それでも、彼が思い起こすに、自分と同じ体型の人達もセンスの良い服装をしている。きつとどこかに、すぐ側に手に入る店があるに違いない。今度その店を教えてもらおう。でも、今はもう時間がなかった。彼は諦めて、一番小さな刺激的な下着だけを買って店を出た。

崇史は慌てて克也にメールを送信した。もうほとんど時間が残っていない。なんとしてでも今晚彼に会わないと。克也はセンスの良い服をたくさん持っていた。彼から洋服を借りるのは良いアイデアだろう。克也からはすぐに「もちろん大丈夫だよ。どれでも好きなものをどうぞ」というメールが届いた。崇史はノッティンギルにある克也のフラットへ急いだ。今日の克也は上機嫌だった。彼の部屋はセンスがよく整理整頓が行き届いていた。それに、何よりも目につくのは部屋には少し大きすぎるキングサイズのベッドである。きつと、彼は今までに何人も男性とこのベッドで夜をともしたのだろう。

克也はからかい気味に崇史の目を覗いた。「いったい、誰とデートするのか？」彼は深く追求しなかったが、崇史の慌てぶりを楽しんでいようだった。崇史は克也のたくさんの服の中から、じっくりとセンスの良いものを選んだ。結局はこのロンドンで頼れるのはカツヤしかないんだと強く思いながら、「君はいったい何着、洋服を持っているんだい？それに、学生がノッティンギルに住むなんて、ほんと羨ましい限りだよ」崇史は賞賛の眼差しで克也を見つめた。お互いのライフスタイルの大きな違いがなんだか面白く崇史は声をあげて笑った。カツヤには僕の生活はできないだろうな。彼は何人もが共同で生活している自分のフラットを思い描いた。それは少々乱雑で、いつも笑いがあって、それに毎日がまるで修学旅行のようだ。

克也は崇史が選んだ服やズボンを丁寧に折り畳んで、それらを、箱の中にきれいに並べられたデパートやブランドショップの紙袋のコレクションから一つ選んで、スマートに入れた。「君のデートがうまくいくように、祈っているよ」とその紙袋を崇史に手渡した。

約束の日、崇史は仕事を終えオフィスを出た後、パートタイムの英語のレッスンには行かず、急ぎ足でフラットに戻って来た。汗びっしょりになったシャツをベッドの上に投げ捨てて素っ裸で、シャワーを浴びに行った。今晚起こるかもしれない事を想定して隅々まで丁寧に洗い、そのまま歯も磨いた。彼は昨晚克也に借りた服とズボン、それに昨日買ったの下着を着た。その間、彼は何度も鏡を見ては今の自分が魅力的であるかどうかを確認した。もちろん、そこに映る姿は同じなのだが、その度ごとに彼自身に与える満足度は違っていた。

全て準備が完了した時には期待と緊張で喉がからからで、コップに水を入れて一気に飲み干し、気合いを入れる為に「よっしゃー」と大声で叫んだ。最後に財布の中に念の為にコンドームを入れた。そのコンドームは随分前に、もしも何かが起こった場合にと期待を込めて買い、長い間使っていなかった物だ。玄関でもう一度口と鼻に手を当てて口臭を確認した。朝から何度も行ったトイレにはもう行かなかった。そしてドキドキしながら、家を出た。

バスの中で、崇史は様々な場面を想定し、その一つ一つにどういった対応をすべきかできるだけ多くのことを考えた。たとえその場面が最悪なものであっても、今の彼にはそれを好転させる自信があった。ただ会いさえすれば、自分は何とかなでできる、何とかさせてみせる。もう今までのように携帯電話やメールを通して続いていた関係とはおさらばだ。そもそもそれこそが自分を苛立たせていた一番大きな元凶であったのだから。

チャリングクロス駅でバスを降りて、そこから待ち合わせ場所であるテイトモダンまで徒歩で行く事にした。なぜなら歩く事で気分を落ち着かせられるからだ。テムズ川を見ながらの散歩はロマンチックである。ここでは何組もの恋人達が愛を語り合っている。きつ

と今晚の僕らも、彼らと同じように目を輝かせながら会話をするんだろうな、そう思うと自然に笑みが溢れてきた。

徐々に日が暮れて、少しずつ電灯や明かりがともされていく光の変化は幻想的であった。崇史は対岸にライトアップされたセントポール大聖堂を見た。大聖堂と現代的な建築群のコントラストが素晴らしかった。そして、向こう岸から今自分が立っているテイトモダンにかかるミレニアムブリッジを渡る人々の姿がまるで妖精のようにさえ見えた。彼は間もなくやって来る夢のような時間に有頂天であった。崇史は急いでその橋に駆け上がった。「あゝ何て素晴らしき景色なんだろう」彼は思わずそう叫んだ。ミレニアムブリッジから見える光景は人生の過去そして未来の縮図かのよう。彼はおもいつきり大きく深呼吸した。「あゝこれぞ人生最高の瞬間！！この光景はなんと今の自分の心情にマッチしているのでしょうか！！」「我こそは世界中で一番の幸せ者なり」彼のウィリアムに対する気持ちもますます高揚していった。

チャリングクロスからの道は思った以上に短く、約束の場所に一時間も早く来てしまった。充分すぎるほどの時間を持って余さない為に、テイトモダンで美術鑑賞をした。ここは彼のお気に入り美術館だが、今は少しも集中できなかつた。難解な芸術作品はさらに彼を悩ませた。彼は作品を鑑賞するのを諦めて外に出た。

気が付けば約束の時間を十分過ぎていた。周りを見渡すがウィリアムはまだ来ていなようだ。崇史はもうこういったことには慣れっこだった。あまりにも偏った見方かもしれないがイギリス人というより日本人以外のかんりの国の人々が時間にルーズだというのは経験上知っていた。これは不公平だ。いつも待たされるのは僕なのだから。そうは言っても生まれた時から染み付いた約束の時間より早めに到着するという習慣は容易には変えられない。もしも相手がす

でに待つていたら彼または彼女に迷惑をかけやしないか、または時間通りに来なければ置いてきぼりをくらうかもといった恐怖感がどうしても彼から離れなかった。でも、ただの一度も人を待たせた事はなかったが、相手が時間通りにくるのはまれであった。

忍耐強く待ち続け一時間が過ぎた頃、もしかして待ち合わせ場所を間違えたのかもしれないといった不安と、ウイリアムに何かあったのだろうかといった心配が崇史を襲った。心の奥底から発せられるきつとまた騙されたのだよという警笛には気付かない振りをして、受け付けなかった。

崇史は行き違いにならないように大急ぎでテイトモダンの周りを一周した。その後再びもしかして僕とは反対側で待つていて、ウイリアムは帰ってしまったのかも心配になった。だが、やはりメルにはテムズ川に沿ったテイトモダンの前とはつきりと書いてあった。もっと早くに彼を探すべきだった。もう会えないものと決めつけて帰ってしまったのかも。いやいやきつと僕はまたじゃんにさられているんだ。そうに決まっている。たつた今避けていた警笛はやはり最も真実味があるように感じられた。そう思うと急にむなしさと悲しさが込み上げてきて涙が溢れ出た。僕は何をやっているんだろ。あゝまただ、どうしてどうして。

崇史は憤慨した。事の前後を冷静に考える力を失っていた。彼はその他のあり得る選択肢を全て破棄して、ただ裏切られたくやしさを考えられなかった。でも、こうなる事は最初から分かっていたはずだ。それにしてもあまりにも早すぎやしないか。何の感動も恋愛もなく終わってしまうなんて。『お前自身がずるいのだよ。ただ、何も考えず快樂ばかりを考えていたから、このような結果になってしまったんだ。自業自得だ』心の中に住んでいるもう一人の自分が軽蔑しきつたようにそう断言した。

崇史は凄惨な形相で怒り狂ってウィリアムの携帯に電話をかけた。ウィリアムは電話を無視しているのか、一向にでない。彼は執拗に何度も、何度も繰り返し返し電話をかけた。いらいらとし、携帯電話をありったけの力で握りしめ、それを地面に投げつけようとした。でも、彼にはできなかつた。彼はやり場の無い怒りに堪えて震えた。

何と屈辱的な光景なんだろう。崇史は悔しさで身動きがとれなかつた。何としてでも待ち続けてやると、訳の分からない気持ちで歯を食いしばって、涙をこらえながら数時間ずっと立ち続けた。来るはずのないウィリアムを期待もせず待つなんて馬鹿げている。そもそも一時間も待たずにこの場を去っていればこれほどまでに腹も立たず、彼に対する怒りも軽減されたはずだ。単にいつものことだよと割り切れば良かったのだ。だが、もう遅い。今となってはこの憤怒はどうしようもできない。時間がたつにつれて彼の怒りも増幅し、頭の中は復讐のシーンでいっぱいであった。

僕はもう彼に対して十分に怒る権利を有する。なぜならもう四時間待ち続けているのだから。そして、崇史は厭味と敵意の籠ったメールを送信した。

「あなたは今何をしていますか。僕はあなたを信じてずっと待っていました。そう、たった今まで。僕は今、貴方がいかに残忍で冷酷な人物である事を知りました。今すぐ会いに来て下さい。来るまで一歩も動きません」

崇史はやけくそなヤケツパチな気分になっていた。「返事が来るまで何がなんでも動かないぞ」彼は急に降り出した雨の中、様々な復讐のシーンを考えた。ウィリアムはきつと今、大急ぎでこちらに向かっていることだろう。でも、僕は彼が来ても無視をする。おも

いつきり殴るかもね。ウイリアムは泣きながら懺悔をするかも。きっと、彼が僕をじらそうとした作戦は間違っていたと後悔するに違いない。崇史の発想はあまりに未熟で幼稚であった。なんと空しい考え方であるう。彼は自ら自分のリズムを崩し、彼の思うがまま、なされるがままになっていた。これでは、ウイリアムがどのような人物かに関わらず、崇史には永遠に心の平安がやっては来ないのではないだろうか。

崇史は雨に打たれてびっしょりと濡れていた。だが、雨が降り出したことすら気が付かなかった。それでもなおじつとしている姿は異様であった。彼がそこまでするのはまだウイリアムが自分を愛しているという確信があったからか。いや確信などほんの少しも持ち合わせていなかった。それどころか、自分は彼にとつて全く特別な存在ではない事は分かっていた。ただ、彼の意地が動けなくさせていた。

崇史は憤怒から真っ赤になって周囲を気にせずに叫んだ。「馬鹿やろう、くそつたれ」今までに使った事のない汚い言葉が次々に彼の口から発せられていた。それでもなお、内から湧き出て来るくやしきにはどうにもやり場がなく震えが止まらなかった。今ではウイリアムの姿を想像するのも耐えられなかった。そして、この日の屈辱は永遠に忘れないと誓った。

ついに夜の十二時がすぎた。崇史の頭では今起こっている状況を理解する事ができなかった。あまりにもひどい仕打ちではないか。何かがあつて来られないのならそうと連絡をくれればいいのに。そう思ったが今の彼の怒りはもうそのレベルではなかった。ウイリアムは悪魔だ。変人だ。全く訳が分からない。彼は強くそう思った。が、夜中に雨に濡れ怒りと恨みに異様な雰囲気漂わせ、一種妖氣的な光を放っている彼自身が悪魔のようであり、妖怪のようであっ

た。

崇史はそのまま脇目もふらずに、誰とも目をあわす事なくテムズ川に沿った道をフラットまで、亡霊のように暗く俯いてとぼとぼと歩いていた。普段は夜中にこの暗がりを一人で歩くことはありえなかった。いくらロンドンが安全な都市であるとしてもそれは危険だ。だが今は彼自身が危険人物のようであり、誰も彼を襲ったり、強盗を働いたりする者はいないであろう。

今の彼は疲労も怒り以外の何の感情もなかった。もし何かの感情があればこのような姿では歩かなかったであろうし、この長い距離は簡単には歩けない。それに、少なくとも行き交う人々が驚いて彼を避けているのには気が付いたはずだ。

その後、崇史は何時間も歩いた後、フラットの誰にも気付かれずにベッドに入った。崇史はさぶ濡れになった服を脱ごうともせず、目をぱちりと開けたまま何時間もベッドに横たわっていた。

第6章

それからの二日間、ウイリアムに対する憎悪とそれとは全く反対のどうしても会いたいという気持ち、何が何でも会ってみせるといった気持ちが崇史を支配していた。なぜなら、何をやるにしてもこの鬱積した気持ちを晴らす為には彼に会うより他はないのだから。

だが、その後、崇史の予想に反して怒りの気持ちを書いた長文のメールにウイリアムは反省の文を寄越してきた。この二日間ですられてきた数々のメールにより崇史の気持ちは幾分か落ち着いていた。もちろん、彼のメールを文面通りに信じる事はできなかった。それどころか全く信用していなかった。それに、軽々しく愛を語る彼の態度が崇史をいらつかせもした。今、彼が必要としているのは見せかけの愛ではなく誠実な態度であった。

崇史は二日前の出来事を何度も思い返していた。あの時、自分がとった行動は明らかに異常であった。なぜ帰宅するという選択肢をとらなかったのか。それに、約束の時間に合わないどころかとうとう最後まで来なかった経験は以前にもあったはずだ。もしかして、外国では普通に起こる出来事なのかもしれない。そういった場合、皆どのような行動にでるのだろう。何より問題なのは完全にウイリアムのペースにはまってしまうことだ。彼の行動に合わせるのではなく自分は自分の意志で、リズムで行動しないといけない。なぜいつも冷静に考えて行動できないのか。崇史は自分自身に腹を立てた。

金曜日の夕方、ルーカスとカリナは彼女の誕生日をロンドンで祝うという理由で一緒にケンブリッジから帰って来た。崇史は一連の出来事のせいで彼女が土曜日誕生日だということをすっかり忘れ

ていた。

崇史にとってカーリーナを見るのは初めてであった。ルーカスから聞いていた話や彼の理想の女性像などから勝手にカーリーナを想像していたが、自分の作り上げたイメージとカーリーナ本人は随分と違っていた。崇史はもつとかわいらしい幼稚な少女を想像していたが、今、目の前にいる人物はどこか冷たい雰囲気を漂わせ、また外見적으로는有無を言わせない程の完全なる美女であった。彼女の態度からして崇史に対する第一印象が好ましくないのは明らかであった。だが、彼らはお互い全く興味が無いのにも関わらずあれやこれやと質問しやうた。

崇史はなぜかしらカーリーナに対して嫉妬しているのを感じた。本来は彼らを祝福すべきであるのに、今の彼にはその余裕はなく二人の関係を疎ましく感じるのであった。その上、崇史にとって、ルーカスは特別な人物であり、単なる友達という言葉では片付けたくはなかった。もちろんルーカスとは一線を超えることは不可能であり、それはあり得ない事であつて、また想像することすら失礼である。それは理性でも感情でも理解していた。それでも、やはりルーカスはこのフラットでは自分にとって特別な存在でいてほしかった。

カーリーナもまたルーカスが崇史に対して必要以上にやさしく親切であることが気に入らなかつた。彼女は一見して崇史がゲイであること、それにルーカスに気がある事を見て取つた。なぜルーカスがその事に気が付いていないのか彼女には不思議でならなかつた。カーリーナもまたルーカスから聞かされていた崇史の話から彼女なりに彼のイメージを作り上げていた。だが彼女の崇史に対するイメージは完全に打ち砕かれていた。ルーカスから聞いていた人物とはかけ離れていたのだ。ルーカスに対する崇史の気持ち隠そうとしてもそれは彼女からすれば明らかであり、崇史自身それを完全に自分自

身に対して否定してもやはり愛なるものは完全に消しされるものではないのだ。

だが、ルーカスはどうか？無邪気な彼は純真な意味で崇史を愛した。だがそれは、単純に彼に対しての尊敬からであり、また彼の無垢なやさしさに対しての彼の心からの反応であった。決してそれ以上のものではない。もちろんルーカスですら崇史が自分に好意を持っていることは知っていた。だが、それはそれでどうしたというのであろう。彼にとつて、それは親友としての美しい心の表れであり、何も他意は含まれてはいないのである。

崇史は他の男とは違ってカリーナを崇拜しなかった。誰もが示す彼女の美に対する敬意を彼は示さなかったばかりか、それに敵意すら感じた。なぜか彼女の美が彼にはけばけばした品のないものに見えた。どうしてルーカスが彼女を恋人として選んだのか理解できなかった。崇史にはどうしてもルーカスとカリーナが別種類の人物に思えたのだ。

ぎこちない雰囲気、或は敵意すら漂う空間は、デイビットの帰宅によつて終わった。デイビットはカリーナを一見するなり感嘆の声をあげた。「君はなんて美しいのだ。全く信じられない」事実彼女は絶世の美女だった。デイビットは何もかも忘れて或はルーカスの彼女であるということすら忘れて夢中に話し始めた。彼により険悪なムードは一瞬にして消え去った。

翌日、部屋は飾り付けられ、地味な彼らのフラットもいつもと全く雰囲気が違っていた。土曜日は朝から料理作りだった。各々がそれぞれの国の料理を作った。崇史はパーティーが始まる一時間前に勤務先の近くにあるイタリアンレストランのアマトから特製のケーキを取り寄せた。その美しいケーキにはカリーナも大喜びで思わず

崇史を抱き寄せ頬にキスをした。

大量のプリゼナービールを持ってハベルもやって来た。彼は料理をしない。でもビールは彼らを十分に満足させた。皆それぞれが生き活きとしカリナーの誕生日を楽しんだ。

三時頃に崇史はウィリアムからメールを受け取った。そこには、今日ぜひ会いたいこと、六時三十分に会いに来てほしいといった内容が書かれてあった。崇史は当然のごとく彼の申し出を断った。そもそも、彼が会いたいのなら、彼こそが自分に会いに来るべきではないか、それに、先日の事を考えるとその権利を有するのは自分であるはずだ。今度はウィリアムが僕の都合に合わせる番だ。

だが、そのメールに対する返答は意外なものだった。その内容はとても強い断固たる文面で「必ず今夜でなければならぬ、もし今日会わないのなら二度と会う事はないだろう」と書かれてあった。それを見て崇史は驚き焦った。何と自惚れの強い男だろう。だが、彼はもうウィリアムに振り回されるにはご免だった。これ以上悲しむのはどうしても耐えられない。それにもう到底彼とは自分の望むような思い出などは作られそうにないのだから。

その後、崇史も怒りの籠った内容で返事を書き送り返した。「会いたいのならあなたが会いに来て下さい。僕は今忙しいのです」といった風に。だが、それに対する返事は来なかった。崇史はいらいらしながらメールを待ち続けた。その間、彼には少しもカリナーの誕生日パーティーを楽しむ心の余裕がなかった。彼の頭の中はウィリアムとの対決の感情がうずまき、いらいらする気分と焦りの気持ちがちが混ざり合っていた。どうにもこうにも何とかしない限り、この怒りを押さえつけられそうにもなかった。とうとう六時十分になった。崇史は怒りの感情を極力押さえつけ落ち着きを必死に保ちなが

ら、青白い顔をしてウィリアムに電話をした。

今、受話器を持ってダイヤルしている自分が信じられなかった。屈辱的行為で、理性では、やってはならない事は分かっていた。ドキドキしながらウィリアムの声を待った。それは永遠に鳴り続くかのように長く感じられた。ウィリアムの第一声はとても厳しい口調で、話をするのもうっとおしいといった風であった。

「誰だい？早く用件を言ってくれないかな？」

それに対し、おどおどした、それでいて精一杯断固たる口調で返事をした。

「今から僕の家まで会いに来てよ」

崇史の声は震え涙声であった。電話はあっけなく途中で切られた。それもすごい音を立てて。彼は夢中でもう一度電話をした。だが、今度は、電話は無視され返事がなかった。悲しい気持ち、絶望的な気持ちで彼は再度電話をした。

三度目の電話はすぐに取りられ、大声で「七時までは待つ、だが、それ以降は何があってもノーチャンスだ」と一気に怒鳴られた後、ガチャンと強く電話は切られた。崇史の耳にその音と彼の怒鳴り声は悲しくいつまでも響き、彼の心をずたずたにした。

崇史は今の状況がうまく飲み込めなかった。ウィリアムは何て無礼な人物なのだろうか。彼の自惚れの強さと自分を邪見に扱う彼の態度に怒りが爆発しそうだった。もしも、目の前に彼がいたなら鬱積した苛立ちを捲し立て間違いなく殴っている事だろう。彼はくやしさに震えた。

カリーナのパーティーが恐ろしくつまらないものになっていた。楽しそうに幸せそうにカリーナを撫でているルーカスを憎くすら思った。どうして今日に限って、彼女はこのフラットにいるのだろう。崇史は再び時計を見、周りを見渡した。一向に終わりそうにない。まだまだきつと遅くまでパーティーは続くのである。もしかして夜通し続くかもしれない。彼はせっかくのパーティーを抜け出すのは申し訳なく思い、なかなか言い出す事ができなかった。だが、彼らはそんなことはどうでもいいくらいに上機嫌で、今の彼らには崇史を必要としなかった。

崇史は突然席を立って「ごめんなさい、急に用事ができてしまって、今すぐに出かけないといけないんだよ」と一気にそう言った。

ルーカスは残念そうに頷き、カリーナはぱつと顔が輝き、その後、無理に悲しそうな顔を作った。デイビッドもハベルも酔っぱらってどうでもいいよと手を振っていた。ジエーンは「料理はちゃんと取っておくから心配しないでね」と元気づけるように崇史を見送った。

もうこれ以上は一刻の猶予もない、あとわずかといった時間で家を飛び出した。右手にはロンドン地図を持って、携帯のメールにあった住所を繰り返し見ながらウイリアムのフラットがある場所に目印をつけた。ロンドンブリッジ駅に到着したのは、もう七時すぎであった。なんとかして、待つて欲しいという気持ちでメールを送ろうとすると、プリペイドカード残高が切れていた。彼は急いでキオスクでカードを買ったが、手が震えてうまくID番号を入力できない。崇史ははつとした。きつとあの売店の男は偽物を買ったに違いない。彼は、再び売店に戻り、鋭い目つきでレジのインド系の男を睨んだ。彼はいらいらのあまり、強く抗議した。普段の彼は紳士的であり、決して怒鳴ったりするような人間ではない。だが、今の彼

は自分自身をコントロールできなくなっていた。

だがその男はやさしく微笑み難なくID番号を入力した。そして最後に彼は崇史の顔を撫でた。彼は崇史を子供だと思ったのか、それとも彼の怒りに対する軽蔑の態度だったのかは分からない。どちらにしても、焦って理性を失ってしまった自分を恥じた。そして、彼を疑ったことに対して罪の意識を感じた。

崇史は大急ぎでメールを打った。だが送信する段階になると、むなしく電源が切れた。そういえば、ここ何日間か充電をしていなかった。崇史は愕然とした。とうとう、最後まで僕は拒絶され、神にまでも見放された。僕はなんて不幸な男なのだろう。彼の目にはうつすらと涙がこぼれた。だが、次の瞬間、異様なまでの何があっても会ってみせる、運命にも打ち勝ってみせるといった強い意志が彼を包み込んだ。『僕を舐めるなよ。このままでは終わらせないからな。いかに神が行く手を阻もうとも、それは無駄だ。なぜって、間もなくウイリアムに会うのだから』彼は乱暴にそう天を睨め付けながら音のない声で言い放った。崇史は異常なまでに興奮していた。繰り返し失敗から学んできた事は全て吹っ飛んでしまったかのようにであった。なぜ今、彼はウイリアムの家に向かっているのか？まだ彼が好きなのか否か？何もかも全ての考える機能が停止し、彼の頭の中にある映像はウイリアムとともに抱きしめ合っている、或は、全く逆の彼を殴りつけている映像のみであった。

崇史は今まで非実用的だと決めつけていた公衆電話を使ってメールを送信した。「今、あなたの家に向かっています。少し遅れそうだけど、絶対に行くので待っていて下さい」と。そして、猛然とまるで大きな敵にでも立ち向かうかのようにドシドシと音を立てて進み出した。プラットホームに出た彼は間もなく出発する列車に飛び乗った。あまりにもぎりぎりに乗車したので乗客達が驚いて一斉に

彼を見た。だが彼は乗客が自分を見ている事に少しも気が付かなかった。

崇史は座席が空いているにもかかわらず、じっとしていることができずに車両の中を行ったり来たりぶつぶつ言いながら移動していた。彼は電車がこんなにも遅い乗り物だとは思ってもしなかった。そして、駅に停車する度にいらいらした。彼はまた腕時計を見た。いったい何度、時間をチェックしたであろう。携帯電話の電源が切れている為、送信したメールの返事すら受信できない。果たして本当にウイリアムは待っていてくれるのであろうか。

ウイリアムのアパートがある駅に到着後、大急ぎで電車を降り、改札口を出たものの、急に怖じ気づいたかのように、緊張感が彼を襲った、地図上のマークは駅からほんの数分で行ける距離である。崇史は早く着きたいという気持ちにも関わらず無理にゆっくりと歩いて、呼吸を整え、再度マフラーを巻き直し、飴を口の中に放り込んだ。そして、何度もしたように、車のミラーで今の自分が最高の自分であることを確かめた。

崇史はなんとか自力でウイリアムのアパートにたどり着いた。玄関の扉の前で大きく深呼吸し髪を整えドアをノックした。その後すぐに家の中からウイリアムが出て来た。その姿は崇史にはあまりにも美しく輝いて見えた。それはこれまで鬱積した恨みやいらいらを全て消し去る程の衝撃であった。

ウイリアムの容姿は崇史が記憶していた顔とはかなり違っていたが（わずかに三週間前に彼を見たというのに！！）、その映像は実物を見たその時から修正され消え去った。彼らはお互いの顔を忘れていた。実際彼らが顔を見たのは全てあわせても数時間しかない。僅かの記憶がそれぞれの肖像を作り上げていた。そして、ウイリア

ムもまた崇史の顔をじっくりと確かめる為に、上から下へ全身を舐め回すように見た。彼の感想は誰の目にも明らかであった。彼はすっかり満足したようで、崇史を部屋の中に招き入れるなり強くきつく抱きしめた。肌と肌の接触はまるで電流が体に流れるような感覚であった。崇史はこの感覚を長い間待ちこがれていたのだ。

そして、強引にあまりにも長く深いキスをした。ウイリアムの唇はなかなか崇史の唇を離そうとしない。激しい接吻が終わったかと思つとまたウイリアムの手は崇史のあごをつかみ、顔を自分の前において再び激しいキスを始めた。彼の舌と唾液、それに口臭までもが激しく崇史の中に入り込んだ。それは今まで味わつたことのない快感であつた。あまりの興奮の為、崇史は立ち続ける事ができなくうずくまりかけたが、ウイリアムは両手を崇史の背中にまわして彼を支え、顔を舐め回した。

その時、ウイリアムは勝利に酔つていた。何てバカな男だろう。

ここまで侮辱したにも関わらず、こいつは俺に会いに来ている。それに目の前にいる男の満足した顔は！！！歓喜に満ちた笑顔は！！！！

ウイリアムは崇史を居間へ導いた。驚いた事にテーブルの上には二人分の夕食が用意されていた。あれほどきつい言葉を発しながらも僕を待っていたのだ。崇史はウイリアムが自分の来るのを期待していたのだと思つた。彼はすっかり満足した。先程の接吻といい、この見事な食事といい何と素晴らしいひと時なんだろう。

ウイリアムは食事をしながら時々ちらつと崇史を見ては微笑んだ。二人はまるで長い間離れていた親友であつたかのように熱心に話し始めた。ウイリアムは崇史の会話に調子を合わせ、また彼のあまり流暢ではない英語にも辛抱強く耳を傾けていた。崇史には彼の顔を見ると自分の話にとっても興味があるように思えた。ウイリアムは時

折豪快に笑い、話の続きを促した。

崇史にはウイリアムがとても不思議な人物に思えた。この家に入るまでの彼と、今、目の前に座っている人物がどうにも同じ人物でないように感じられるのである。今、僕ははつきりと断言できる。

僕は彼がとつても好きである事を。できることならずと彼と一緒にいたいとすら思っている事を。考えれば考える程、分からなくなり、思考が麻痺していくようだ。もしかして彼がこれまで僕に対してやったことは現代の恋愛スタイルなのだろうか。自分の考えがきつと時代遅れなのだろうとも思った。自分が彼に対して深く考え過ぎていたのかも。それはもつと単純で簡単に拒否したり要求したりできるものなのか。先日ウイリアムが約束を破ったのも、今日のきつい語調もどれもこれも自分の英語力不足で、きつとずっと浅いものに違いない。崇史は上機嫌で笑顔を絶やさず話続ける一方で、頭の中では様々な考えがぐるぐる回っていた。でも、崇史は自分の都合の良い解釈を払いのけた。幸せいっばいの顔は警戒する顔に変わった。しっかりと問いつめなければ。もしも、明確な答えを得られなければこのまま自宅に帰らなければ。崇史は意を固めウイリアムの目を見つめた。その目は深刻な目であった。

ウイリアムは少し当惑したような目で彼を見つめ、次には彼らの唇は重なり合っていた。ウイリアムが崇史の険しい目をどのように解釈したのかは分からない。ただ彼の唇は全ての疑念を払いのける力を持っていた。今の快感は崇史をもうどうでもいいや、といった気持ちにさせた。

ウイリアムは食事を食べ終わると当然のごとく崇史の手を強く握って寝室へ導いた。彼は崇史の手から激しい鼓動が伝わって来るのを感じた。ウイリアムは彼の緊張感を純粹に感じ愛おしく思った。彼は崇史を自分の前に立たせやさしく全身を撫でた。彼は自分でも

どうしてかわからなかったがやさしい気持ちで自分を包んでいた。だが、丁寧に服を一枚一枚脱がせて、裸体が見えるとその穏やかな気持ちはどこかへ吹っ飛びいつもの支配的な感情がそれに変わった。

崇史はそんなウイリアムの心の移り変わりには少しも気が付かなかった。彼はそれどころではなく緊張しきっていた。ようやく自分が期待していた展開になってきたというのに、いざそれが目前にはかるとどうして良いのか分からず、頭の中はパニック寸前であった。彼は自分の服が脱がされるままになっていた。崇史が下着だけになった後、ウイリアムは豪快に一気に自分の服を脱いだ。ウイリアムの体には勃起した巨大なペニスが崇史の方を見ているかのようについていた。崇史は彼の美しい引き締まった裸体を見て、自分のペニスが急速に勃起し下着に治まりきれない大きさになっているのを感じた。

ウイリアムはそのペニスの動きをいやらしく眺め、崇史をベッドに押し倒した。崇史の頭の中も今や野獣のようであった。今までに感じたものとは次元の異なった新たな性的欲求が彼を支配していた。彼の思考は正常には機能しなくなっていた。ただただ欲望だけが支配している状態であった。彼らは激しく愛撫し合った。お互いがそれぞれを求め合うかのように。崇史は最高の快楽を感じていた。それはまさしく自分が長い間思い描いていた通りの展開であった。だが、崇史はこの先どのような事が起きるのか想像できなかった。そして、彼は今のこの状態で十分に満足できた。

崇史はウイリアムが自分の中に入れようとするペニスを恐怖心から手で払いのけた。彼にはまだ精神的にもその他にも準備ができていなかった。払いのけた瞬間、ウイリアムは全てを停止して訳が分からないうちだった顔をした。明らかに侮辱されたようであった。そうはいっても、いったいどうすればいいというのだらう。これから

先は未知の世界であり、そのことは彼を不安にした。だが、ここで断つてはすべてが台無しになる。それに、本当はこれこそが自分が今まで望んで来た事ではないか。崇史は意を決して同意し、財布の中に入れておいたコンドームを取り出した。

それでも、ウイリアムの侮辱された様子は消えなかった。

「君は俺を信用しないのかい？こんなにも君を愛しているというのにいつたいこれはなんだい？」ウイリアムはそう言ってゴムを投げ捨て、崇史の全身にキスをした。

崇史はその時、恐ろしいほどに強烈な快楽を感じた。もう何でも良い、どうにでもなれ。そして、彼の体はウイリアムを受け入れた。だが、それは感動や快感だけでは済まなかった。それは想像していたようなとは違って、予想を超える激痛が彼を襲い、全身からは汗が吹き出て、あまりの痛みで彼は激しく悶えた。必死になって耐えようとする自分と、これ以上は耐えられないといった自分がいた。だが、これほどの痛みにはどうにも我慢できなかった。崇史はあきらめて体を離そうとした。だがウイリアムの体は彼を離さず、崇史の苦痛に比例するかのごとくウイリアムの挿入の激しさも増してきた。崇史の必死に懇願する叫びは空しく無視されていた。崇史は強引にその場から離れようとするも、ウイリアムの腕力は崇史の反抗的な力を軽々しく押さえつけた。

お尻の中の大きな異物が吐き下を催した。それと同時に汚物がお尻の中から出てきそうな感じがした。何とか終わってくれないか。そうでないと漏れそうだ。崇史は必死に念じながら我慢した。そして、ウイリアムは射精し絶叫した。巨大に膨れ上がったペニスが彼の中から取り除かれた。彼のセックスはあまりにも一方的なものだった。ウイリアムのペニスの先には血と汚物が付いていた。ウイリ

アムはそれを見て笑い、汚れたペニスを崇史に見せ何やら卑猥な言葉をついた。その後、彼はそそくさと下着を穿き部屋を出て行った。

崇史は痛みから解放されてほっとした。これ以上あの激痛が続くなんて想像ができなかった。それでいて性行為をやり遂げたという達成感もあった。少なくとも途中で中断する事はなかった事だし。彼は開放感にぼんやりとしながらベッドのすぐ脇にあるティッシュでお尻を拭いた。そこには血と精液とそれに黒い物が混ざり合っていた。彼はそれを見て恥ずかしさに真っ赤になった。

部屋に一人とり残された崇史は何もしたくはなかった。このままベッドの上で寝ていたかった。数分してウイリアムは部屋に戻って来てやさしくキスをし、また愛撫した。滑らかに体を摩っているウイリアムの顔を見ると僕は間違っではないなかつたと思った。そしてこのまま時間が止まればいいのにと思った。崇史は今、ベッドの上で撫でられている猫のような気分でも心地良かった。眠気が彼を襲いこのまま眠ってしまおうと少しずつ目が塞がっていった。

ウイリアムは崇史の体を撫でながらつい先程のエッチを思い返していた。彼の苦悶する姿、泣き叫ぶ姿を想像し興奮していた。彼は崇史を引き寄せぎゅっと抱きしめた。ウイリアムは濡れたタオルで彼のお尻を拭きペロペロと舐めた。崇史は眠気で意識が朦朧としながらも恥ずかしさで顔を覆った。彼の頭の中には自分の汚物があった。きつと臭いがするに違いない。

その後、ウイリアムは再び勃起したペニスを挿入し、今度はじっくりと痛がる姿、悶える様子を観察しながら射精した。

全てが終わった今、崇史の頭はウイリアムの腕の上に置かれてあった。崇史はすっかり満足していた。なぜならばウイリアムは二度

も自分を求めた。崇史はその時のウイリアムの興奮した顔を忘れられなかった。彼の顔はまさに僕を心から愛しているといった顔であった。それには彼の唇は何度も繰り返して僕を求めたではないか。こんなにも激しい愛の表現を崇史は未だかつて経験した事がなかった。その愛に自分は答えてみせる事ができた。『ウイリアムの顔を見て下さい！！彼の満ち足りた表情を！！』彼らにはもう言葉など必要としなかった。物音一つしない静寂の中を彼らの呼吸、体が布団とこすれる音、それにウイリアムの崇史の体を撫でる大きな手、それら一つ一つが崇史を心地良く刺激し、その時の彼の歡喜に満ちた顔は輝いていた。

ウイリアムもまた満足していた。今日一日、約束していたセックスフレンドにキャンセルされていららしていたのだ。そんな時に代替人として崇史はまさに好都合であった。それに崇史はウイリアムにとって久々に無垢な少年（童貞）との性交であった。そして、彼のうれしそうに時々こちらを見る姿はまんざらでもなかった。だが、これ以上のんびりしてはいけけない。このままではまた崇史は勘違いしてしまうかもしれない。ウイリアムは心得ていた。彼のような純粋なタイプの男はセックスフレンドには成り得ない事、すなわちすぐに彼のような男はかりそめの愛を本気にとってしまうのだ。できる事ならばこのような一夜を何日か作りたい、でも、彼に縛り付けられるのはまっぴらだ。彼に依存されるのはご免だ。ウイリアムは崇史をもう一度眺めた。このまま家に返すのはもつたいないようなピュアな体をしている。ウイリアムは再び全身を舐め回し最後にもう一度ペニスを挿入した。それは射精をともなわなかったが充分に感触を楽しんだ。

その後、三十分程語り合った後、ウイリアムは崇史に家に帰るように促した。時計は夜中の三時を指していた。

「どうして？僕は今日ここに泊まるよ。今から帰っても意味がないし」

「駄目だ、帰れよ」有無を言わせない語調だった。やっぱりそうだ、タカシはすでに勘違いをしている。なんだって俺の家に泊まるうとするのか、と彼を鬱陶しく思った。

崇史は仕方なく諦めキスをしようと唇を尖らした。だが、ウイリアムはそれを冷たく無視した。その後、崇史はしぶしぶ服を着て彼らはフラットを出た。

二人はナイトバスに乗ってウエストエンドまで行き、お互いの頬に別れのキスをした。崇史は名残惜しそうに何度も振り返り、小さくなっていくウイリアムの後ろ姿を見つめた。

トニーすなわち李はたった今、崇史とウイリアムがキスをしているのを目撃した。トニーの疲労しきった脳は急速に回復し活動し始めた。彼の目はギラギラと輝き、じつと崇史が歩いている姿を目で追っていた。そして、彼の唇は意地悪く歪んだ。これはまさに天からの贈り物に違いない。彼は震える手で、ウイリアムに関する重大な情報を持っているというのをほのめかしている内容のメールを克也に送信した。トニーは知っていた、克也がウイリアムに憧れ彼のグループの一員になりたいという事実を。だが、ウイリアムは克也に全く興味を示さなければかりか、彼の存在は彼の脳裏の片隅にすら存在しないということ。だがどうだろう、克也がかわいがっている崇史がウイリアムと親密な関係をもっていたなんて。トニーは克也が崇史に嫉妬し激怒する姿を思い浮かべ狂喜した。トニーは自宅には戻らず、再び克也を探しにウエストエンドへ戻って行った。

第7章

克也は目の前に立っている李を軽蔑的に見下ろした。先程からにたにたともつたいぶつたように、「ウイリアムに関するすぐく面白い情報があるんだけど、聞きたくない？」と繰り返していた。そんな李を無視して、克也はゲームズや金達とDSに夢中になっていた。李はいつこうに自分に彼らの注意を引きつける事ができず、ついにしびれをきらしたように、「明け方、タカシとウイリアムがキスしたのを見たよ」「なんだか、二人はウイリアムのフラットの方からやってきたみたいだったけど」と彼らの目の前に強引に立ち暴露した。

その時、克也の体が一瞬ビクツと震え、彼の目が険しくなった。だが、もう次の瞬間には彼は何事もなかったかのように「そんなつまらない事を言いわざわざ来たのかよ？」とあきれたように言い放った。だが、李は克也の一瞬の変化を見逃さなかった。李は何も気が付かなかったかのようにおどけて、側のソファアに座った。

克也はいらいらと、ゲームをストップし、DSを李に渡し、トイレに向かった。ほんの少しだけでも一人になって冷静に考えたかった。いったいどうして、タカシは俺の手に入れられなかったものを次々に自分のものにするんだろう。この間、あいつに貸した洋服もウイリアムとのデートの為だったのだと思うと無性に腹が立った。もうこれからはあいつは俺の友人じゃない、と意地悪くつぶやき、白いトイレの壁を思いつきり強く殴った。

トイレから戻った彼はトニーに二十ポンド札を手渡し「これで、俺らの朝食を何か買ってきてくれないか」と軽く背中を叩いた。そして、彼を玄関まで見送って、「あそこの角に朝早くからやってい

る商店があるからヨロシク」と指差した。トニーは満面の笑みでそれに答え駆け足で道路を横切って行った。トニーは確信した、ついに僕は克也の仲間として認められたんだと。この瞬間は彼が人生で初めて誰かに友人「一員」として認められた瞬間でもあった。この出来事が今後彼を大きく変え、そして、ステップアップさせることになる。李は崇史を裏切ることによって人生の活路の切符を手に入れた。彼にとってそれは彼の人生の中の暗い汚点となるかもしれない。なぜならそれは今後崇史を大きく傷つける事になるであろうから。たとえそうだとしても、或は、今後彼の人生の中で大きな代償を払わなければならぬとしても、李にとっては彼の人生を変えるきっかけとなったのだ。

崇史は目が覚めてもまだ自分が夢の中にいるような気分であった。もしかして、現実の世界はそれ以上に甘いものかもしれない。彼はウイリアムの野獣のような目を思い出した。そして、想像を絶する激しい苦痛をも。だが、その苦痛は決して不快なものではなく、自分とウイリアムが合体して一つになった証、すなわち勲章のようなものを感じられた。彼がベッドを勢い良く起き上がるうとする、まだお尻に痛みを感じた。崇史はお尻の違和感に声を上げて笑った。彼は再びベッドに腰を下ろして次々に連続して溢れ出て来るウイリアムの映像を制御できなくなっていた。そして、崇史は昨晚、彼のフラットで見た最後のとても冷酷な目つきと投げ捨てるような冷たい言葉に身震いするほどの快感を憶えた。崇史は午前中ずっと興奮状態であった。

だが、その日からメールが来なくなった。以前と違ってウイリアムにメールを送る事、或は、電話をかける事に対して何の気後れも、躊躇もなかった。なぜなら、僕はウイリアムのものであり、彼は僕のものなのだという考えを崇史が持っていたからである。それに、彼にはお互いの未来がもう目の前に来ているとすら感じていた。少

なくとも自分と彼の愛は美しいストーリーとして完成されるであろう。たとえそれが永遠のものでなくとも。

いったい崇史は何度メールを送っただろうか。それに数えきれないほど電話もかけた。しかし、いつまでも返事が来ることはなかった。三日目とうとう何か恐ろしい出来事が彼に降り掛かっているのではないかという不安が頭をよぎった。そうかといって、彼はウイリアムの友人、隣人についてまだ何も知らされていないなかったので、どうにも確認がとれなかった。

ようやくはつきりとした形でもって幸福がもたらされたというのに、また再び突然の事故？事件？によって奪い去られるのは何たることか！！！心配と落胆が時をたつごとに、ますます大きくなって、崇史はパニックになりそうであった。だが彼は分かりかけていた。決してウイリアムと連絡がとれない理由が事故ではないということ。彼の頭にちらつく、ウイリアムがこれまで自分に対して行った数々な不良な行為を何度も頭から追い払った。あゝまた彼は僕をじらそうとしているのか。よやくウイリアムが本気になって自分の思うような形で事が進みだすと思っていたのに。崇史は何の疑いもなくそうなるは無意識の内に確信していた。だが、結局彼の本質は何も変わっていないかった。彼がベッドの上でした一方的な性行為の画が愛で包まれた輝かしいものではなく、一転して冷酷などす黒いものへと変わっていった。

崇史は三十分毎に電話をかけていたのだがいてもたってもいられず自然と足はウイリアムの家へと向かっていた。崇史はそうは言ってもまだウイリアムを信じ愛していた。『彼と初めて出会った時に感じた直感を信じなければ』と崇史は何度も自分に言い聞かせ何とか落ち着こうとした。彼はバス停の前に公衆電話を見つけるとバスの待ち時間ですら惜しく思えてまた電話をかけた。携帯電話を持つ

ているというのに、その事すらも忘れてしまっていた。もう彼の電話番号は手が覚えていた。

驚いたことに全く予想外に受話器はとられた。ウイリアムも崇史の声を聞くと少しびっくりしたようで、でも次には気だるそうな語気で、

「もう恋愛ごっこは終わり。俺は忙しくていつまでも君にかまってやれないんだよ。じゃ」と電話はあっさりと、そして、もう二度とかけられないほどに強い音を立てて切られた。

一瞬何が何だか分からず、動くことができなかつた。素晴らしい天気にもかかわらず崇史の周りは真つ暗闇が包み込んでいるかのようであつた。くらくらとフラットまでの道を歩き自分の部屋につきなりベッドに倒れ込んだ。ベッドの上でウイリアムが電話の向こうで言った短い言葉の意味を必死に考えた。きつと、ウイリアムは僕が彼に裏切られたと知っていて何度も執拗に電話をしていたと思つているのだろう。きつとそつだ。それまでの崇史はあまりにも鈍感であつた。

いつたい何時間眠つていたのかは分からないが、その間数々の悪夢を見た。言葉では表現できないような悪夢。ぞつとするような悪夢。高所恐怖症の彼は高いビルの屋上でまさに風に吹き飛ばされそうだった。次の瞬間はゴースト達が取り囲んでいるシーン、また次の瞬間は巨大なクモが自分を食べているシーンであつた。目が覚めると夜中の二時でフラットの中は真つ暗だった。そして、また再び眠りに落ちた。

ウイリアムのメールアドレスは変えられていた。もう全く電話にも応答してくれない。きつとこの間、公衆電話からかけた時、受話

器を取ったのは相手が誰か分からなかったからであろう。いつたいこれからどうするべきだろうか。崇史は途方にくれた。これでは、僕も単なる馬鹿な男女と同じじゃないか。彼は今まで恋愛で冷酷な人物によつて騙され、翻弄された人々の数多くの話を聞かされていた。実際に経験した人物をも知っている。それらの話を聞いた時、彼は間違いなく被害者を馬鹿にし、自分には起き得ない事だと確信していた。だが、今まさに崇史は自分が笑ひ者にしてきた彼らそのものなのである。彼は自分もその中の一人だなんてとても信じたくなかった。確かに、最初から全てがおかしかった。ずっとからかわれていたのも理解できる。でも、こんな別れはあつていいものだろうか。これではなんの思い出もできやしない。たつた一度の彼とのエッチも一方的だった。僕は彼にとつて使い捨ての人形なのだろう。それに、雨の中何時間も待たされたつ。つまるどころわずか二ヶ月間の彼との関係はストレスの固まりにすぎない。とことん馬鹿にされ侮辱され、それでもついついしたのにもかかわらず最後がこれだなんて。僕にはただの一度も幸福なる瞬間を感じるのを許されなかった。

彼の鼓動は高まった。あの晩、僕は射精しなかった。いやいや射精させてくれなかった。僕には快感の瞬間を与えられなかった。全てが読めたような気がした。崇史はパンツの上から自分のペニスをまさぐった。それは大きく勃起していた。彼は性器を枕にこすりつけ激しく腰を動かし射精した。べつとりと精子がついた枕を力一杯何度も殴りつけ壁に向かって思いっきり投げつけた。そして、ずかずかと大きな音を立て歩き、枕を拾い上げると再び壁にぶつけた。彼はもう一度射精した。自分は決してウイリアムよりも下であつてはならない。彼には決して決して自分をおもちゃにさせるわけにはいかない。

彼はいらいらし、その感情があり得ない程に高まつていった。そ

して、どうにもできない自分が悔しくて仕方がなかった。どうしてもウイリアムに会えないのだから、どうすることもできないじゃないか。彼は拳を強く握って机を思いっきり何度も叩いた。何としても彼を後悔させなければ。絶対に苦しめないと。心をずたずたにしないと。崇史はウイリアムのフラットの玄関の前で手首を切つて自殺する自分の姿を想像した。彼は僕をじゃけんに扱った事をきつと後悔するに違いない。それに、大声で泣くかも。でも、もう手遅れである。彼が懺悔する頃には僕の命は失われてしまっているのだから。一生そのシーン、僕が血に真っ赤に染まり、絶望の表情で死に絶えているその姿はウイリアムに付きまとうであろう。彼は一生後悔するしかないのである。崇史は自分が死に絶えていく姿に、ウイリアムが苦しさに悶えている姿に涙した。

だが、崇史が悲劇のシーンを想像して最高に高揚しているその画の中に、突如、ウイリアムが自分の死体を見て、大声を出して笑っている姿が浮かんだ。その画の中のウイリアムは自分を思い、命を落とす崇史を勲章のように思っていた。それは彼にとっては思い出す為に、誇りに思う瞬間かもしれない。崇史は想像した、ウイリアムが数々の男性にいかにも自分が魅力的かを表現する為にそのシーンを大げさに語ってる姿を。そして、悲劇の物語の中心が自分ではなくウイリアムである事を。彼はむしろくしゃした。あいつは僕が命を落としてもなお平気でいられるのだ。彼は人間でない、悪魔なんだ。

崇史の内部から恐ろしく激しい憎悪が湧きだし、それは彼の人生で経験した事のない程の大きさであった。彼はその時初めて人を憎むというのはどんな感情なのかを知った。今までの憎悪は憎しみではなかったようにすら思った。どうにもこうにももう自分で自分をコントロールできない状態であり、どうにかして彼を痛めつけたい、今自分自身を感じている同じ痛みを或はそれ以上のものを与えなけ

ればならないと身体全身で思った。天罰は下されなければならないのだ。彼は怒りで身体が震えていた。気が付けばナイフをもって地下鉄に乗りただひたすらウイリアムの家に向かっていた。

『僕を弄ぶ奴は放っておく事はできない。もう僕は今までの僕ではないのです』

『もう誰にも僕を侮辱させはしない。彼を殺して自分も死のう』

今まで、幾度も殺人犯を軽蔑した。自分が人を殺すなど想像すらできなかつた。何が起ころうとも他人の生活を破壊することだけはあり得ないと思っていた。自由は他人の生活を尊重する事で成り立っているのだから。だが、今はもう何か全く別の自分が現れ、理性なるものが完全に吹き飛んでしまっていた。体全体に染み渡った憎悪、今の彼の中にはただ憎しみのみが存在していた。

『僕は彼を刺し殺すであろう。僕は神のごとく審判を下す』

彼は血を流して痛みに悶えているウイリアムを想像した。彼の顔にはべつとりと悪臭を放つ精子があつた。崇史はウイリアムの醜態を思い浮かべて人目も気にせず大声で笑つた。

『彼は僕だけではなく世界にとって有害なる存在なのだ。殺すことに対して何の躊躇があるのか』

『彼を殺した後、果たして僕は死ぬ必要があるのだろうか。僕は世界にとって有益なる事をするのだから死んでたまるものか』

彼の家に近付くにつれて怒りはますます増幅し、殺す事に対する歡喜で彼の顔は異様な形相をしていた。彼はウイリアムのような者

は心を傷つける事はできないと知っていた。なぜなら彼は正常な心を持ち合わせていないからである。そう彼が最も恐れる事、肉体的な痛み、すなわち死をもつて制裁を加えなければならぬ。そもそも彼は尋常ではないのだから。

もう誰も崇史を止めることはできなかった。どのようにしてウイリアムのフラットまで来たのかは覚えていないが、目の前にそれがあった。崇史の目からは一筋の涙が溢れた。彼はドアをノックした。片方の手にはしっかりとナイフを持っていた。なかなかドアは開けられなかった。もう一度ノックした。鍵はかけられていなかった。中から、ウイリアムが「カムイン（入れ）」と大声で叫んだ。

ドアをあけると想定外に複数の人が入った。一斉に彼らは崇史を見て、彼の手にあるナイフに気が付くとげらげらと笑い出した。

「またかよ、お前今度は誰を弄んだのかい」

ウイリアムはそれには答えず、ただにやけていた。彼の周りの男達はまただといった風に呆れていた。

「お前、ナイフを下ろせ。こいつはそんなんじゃ懲りないよ」

そこには日本人らしき人物もいた。その男は背が高かった。彼は軽蔑的に崇史を見て日本語ではなくて英語で彼を罵倒した。その中の一人が崇史の手を思いつきりひっぱたいて、簡単にナイフを落とし、カー杯頬をなぐった。崇史は床に倒れこんだ。信じられない光景だった。何が為に僕は殴られなければならないのか。

「これは正当防衛だよ」皆がまた狂喜しけらけらと大きな音を立て笑った。

明らかに彼は殴る事を楽しみ、他の者は観戦するのを喜んでいた。先程部屋の奥にいた日本人が何かジョークを言いながら軽やかに走って来た。彼は呆然としている崇史の襟を掴んで中腰にさせ平手で顔を殴った。またもや全員が歓喜した。その男はくねくねと腰を揺らしながらパンツを足首までずらして彼の太く長いペニスを崇史の顔に擦り付けた。ぞつとする悪臭を放っていた。もうだれも笑いを止められない程に観衆は盛り上がった。彼の次にはがっしりとした体格の男が再び彼を掴もうとした。が、崇史は本能的に逃げた。だが、難なくその男は手を掴み、足で崇史の足を蹴った。それはすさまじい激痛であった。再び床に倒れ込んだ崇史は恐怖で顔を上げた。その男はボクサーのように腕をかまえ挑発し彼が起き上がるのを待っていた。その顔は明らかに笑っていた。崇史は開け放しの扉に向かって無我夢中で走り出した。ただひたすら逃げた。『このままでは殺される』彼はそう思った。

アパートからは誰も追ってはこなかった。だが、ウィリアムの部屋からは馬鹿にしたような笑い声が聞こえた。崇史は泣いていた。悔しさと情けなさ、そして、恐怖が彼をそうさせた。彼らは完全に狂っている。これこそがウィリアムが見たかった劇作なのか。僕は彼に裏切られた。最後の最後まで冷静沈着に物事を考えられなかった。その結果がこれだ。ウィリアムが創作したストーリーのクライマックス、まさに今のこの場面この感情こそがそれだ。全くに彼らを理解できない。自分にはそういった事がまるで分からない。全く共有できる部分などない。僕はそんな狂気のウィリアムを運命の人物だと思っていたのだ。まったく直感なるものはあてにできない。あゝ全く、全く！！！崇史は自分の馬鹿さ加減に吐き下がした。

最初から悲劇の結末になるであろうことは想定内であった。だが、それは美しい恋愛として人生の悲しくはあるが華やかな思い出し

て記憶されるはずであった。決して、彼と一緒になるなどそこまですうずうしい事は期待していなかった。もちろん、もしうまく恋の行方が進むのであればそれはそれで運命に身をまかせたであろう。だが、この結末は何だろう。

こんなことは起こっても良いのだろうか。まるで信じられなかった。今あそこにいたのは本当にウイリアムだったのか。彼はあんな鬼のような顔をしていただろうか。そして、あの場にいた日本人は誰？彼は何の権利があつて僕を殴ったのか。なぜかその日本人に対する怒りは他の人に対する怒りよりも激しかった。だが、今の彼には恨みより恐怖が勝っていた。何とか安全な場所に避難しなければ。それにしても。なんと大きな価値観の違いであろうか。彼らの狂喜びみた笑いを思いだすと身震いした。走るスピードを緩めて後ろを振り返った。誰も追っ手は来ていない。

僕には人を殴って痛めつけて楽しむ事はできない。そんな人物が本当にいるなんて思いもしなかった。

日が暮れた暗闇の中を彼は涙を拭きながら懸命に走った。そして、メインストリートまで後少しという所で車が急停車した。崇史はびつくりして車内を見た。そのぼろぼろの車に乗っている人達が一瞬ウイリアムと彼の悪友のように見えたが、別人であった。崇史の知らない彼らはまた車を急発進させた。

やっとのことでメインストリートに出たがまだ冷静にはなれなかった。もしあの車の人物がウイリアムだったら。そう考えると恐怖で顔が引き攣りどつと冷や汗が出た。だがもう安心であろう。今、自分がどこを歩いているかは皆目検討がつかなかったが、かなり人通りが多い。彼はほっと安心して走るのを止めた。

崇史はすぐ側にあるハンバーガー店に入った。聞いた事のない店名だ。きつと個人経営なのだろう。人の良さそうな店員を見て彼は助けを求めるとどうか迷った。だがそうはしなかった。どう説明して良いか分からなかったし、警察に説明してややこしい煩雑な手続きを考えると何もできなかった。ここロンドンには彼にとって外国なのだ。

彼はメニューを注文した後トイレに入った。彼はやっと落ち着く事ができたように思ったがまだ彼の手は震えていた。そして堰を切ったように大粒の涙が溢れた。人生の中で初めて流す恐怖による涙だ。彼は身なりを整えるため鏡を見ると口からは血が出ていた。血を見ると急に痛みを感じた。崇史は血と汗を拭き取り、だらしなくはみ出ている服装を整えた。そして、もう一度鏡を見て無理に笑顔を作った。「さあ、頑張ろう」そう呟いたもののまだ涙が止まらなかった。

席に戻るとテーブルの上にはすでにチキンバーガーとペプシコーラが置いてあった。店員がこちらを向いて頷いている。彼は落ち着こうと努力しながら、ゆっくりと彼には少し大きすぎるハンバーガーを食べた。

店の外に出た。かなり遅い時刻なのにまだ通りには大勢の人が歩いている。先程は気が付かなかったが歩行者のほとんどが黒人がアラブ人だ。それに、道路にはゴミが無数に散らばっている。ケバブを売っている店、アフリカン新聞、カリビアン新聞、それに見た事のない果物や、野菜。ここは本当にロンドンなのか。今、僕はいたいどこにいるのだろう。自分の頭がおかしくなったのか、それとも、先程の出来事は幻で僕はアフリカにでもいるのだろうか。彼の頭はくらくらし、混乱していた。様々な感情、それは恐怖心であり、

人間不信であり、絶望であり、或は、今起きた事そのものを忘れ去るうという心の動きであったり、またはそれとは全く反対に何度も残酷なシーンが繰り返し返り流れたりして、彼の意思は停止し、心（彼の頭）が独立して勝手に動いているかのようであった。

崇史はなんとか気持ちを落ち着かせて、バス停の地図を確認すると今、彼はエレファントキャッスルよりさらに南に南にいたことが分かった。バス停の地図は落書きされ、公衆電話は破壊されていた。何台ものバスが通りすぎる中、何も良い案がでないままぼんやりと物思いに沈んでいた。時折自分があまりに惨めに感じて涙が頬を濡らした。それにしても、彼は今の自分が置かれている状況が信じられなかった。今までに見たどの悪夢よりも恐ろしく、暗く、寂しかった。夢の中で幾度となく経験したなんとも表現し難い氷のように冷たいぞつとするような感情の流れ、そして、それ以上のものを今、彼は現実の世界で経験しているのだ。彼はこれからいったいどうしたら良いのかまるで分からなかったし、正常に思考が働かなかった。それに、もう何もする気が起きなかった。

ただじつとバス停のベンチに座っているとやさしそうなアフリカの男女が崇史の身体を摩って慰めてくれた。彼らは彼らのバックグラウンドで崇史の涙の原因なるものを想像していた。いかにロンドンに住むのが大変か彼らは知っていた。一人は失業中で国には家族を残しているそうだ。もう一人は仕事の掛け持ちで毎日十四時間も働いているという。

「ママに会いたいかい？」

きつと、彼女は崇史を少年だと思っているのだろう。崇史は彼女のやさしい大きな顔の笑顔を見るとまた涙がでてきた。

「ここらは、夜は危ないから気をつけなさい」

崇史はバスに乗り込んで彼らと別れた。

バスはセントラルを通り過ぎそのまま北へ北へと進んでいった。何もしたくなかった。動けなかった。今フラットに戻ったところでどうなるというのだ。バスの中で彼の今までの人生の中の悲しく暗い場面だけが次々に蘇っていた。結局は一緒だ。ロンドンに来て何も変わらなかった。不幸な運命を背負っている人はどうにもこうにもそれを変えられないのだ。そうに違いない。彼は窓の外に見える楽しそうにはしゃいでいる若者のグループを羨ましそうに眺めた。僕と彼らは何かが決定的に違う。どんなに頑張ったところで僕は決して彼らにはなれない。その証拠に僕は今まで思いつく事は何でもした。でも、何もうまくはいかなかった。

崇史はバスを降りただひたすら歩いた。住宅街を通り過ぎハムステッドヒースの暗がり歩き続けた。彼は自暴自棄になっていた。彼は歩きながら無数の男性の視線に気が付いていた。その中の幾人もの男が彼を追って歩いた。まるで獲物に飢えたオオカミのように彼は突然歩みを止めて藪の中に入って行った。すぐ側で激しく性行為をしている男性が目に入った。『さあ、僕を愛して』崇史は心の中で叫んだ。

崇史を追ってきた男達が彼を取り囲み、手首や足を触って舐め始めた。ある男は大胆にも彼の唇を貪るように吸い付いた。先程までセックスをしていた二人も今や観覧者となっていた。コートや服が次々に脱がされていった。男達の股からは何本も勃起したペニスが突き出ている。彼は目を閉じた。恐怖も、快樂も何も感じなかった。

だが崇史は満足だった。

『さあ見るがよい、これこそが人間の本性なのだ』彼はされるがままになっていた。

崇史は地面に倒され、悪臭を放つ野人が彼の上にかぶさるように立った。歓喜する男達、野獣達。彼らは興奮のあまり呼吸が乱れていた。ぺろぺろと顔を舐められているのが分かる。彼らそれぞれの口臭が鼻につく。

『さあご覧！！！これが人間の男の本来の姿なのです』

『僕は今穢されている。僕は何の価値もない人間なのです』

『貴方達はきつと僕を捨てるであろう。さあさあ、好きなようにするがいい！！！！』

複数の観覧者達が勃起したペニスをごしごしとこすっている音が聞こえる。彼らはお互いに他人同士であり、少しも会話をかわすことはなかった。だが、彼らは一つのクライマックスに向かって一体となっているかのようにであった。そもそも、果たしてこの原始的な？前人类的？動物的な行為に言葉は必要であろうか。言語以外の様々な人間が作り出す音、それは喘ぎ声、しごく音、舐める音、叩く音であり、それらが更に彼らを興奮状態にさせていった。

『ウイリアムは何も特別な悪人ではないのだ。周りの男達を見よ、皆、善人の顔の下に悪人の本性があるのだから』

むっとする精子が彼の顔にべっとりと飛び散った。方々から人類の最も下等な罵声やのしりが崇史に向かって叫ばれている。また

別人の精子が降り掛かったのを感じた。

『あゝこのまま僕は殺されるかもしれない。なんと滑稽な姿だろう』『でも、これこそが人間の本来の姿』本能なのですよ。ちつとも人間は変わっていない。それで僕は満足です』

その時、ある男が崇史をもの凄い力で引っ張りあげ立たせた。手はしっかりと握られ、そのまま、全裸のまま彼はヒースの中を強引に連行されていった。その男は怒鳴り声を上げて追って来る男達を追い払った。彼らはぶつぶつ不平を言いながらもあっけなく四方へ散り、また別の男を物色し始めた。あまりにも簡単に崇史は諦められ、誰一人追ってくる人はいなかった。彼らの罵声はまだ耳に残る一方で、あまりにあっけなく次の獲物を探し始める男達に彼は心の深淵から空しく感じた。『誰彼に対しても僕は存在に値しないのでしょうか』それにしてもいったい彼は何者だろう？警察なの？崇史の目には涙が滲んでいた。彼は藪の中を裸で歩いている自分の姿を第三者的に眺めていた。これから自分はとうされるのだろうか。何かぞっとするような光景ではないか。切り裂きジャックに殺害された売春婦達のように自分はこの後ずたずたに切り裂かれるのかもしれない。だが彼を握るその手の暖かい感触は崇史を落ち着かせた。その男はまだ何も話さない。彼の顔すらも見えない。

男は駐車場に着くと彼を車に乗せた。

「さあ、服を着なさい」

それはやさしく暖かい口調であった。崇史は気が付かなかったがその男の手には先程脱がされた服や下着、靴があった。男は全く動こうとしない崇史に服を着せた。

「君は何をやっているんだい、もつと自分を大切にしないと。全くどうにかしているよ」

気のせいとその声は涙声であった。その後、彼らは何も会話をする事なく無言のまま車に座っていた。運転中、男はぶつぶつと何かに腹を立てているようであった。セントラルのバス停につくと崇史は車を下ろされた。男の顔はとても心配そうであった。

「ここからは君一人で帰れるかい。なんなら君の家まで送って行くのか？」

崇史は恥ずかしさと情けなさで彼の顔を直視できなかった。ただ無言で首を横にふった。そして、何だかまた涙が溢れて出てきた。今日一日でどれだけ泣いただろうか。崇史の涙を見て心配になったその男は車を降りてバスが来るまで待つと言い張った。そこからフラットまでどのようにして帰ったのか崇史は記憶していない。完全に頭の中からその部分の記憶が欠落していた。

何年かぶりに我が家に帰ったかのようであった。なつかしい家のぬくもりが彼を包み込んだ。このフラットにいる限り自分が守られているように思った。台所のテーブルにはルーカスが書いたメモと崇史の分の夕食が用意されていた。

崇史はルーカスのやさしさに涙しながらそれを食べた。今の涙は今日ずっと流し続けた涙とは別種類の涙であった。彼は今日起こった悲劇と自分が演じたドラマを思い出し、その後、目の前の夕食とメッセージを見た。彼は大きく溜息をつき彼のすぐ身近にある愛、すなわち友情であったり、家族愛であったり、平凡な日々であったりそういったものに満足できていなかった自分を恥じた。彼は今、この平和に感謝して懺悔した。だが、その数秒後にはどうにもこう

にもならない自分を不幸に思い、ずっと思い描いてきたラブストーリー、いやいや誰もが普通に暮らしている幸せな日々すらが永久にやって来ないことに不満を感じた。

『だめだ、だめだ、世の中を見てなさい。どれだけ僕は幸せか』

彼は何とか自分を納得させ、うなだれて寝室に入った。ルーカスはもう眠っている。崇史は彼の寝顔を見て彼に今の自分を慰めて欲しいと思った。崇史はゆっくりと顔を近づけ、じつと彼の顔を見た。キスしたい。『もし今、彼が僕を抱きしめてくれるのなら僕はもう何も望みません』そう心の中で呟いた。崇史の顔はルーカスの顔の真上にあつた。ルーカスの唇がほんの少しで触れるところで思いとどまった。今の崇史の息づかいが荒々しかった。彼のような人物が僕の恋人であつたなら。崇史はその思いを追いやった。なぜならその思いはせつかくのルーカスの純粋なやさしい思いを穢すように感じたからだ。ベッドに入りながらルーカスの素朴でありながらやさしさのいっぱい籠ったメッセージを反芻しながら眠りに落ちていった。

その時、ルーカスはまだ眠っていなかった。彼は彼で悩める事があつたのだ。彼は崇史の涙に不安になりながらも、そして、彼の吐息を頬に感じながらもどうしてやる事もできなかつた。ただ、崇史をあまりにかわいそうに思った。

次の日ルーカスは何も気付かない振りをした。今まで通りの仲の良い関係が続けるにはお互い真実を知らないのが一番だ。今後、気まずい雰囲気を作らない為に、崇史自身の口から話されるまでは彼の秘密を守ることを誓った。

崇史は正午すぎになってやっと目を覚ました。フラットには誰も

いなかった。彼の心の中は悲しさと恐怖と寂しさが入り交じっていた。彼は日本が懐かしく無性に母親の声が聞きたくなかった。彼は机の中にずっと使わずに置かれていたテレフォンカードを掴んで公衆電話に走った。日本に電話するのは何ヶ月ぶりだろうか。彼の心は浮き足たった。

僕はなんて親不孝者だろう。彼には今自分を元気づけられるのは母親しかいないように思った。早く話をしたい。母の声が聞きたい。

だが、誰もなかなか電話に出ない。もしかして、留守なのかも。彼は少しがっかりしたが、気を取り直して再度ダイヤルした。誰も出ないので、諦めて受話器を置こうとした時、父親の声が出た。電話が鳴ってもなかなか受話器を取らない彼の怠惰な習慣を思い出して、吐き下がした。

「おまえか・・・」

長々と続く父の小言に対して無言で電話を切った。彼は何も分かっていない。日本を出たそもその原因の一つは彼なのに。数ヶ月ぶりの会話だというのに。彼の日本に対する懐かしい気持ちは粉々に砕け、日本にはまだまだ帰れないと思った。

第8章

克也はたびたびトニーから崇史とウイリアムの関係についての報告を受けていた。その内容は大いに彼を喜ばせた。なぜならウイリアムは決して崇史に恋をしていたわけではなく、ただ彼を弄んでいただけだからだ。そして、崇史はウイリアムと夜の関係を持った。それもたった一度だけの関係である。それによって、崇史の純粹で清潔なイメージは完全に消え去ってしまった。あいつもただの男だったんだ。今や克也が彼に嫉妬する気持ちなど少しもなかった。それどころか、タカシを哀れんだ。克也は知っていた、今、タカシが精神的にとて苦しい状態にあるという事を。そして、そんな彼の精神状態を思い浮かべると、哀れむ気持ちとは裏腹に、無性に心地よく感じた。そんな、自分に驚き彼は急いで今感じた気持ちを打ち消した。タカシは俺の友人なのに、そんな風に思うのはやめよう？ いや彼は果たして俺の友人であつたらうか？ 克也はもう一つの出来事、すなわち、崇史がハムステッドヒースで行った醜態の噂を思い出した。克也は最初、そんな事はあるまいと受け付けなかった。それはあまりにも彼のイメージとかけ離れていたからだ。だが、もしその話が事実だとするならば、彼の頭がいかれてしまったに違いない。克也はいじわるく目を細めた。俺と崇史の友人関係を早急に解消しなければ。なぜなら、彼に対して自分がかんり好意的な関係を保っていたのは周知の事実だからだ。克也が最も気にしているのは他人にどう見られているかである。彼は極端にイメージを重視した。せつかくここまで築き上げた今の自分の地位を壊すわけにはいかないのだ。どのみちそもそもあいつは一度も俺の友人であつたためしがない。俺はずっとあいつが嫌いだったんだから。そう考えると克也の表情は考え込む深刻なものから急に晴れ晴れとした表情になった。そうだ俺はずっとあいつを許せなかつたんだ。今こそ、俺の本当の気持ちを皆に伝えなければ。

崇史は今朝もまた目を覚ましてしまったことにうんざりしながら、
気だるく重たく感じる体を強引に起こしてなんとかベッドの上に正
座した。今日もまた長い一日が始まり、ただ仕事をし、勉強するだ
けのつまらない時を過ごすのだ。いったい僕は何をする為に生きて
いるのだろうか。それとも、自分の存在意義があるのだろうか。これ
まで、なんとか頑張つて生きてはきたけれど、本当に自分はこれか
ら先も生きていかなければならないのか。もしそうしなければなら
ないのなら、神様は僕にほんの少しでも、生きる幸せをくださらな
ければ、もう正直無理である。彼はぎりぎりの精神状態でそう思っ
た。『何とかして下さい』崇史は見えない神様に向かってすがるよ
うな口調で抗議した。もう神様に哀願するのは嫌だった。なぜなら
今までいっただい何度神様に涙を流しながらお願いをしただろうか。
何度神社にお詣りしたのであるか。その結果がこれですもの。もう
彼は神を恐れなかった。どうせこれ以上悪くなりようがないので
すから。最後に「もういいです。もういいです」と溜息をつきながら
涙声でそう言つて立ち上がった。

崇史はそれまでとはまるで別人のようであった。以前の明るさは
消え、ただ生きていくだけといった感じであった。何の活力も無く、
魂の抜け殻のようであった。あれ程強く憧れて何とか手に入れた今
の仕事も、つまらなくやりがいの無い仕事に思えた。それは体に染
み付いた習慣だから、そして、やらなければどうしようも暮らして
いけないからするのであって、彼にとってそれは何の意味も持たな
いように思えた。仕事も勉強もそもそも生活の為、将来の為にする
のであって、その目的や夢がない、すなわち生きる事に希望がなく、
展望もなくなった今では、それらの価値、意味がなくなるように思
うのは当然であると彼は思った。この世の中は自分の意思に沿つて
いなくても生きていかなければならないように作られているのであ
る。崇史はまさに自分の意志ではない何か漠然としたものによって

生かされているのである。

崇史にとってその漠然としたものの一つであるフラットメイトや同僚達、そして英語塾のクラスメイトは鬱陶しい存在にしか見えなかった。ただじつとしていた今この精神状態に無理に頭を働かし、話をし、答えなければならぬのは苦痛であった。それに、彼らは何やかやと気を遣う。本当に自分の事を心配しているのかどうかは別として。よって崇史は仕事を欠勤することすらできないのである。仕事を休むと細々と質問されるに決まっている。それに、急に休むにしろ会社に連絡をとらなければならぬ。それならば出社するほうが楽である。無断欠勤？そんなものは後々、もつと面倒になる。嘘もつかないといけなくなるし、そんな小細工をする程には今の彼の頭は働かなかった。

それにしても崇史は幸せな人々の生き生きとしたテンポにはとてもついていけないと思った。なぜなら崇史のリズムと彼以外の人々とのリズムはあまりにも大きく違っていたからである。そうは言っても、個室を持たない彼は必ず毎日ルームメイトのルーカスと顔を合わせなければならない。初めのうち、ルーカスは彼の異変には気が付かなかった。だが、今では崇史が大きく変わった事は誰の目にも明らかであった。

ルーカスは心配して、今まで以上にあれやこれやと気遣い、崇史と関わる時間を増やした。だが、そのことは崇史にとって却って迷惑であることが、彼の感情の伴わない微笑、そして、時折見せる鬱陶しそうな表情によって確かなものになり、ルーカスは彼をしばらくの間そつとしておくことにした。

そして、もう一つ、崇史は必要以上に用心深くなった。これまではロククされる事がなかった部屋も出入りするたびにしっかりと鍵

がかけられ、夜道や人通りの少ない道を歩くのを避けた。人々で溢れかえっている大通りですら、時々後ろを振り返っては、あの晩自分に暴力をふるった男達がいけない事を確認してほっと安心するといった具合であつた。彼は随分臆病な男に変わってしまった。

このような状況に崇史自身疲れきつていた。あまりに単調な生活と恐怖や怯え、それに考え込むことによるストレスは精神的、或は肉体的に彼を蝕んでいった。あの晩の出来事がふつと頭を過つただけで、吐き下がした。それは崇史にとって人生の汚点であつた。絶対にあつてはならない事件であつた。彼の許容できる範囲を遙かに超えていた。そもそも彼らの思考そのものが理解できなかった。全く崇史の思考と混じり合うことがない低俗な思考によつて彼そのものが穢され、汚染されたのである。

崇史は己を純粹で気高いものであると信じていた。たとえどのようなことがあつても人に暴力をふるつたり、罵倒する事はなかつた。それがどうであろう、彼が想像した最も下等な行為を遙かに超えたあり得ない精神、行為を彼は知ってしまったのである。そして、それを実行する人々が決して限られた人物だけではない事を。

「あゝ全く、全く」崇史は叫びながら今日もまた、湯船に浸かつて何度も体をこすつた。どんなに体を洗つても、歯を磨いても、多量の洗剤を使つても、ウイリアムによつて汚された体は元に戻らないように思つた。そして、いつ何時もウイリアムが自分の体に宿っているような気持ちがあつた。崇史はウイリアムと過ごした全てを克明に記憶し、また彼の頭から離れなかつた。ウイリアムが自分の体と重なり合つた時に感じた重さ、その重さが彼のだるい体を一層重く感じさせ、彼の唇にはいつもウイリアムの卑しい唇の感触が、そして、鼻のまわりには彼の臭い口臭が染み付いて取れなかつた。僅か十日程前にはそれらを、感動をもつて愛の証として、何度も繰り返

返し思い出に浸っていたというのに、今は全く違った感情を伴っていた。

崇史は破壊され尽くし混乱した精神状態からなんとか脱しようと、今晚、誰とも会いたくないという気持ちに逆らって、参加を断っていた克也の誕生日会に出席する事にした。今朝彼は克也から七度目の誘いの電話を受け、明確な返答は避けたものの体調が良くなれば参加するかもしれないと返事した。崇史は七回も自分を誘ってくれる克也のやさしい気持ちに感動するとともに、そのしつこさを鬱陶しくも感じた。『どうして、彼は僕をそつとしてくれないのか。放っておいてくれよ』そうは言ってもこのまま誰とも関わらずずっと引きこもっていることもできない。それに、この機会を逃したらますます元の世界に復帰しなくなるようにも思った。崇史の本当の気持ちはもうどうでもいいという悲観的な感情であったが、彼にまだ残る論理的、建設的思考は何とか自分をまたしつかりとした生活に引き戻そうとしていた。崇史は総合的に判断した結果何が何でも今晚はセントラルロンドンに出なければと自分に言い聞かせた。

久方ぶりのウエストエンドは刺激的であった。崇史は初めてロンドンにやって来た時の衝撃的な気持ちを思い出した。あの時は何もかもが真新しく新鮮で驚きの連続であった。その若さに満ちた清新的な気持ちを懐かしく思い、いくらか今の憂鬱な気分が晴れるかのようであった。そして、できることならば、もう一度あの頃の純粋な自分に戻って人生をやり直したいと思った。

会場のタイ料理レストラン「アジアンパラダイス」には克也達以外にもたくさんのお客が来ていた。ここはイギリス人とタイ人カップルが経営しているモダンな雰囲気洒落たレストランで、いつも混雑していた。

崇史は予定時刻より三十分後に到着した。会場に入るなり彼はまず一望し、ここが安全な場所、すなわちあの晩あのアパートの一室にいた奴らがいなことを確認した。彼にはどうしてもあの屈辱的な時間を頭から消し去る事ができず、いつも絶えず彼に付きまっていた。時々崇史は思った。どうして被害を被った自分がいつまでも怯え悩まなければならぬのかと。加害者は？もしかするとこの事件を忘れている、或は反省していないどころか彼らはそのシーン、自分が受けた屈辱的な姿を回想しては笑いや者になっているのかもしれない。同じ状況に対してこんなにも受け止め方が違うなんて！！どうして、彼らには他人の気持ちを理解し共有することができないのだろうか。

そんな事を考えたところで何の解決にもならない事は分かっている。彼らは自分とは全く別種類の人間なのだから。もしかして、彼らには人間の心がそもそも欠落しているのかもしれない。いやいや、そんな事は絶対ない、だってウイリアムにもやさしかった瞬間が確かにあったではないか。

崇史は今にも泣き出しそうであった。矛盾しているように思うかもしれないが、彼の心の中にはまだウイリアムとの甘い時間の記憶があった。それはほんの短いかりそめの時間（瞬間）でしかなかったけれども。あの時、崇史は彼に完全に陶醉していた。好きで、好きでたまらなかった。彼を思い浮かべるだけで幸せにもなり、苦しくもなった。それに、どれだけ彼に会いたかったことか。崇史は今またあの時自分が感じた恋を思い出しぞくぞくした。彼にとってそれが初めての恋愛であった。それは最高の思い出でなければならなかったのに。だが、ウイリアムは悪魔だった。彼は自分が思い描いていた人物とはまるで別人であった。

そして、自分があまりにウイリアムを愛しすぎた為に彼の異常さ

に盲目であり、その為に受けた数々の屈辱の思い出が一気に彼を襲った。僕には決して幸せは来ない。来るはずもない。崇史の顔に一筋の涙かこぼれ、そして、今にも発狂しそうであった。屈辱、恥辱、劣等感あらゆるマイナスの感情が彼を襲った。

「すいません」その言葉で崇史は我に返った。彼はずっと扉の取手を持ちながら、じっと立たずんでいたのだ。崇史はレストランの中へ入りながらこう思った。今のこの境遇を共有できる、相談できる誰か（親友）がいたら随分と心が楽になるのにと。

克也は崇史を見ると、席を立ち全身で喜びを表すかのように抱きついた。そして、頬にキスをした。続いて彼の友人達が順番にキスをした。その中には克也の新しい友人なのであるう、まだ見た事のない人物もいた。崇史はじつと我慢をして彼らのキスを受けた。今の彼は誰とでも肉体の接触は避けたかった。肌や体の一部が触れるのが不潔な印象を受けるのである。

崇史は周りにいる者を一人一人注意深く凝視し、詮索した。自分を軽蔑の目で見ている者はいないかどうかを。この中の誰か一人でもあの夜起きた事件について知っている者がいるのは耐えられなかった。この事は彼にとっては誰にも知られたくない恥ずかしい事件であった。克也は崇史の隣の席に座り、まるで彼を守っているかのように（崇史にはそのように見えた）、会話の間中ずっと克也の汗ばんだ手が崇史の手を強く握っていた。彼の不自然な表情は少し無理にやさしさを装っているようにも見えた。それに、こんなにもずっと手を握られるのは初めてだ。きつと克也は全て聞いて知っているのであるう。そう思うと今にでも席を立てて退出したかった。だが、崇史はいつもと何の変わりもない風を無理に演じて全く興味の無い話に耳を傾けていた。

崇史は会場のあちらこちらで話されるゴシップにうんざりしていた。人を噂するなんて何が楽しいのだろう。少しでも噂される側の立場に立って考えてみればできないはずだ。もう、今にでも会場を後にしたい。『誰にも人を馬鹿にする権利などないのだよ』と叫びたかった。わずか一ヶ月前の崇史は積極的にゴシップに耳を傾け、自らもそれに参加していたというのに。でも、今の彼には全ての噂話なるものが自分を対象になされているかのように感じてしまい、嫌悪感を抱いた。

あまりにつまらなかつたので席を立とうとすると、ある男性がとっておきの秘密を話すかのように小声で、「そうそう、また新しい男子がウイリアムに騙されたんだってさ。馬鹿な奴もいるもんだね」

ウイリアムと聞こえて崇史の体は一瞬ビクツと震えた。克也はその馬鹿な男子が崇史であるのを知っているかのように、彼の顔も一瞬引き攣ったかのように見えた。

また別の者が「ってことは、彼も病気に感染しているかもね。悲劇だよ」と言い、その目は意地悪く光っていた。

自分の目の前で自分についておもしろおかしく話されている。しかも、そのテーマは自分にとっては深刻な内容ではあるのにもかかわらず軽々しく話されている。崇史は強く不快に感じ、これ以上この話を聞いているのが耐えられなかった。だが、彼は動けなかった。なぜなら、この話の続き、いったい病気は何であるのかを聞かないわけにはいかなかった。だが、彼をじらすかのように話は中断され、ゴシップの内容は別の話題に移ろうとしていた。

崇史は慌てて「病气って何の病気なの」と平静を装いつつ尋ねた。

「彼の事知らないの、エイズだよ。彼に騙された奴は多いんだよ。タカシは気を付けるんだよ」と意味ありげに崇史を見つめた。

崇史は彼らのいやらしい凝視には気が付かず悪寒が全身を走った。まるで死刑の宣告を受けたかのような瞬間であった。彼はこの病気に対してはあまりに無知であり、それにより恐怖は増幅されるのであった。この時から崇史は何か心の中にぼっかりと穴が空いたような、自分の足が地についていないような状態であった。

ウィリアムに騙され、何とか彼らの暴力から逃げ、そして、ドアをロックし懸命に身を守っているというのに、自分の体の中に敵が潜んでいるなんて。わずか一人の人間ウィリアムがこうまでも人を傷つけられるなんて、なんとも恐ろしい。崇史は邪悪なエネルギーの凄い強さを嫌という程に感じた。これから先、ウィリアムは何もしなくても崇史を恐怖に落とし続け、不安にさせられる。そして、彼は四六時中ウィリアムを忘れないであろう。ウィリアムの試みは完全に成功したのだ。

崇史はそつとタイレストランを後にした。自分が店を出ることによって、ますます不審がられるだとか、その後、自分のゴシップに火がつくだとかそんなことはどうでも良かったし、落胆しきった今の彼にはその事については何も考えが及ばなかった。

崇史は人通りが少ない所まで歩いて、地面に座り頭を抱え込んだ。とにかく、今は冷静にならなければならない。何度も「落ち着け、落ち着け」と呪文のように唱えた。

崇史は彼との性交をもう一度些細な事まで見逃さないように思い出した。彼の僅かばかりのHIVに対する知識でいろいろと考えはみたが、それはさらに彼を不安にさせた。なぜに、あの時の自分は

ウィリアムを信じゴムを使わなかったのか。それにしてもいろいろ要素があつたのにどうして彼を疑わなかったのだらう。痛みでたくさん血がでたことも思い出した。その上、ウィリアムは肛門内で射精をした。崇史は自分の馬鹿さかげんにうんざりとして溜息をついた。自分だけはこういつた不埒な事は起きないと思っていたのに。

克也と彼の友人達は崇史がレストランから出て行く姿を薄笑いを浮かべながら目で追っていた。誰一人彼を引き止めようとしなかった。そして、彼らはひそひそ声で「やっぱり噂は本当だったんだ」と言いやった。その後、彼らはおのおのが持っている崇史とウィリアムに関する情報を交換し合った。彼らは崇史が置かれている精神状態を理解しなかった。今彼がとてもつらい状態であることは誰にでも容易に想像できるのである。それどころか彼らは彼の悲劇を楽しんでいるかのようにすら見えた。その原因は？崇史が彼らの仲間ではないからか？友人でないがうえに彼の痛みは自分の痛みとして処理されるのではなく、他人事として受け止められるのであるか？克也はどうか？彼は少なくとも崇史との関係はより密であったはずである。だが、克也は他のメンバーと違ってより残酷に彼を憎んだ。それはまるで彼への復讐かのようですらあつた。

彼らが崇史を馬鹿にしたり、軽蔑したりして一通り楽しんだのはわずか数分のことである。もうすぐその後には彼らの念頭から崇史はすっかり消え失せ、次の話題へと進んでいった。そして、もう誰も彼に興味を示す者はいなかった。ただ、克也の心の中に後ろめたい気持ちが存在していたのも事実である。今晚、このパーティーに彼を誘つたのは自分である、またそのような会話にへ誘導したのも自分である。ただ、自分の立場を守るには仕方がなかったんだと克也は自分自身に言い訳をした。そして、それ以上に克也は崇史を快く思っていなかったのだからこうなるのはどうにも仕方がないのかもしれない。

崇史はその後、そのままフラットには戻らず、インターネットカフェに行った。そこで彼は何時間もHIVやその他の性感染症について調べていた。調べれば調べるほどそこに書かれている症状が自分にあてはまるような気がして、自分が感染者であることの可能性が高まっていくような気がした。

あまりにもインターネット上にたくさん氾濫しているウェブサイトを、その一つ一つは巧みに不安を煽り、閲覧者を恐怖に陥れるかのようであった。実際、そこに書かれている内容が本当に確かな情報かどうか怪しいものも数多くあった。その上、中には見ている者を不安にさせるのを楽しんでいるかのような文章すらあった。だが、恐怖心は崇史をその掲示板から目を離せなくした。

あのSEXが最初で最後のエッチになるなんて。初めての性交は甘い素晴らしい青春の思い出になるはずであった。それがどうだろう、そのシーンを思い出す度に苦痛と恥辱が伴うなんて。

崇史にとってこの病気は漠然としていて遠い存在であった。それが今急に自分の目の前に来たからといってしつくりこない、というよりもただそれは恐ろしい存在でしかなかった。

もし、感染していたら僕はどうなるのだろうか。ずっと以前、崇史は誓ったことがあった。たとえ友人がこの病気に感染しようとも決して僕は彼を見捨てはしない、永遠に親友であることを。少なくとも僕だけは彼を見守り続けるであろうと。だが、今、自分自身が感染者になった場合、友達は僕を見放しはしないだろうか。それに現実的な問題、今後の莫大な医療費についても考えさせられる。

あるアフリカの国は国民の半数がHIVに感染しているという。

その多くの国民は高い薬が買えず死ぬのを待っている状態だそうだ。母子感染している子供達も多いらしい。それに、痩せこけて骸骨のような身体の映像。今までにもニューズでそれらの深刻な事態は知っていた。だがそれは自分とは関係ない事であり、遠い世界の事であった。そういったニューズを聞いても別段特に強い注意を払わなかった。それに、どうして彼らは感染が拡大している事実から学ばないのか疑問にすら思った。或は、事態が一向に改善されない事に彼らの無知を悲嘆していた。すなわち、なぜ感染者が未だに増え続けているのか理解できなかった。だがどうだろう、今彼は確信したのである、この病気は誰もがかかる可能性のある病気、こんなにも簡単にどこにでもきっかけが転がっているという事を。

崇史はどんよりと重苦しい気持ちになった。とても両親には言えない。もし、感染していたらいつそチベットにあるような荒涼とした誰もいない土地に横たわって死のう。彼はそこで誰にも気付かれる事なく孤独に痩せこけて息絶えていく自分の姿を想像した。そして、ミイラ化していく屍を。もしかして力尽き果てていく自分を禿鷹が狙っているかもしれない。なんだか、悲しくやるせない気持ちになった。この時、初めて誰にも関心を持たれず孤独に死を待つ人達の気持ちを知ったような気がした。

あの事件以来、崇史は力の暴力に恐れおどおどしていた。しかし、今は、それらは少しも怖くなかった。それどころか、そういつたことは念頭になくすっかり消え失せ、今彼の頭の中を占めるのはただ得体の知れない病気に対する恐怖のみとなった。

それでは彼は死を恐れているのであろうか？いや、実のところ、彼は死に対する恐怖は微塵もなかった。彼は死後に世界が続く事、それに、また現世に生まれ変わる輪廻転生を信じていた。だが、孤独と死の前にくる痛み、それに、痩せこけ骨と皮だけになった自分

の哀れな姿を想像すると落ち着く事ができなかった。そして、自分が持っているかもしれない病気に対する起こりうる差別や偏見を考えると暗い惨めな気持ちになるのであった。

だが、その日の後、日々HIVに関する知識が増すとともに、決してこの病気が特別なものではない事、それに、様々な薬が開発されていて、想像していたような骸骨のような体にはならない事、この病気＝死を意味するものではないことも分かってきた。ただ大多数の人、或は社会が自分を受け入れたと仮定しても、両親はどう思うであろうと考えると再び暗い気持ちになるのであった。

この全ての原因はウィリアムに行き着く。何度考えてもやはり彼が悪い、彼さえいなければ何も起こらなかった。そもそも、彼は自分で感染者と知りながらどうして安全な性交ではなく危険なセックスができたのか。それはあまりに自分本位で殺人に匹敵するのではないだろうか。

崇史は努めて冷静に考えるようにはしていたが、めらめらとウィリアムに対する殺意が沸き上がってくるのを感じた。どうしても彼を傷つけたい、殺したいという気持ちを抑えることができなかった。それは以前のような発作的な衝動ではない冷酷な殺意が彼に芽生えていた。崇史は自分がウィリアムの体を切り刻んでいるのを楽しんでいる姿、残酷な行為に恐怖し息絶えていくウィリアムの姿を想像している自分に気が付いた。崇史は自分がこのまま精神的におかしくなっていくかのようで恐ろしかった。でも、ウィリアムを殺しても自分の病気が良くなる訳ではない。ただ、この鬱積したいらいらした気分は晴れるかもしれないが、少なくとも彼を殺す事によって新たな被害者を救う事はできないか？彼のような類いの人々は、我々のような善なる心を持ち合わせている人々には、永遠に理解できないような交わることのできないような邪心を持っているのである。

完全なる神のような心を持った人は実際にはほとんど存在しないように、ウイリアムのような完全なる悪の心を持った人物も少ない。今の世間一般の道德観はその両者には適用できないのかもしれない。殺してはいけないのは九十九%の人物であってウイリアムのような人物を指すのではないように思った。

克也の誕生日パーティー以降、暗黒の世界が自分を待ち受けているような感覚が常に崇史の周りを覆っていた。それは、全く関係のないたわいのない話をしている時、例えば恋愛、或は政治の議論など、たとえそれが白熱した議論で、ほぼ完全に忘れているときでも突然現れてくるのであった。崇史は何もかもがまず陽性が陰性であるかを知らなければ始まらないような気がした。

崇史はこのところ毎日のようにカフェや公園に行き熱心に読書をしていた。今までに読んだお気に入りの本や、全く読んだことはないけれど何となく面白そうな本を。そうする事によって心を浄化し美しい気持ちになれるかのように感じた。今日もまたテムズ川沿いにあるカフェで読書をし、気に入ったフレーズがあればノートに書き留めていた。

それに窓辺から通行人を眺めているのは楽しかった。人間には実にたくさんさんの顔や表情がある。彼らのそれぞれの表情が自分にも感染し喜び、悲しみ、或は興奮の感情を共有できるような気がした。時折、見られているのを察知してか、こちらに振り向き、目を合わすこともあった。

崇史がノートに書き写した大好きな詩やフレーズを読んでいる時、たくさん空席があるのにもかかわらず、一人の男が自分の前の座席に座った。彼の第一印象は？ たった今読んでいた詩の影響か、彼す

なわちブラッドリーは美しく輝いて見えた。一瞬見とれてしまったはっとして我に返った。

「ここに座ってもいいかい？」ブラッドリーは親しげに質問した。

「もちろんだよ」と崇史もはにかんで答えた。

その男は輝くような笑顔で「ありがとう」と答えた。

崇史が再び日記に目をやり、気に入ったフレーズを整理している間も、ずっと彼は自分を観察しているようで彼の視線を感じた。崇史はそつと顔を上げるとまともにブラッドリーと目が合った。ブラッドリーはあどけない笑顔でそれに答えた。

崇史は少し落ち着かなく集中できなかった。それにどこかで彼を見かけたような気がするのは気のせいだろうか。崇史は再び顔を上げ今度はじつと彼をみつめた。彼は新聞を読んでいる最中であった。もしかしてずっと視線を感じていたのは自分の思い違いかもしれない。

崇史の視線に気が付いたのか彼は新聞から目を離し、顔を上げた。二人の視線は数秒間絡み合った。その間ブラッドリーは何かを期待するかのようににこにこしていた。

崇史はずっと目を離さなかった。失礼な程に、考え込むような目で彼を凝視した。もう少して謎が解けそうであった。崇史の脳裏に蓄積された膨大な数の記憶はハイスピードで情報を検索していた。その時、二つの映像と目の前にいる男の姿が一致した。「あ、」崇史は思わず叫んだ。

ブラッドリーは愉快そうにたにたと唇を緩め「やあ」と軽く挨拶をした。

「この間、ハムステッドで僕を救ってくれたのはあなたですね。もしかして随分前にもチャリングクロスバス停でも見かけませんでしたっけ？」

「その通り、バス停ではあっけなく振られたけれどね」

彼ら二人はなんだか可笑しくて声を上げて笑った。崇史の記憶の中にある二つのドラマ、それはぼんやりとしていたが、今、顔が曖昧な登場人物にブラッドリーの顔を与え、風景に色をつけ声を吹き込んだ。

最初の出会い、あの時、崇史はあまりにも幸せであった。そして二度目に再び彼に会った時、崇史は絶望と恐怖の中にいた。どちらの場合もまさに極端な感情の真ただ中であり、とても彼すなわちブラッドリーに注意を払える状態ではなかった。同一人物であるということも分からず、顔すらも憶えていなかった？いや、決してそうではなく、確かに彼は記憶の片隅でしっかりと生きていた。ただ、崇史の連続する感情の荒波、浮き沈みの中で、彼は崇史の心の中に現れることがなかったのである。

その後の二人の会話は弾んだ。ブラッドリーはずっと崇史が好きで何ヶ月も追い続けた事を率直に告白した。彼によると彼にとって崇史は一目見たときから運命の人物であると直感したそうである。そして、ブラッドリーはそのまま自分の直感を信じ続けたということだ。

崇史は彼の告白に驚かされた。消極的で受動的な自分と彼はまる

で正反対であった。もし、仮にウィリアムと出会う前に彼と出会えたならばどんなにか素晴らしかったであろうとも思った。

ブラッドリーはその後もずっと休み無く話し続けた。崇史はこんなにも話好きな男性を初めて見たように思った。それに、彼は本当に幸せそうに見える。こちらまで彼の浮き浮きしている気持ちが感染し心が軽やかになっていくかのようだ。崇史はブラッドリーがまるでプラスのエネルギーの塊で、目には見えない光で輝いているかのように見えた。

彼らは店を出て、そこから話をしながら、特にどこという目的地がある訳でもなく何十分も歩き続けた。

「あ、そうそうまだお互いの携帯番号を知らなかったね」ブラッドリーは突然立ち止まって崇史の番号を聞き電話をかけお互いに登録した。「これからどんどん電話し、メールを送るから。覚悟しておくように」と彼は大声で笑った。

セントジェームズパークに着いた彼らは芝生の上に寝転び、ブラッドリーはまたも機関銃のように話し続け、その間もずっと崇史を見つめていた。時折彼は崇史の体をやさしく摩った。ブラッドリーは興奮していたのか、それとも鈍感なのか崇史の暗い気持ちや時々出る溜息には気が付いていないようであった。

それに話はハムステッドでの晩の出来事にもおよんで、ブラッドリーは疑い深くじつと崇史の目を見つめ、事の真相を聞き出そうとした。崇史は一瞬、彼は何と無神経で、他人の気持ちを考えない人物なのだろうと思ったが、それはそれで他意の無いあけすけな彼の態度からくるのだろうと考え直した。だが、そうは言っても何と返事をしていいものか、それにとても一言で話せるものでもなく心の

整理もできていない状態なので何も答えないでいると、ブラッドリーまた大声で笑って、

「冗談さ、そんなこと別に答えなくてもいいさ」と崇史の頬にキスをした。

崇史は真つ暗な心情の自分の前に突如現れたブラッドリーに驚きもしたが、心から湧き出てくる笑いと明るい気持ちに気が付いた。このところずっと忘れていた生き生きとした感情がまた生まれ元気が出てくるかのようにあった。ブラッドリーの出現はこの後、崇史の暗く落ち込んだ生活を一変させることとなる。

崇史は帰りのバスの中でブラッドリーのやさしい微笑を何度も思い出し、自分の顔にも笑みが溢れ出るのを感じた。時計を見るとすでに夜中の二時をまわっていた。彼らは遅くまで語り合い、笑い声が最後まで絶えなかった。ブラッドリーと自分の波長は完全に一致していたように思った。なぜならこんなにも人と話をしていて楽しんだことがほとんどなかったからである。それに、少しも気を使っていない自分がいた。どうだろう、もう夜中の二時を過ぎたというのに少しも疲労を感じていない。それどころか、なんと心地良い気分か。久方ぶりに崇史の心と体に生気が蘇ったようだ。

李はその夜、ジェーンのフラット即ち崇史のフラットに向かった。李は今、人生最高の時期にいた。克也のグループの仲間になる事によって生まれて初めて、友人ができ、人間扱いされる事によって自信もできた。ただ、彼は崇史やジェーンのようなやさしさに飢えていた。克也達の誰にもそれを望めないことは分かっていた。それに、常に緊張を保たなければならぬ日々は、彼を疲れさせた。そして、李は少しも悪びれる事なく再び彼らのもとを訪れたのである。彼は崇史に対してした悪事を懺悔するのではなく、善人を演じる事によ

って接近しようとした。なぜなら、崇史は真実を知らない。それならば、あえて真実をさらけ出す必要はないのだ。

李は少しおどおどしながら、ドアのブザーを鳴らした。少しして、ジェーンが扉をあけた。「トニー、今日はどうしたの。なんだか随分久しぶりだね」彼女はなぜだか少し嬉しかった。そして、「トニー、あなたいつも少し雰囲気が違うようだけど。うん、魅力的よ。それに、随分痩せたんじゃない」李はその言葉を聞いて、ぱつと明るくなった。彼の頭は急速に動き出し、彼の目は意地悪く光った。李はそつとジェーンに近付き彼女の耳元で「今日はちよつと大切な話があつて、できれば二人で話したいんだけど」と無理に不安げな顔を作り、彼女に見えるように彼女の目を見つめた。

その後、李はジェーンの部屋で、最近崇史に元気がなく落ち込んでいる事、そして、何が起きたのかとても心配していることを告げた。帰り際には、なんとか崇史の力になってあげたいとも付け加えた。ジェーンは彼の言葉が嬉しかった。李は内面といい、外見といまると以前とは違う人物に見えた。そして、ジェーンは彼に自分もできる限りのことをやってみることを約束した。李もジェーンも自分たちが演じた友情に暖かい気持ちになっていた。そして、彼らは心地よく別れた。

第9章

克也とトニーは崇史がブラッドリーと付き合っている事を知った。克也は信じたくなかった。自分が圧倒的に優位に立っていると優越感に浸っていたというのに、それに、崇史の魅力それは自分の錯覚であつたとようやく納得できたのにも関わらず、また彼は難なく別の男性とそれも十分に魅力的な人物と付き合っているのである。どうして？再び克也は彼に嫉妬する気持ちを押さえきれなかった。ただ、もう二度と崇史を自分のグループに入れようとは思わなかった。崇史は本当に悩んでいたのか？克也は最後に自分の誕生日会で見ただ彼の表情を思い出した。あいつの凶太い神経といたら。そう思い始めると今まで蓄積された崇史に対する記憶全てが、別の意味合いを持つて見え始めるのである。きっと崇史は俺を利用してんだ。それに、あいつはいつも俺を馬鹿にしていた。克也は自分が彼を利用しようとしていた事を都合良く忘れ、彼を許せないと思つた。

そんなカツヤを不安そうな目でトニーは見つめていた。何かセクスの良い言葉でもかけられるべきだろうか？彼は崇史を馬鹿にするようなフレーズを思案した。だが、カツヤの怒りに溢れた形相を見ると今は何も言わない方が得策であると判断した。そして、彼はほんの数日前に崇史に会いに彼のフラットに行った事を思い出した。結局は彼はおらず、ジェーンと話をしただけだったけど。そして、彼はジェーンとタカシを元気づけようと、協力しようと誓い合ったにも関わらず、しかも、身勝手ではあるが自分の気持の温かさに感動したというのに、トニーは、今は崇史と関わるのは得策ではないと思つた。できることならば、暫くの間彼には近付くべきではないと思つた。

この一週間で崇史がブラッドリーに会うのは、これでもう三回目

であった。毎回ブラッドリーが電話をかけ彼を誘った。ブラッドリーの圧倒されるような熱情には心を打ったが、崇史の心は晴れなかった。なぜならば、ブラッドリーは崇史の良いところばかりが目に見えるようで、暗部については知らないであろう事、それに、全てを知ったならば彼はきつと自分から離れてしまふに違いない、といった心配が崇史につきまとったからだ。

だが、このまま隠し仰せる事はできません。その上、崇史はウイリアムに捨てられた、或は、騙された事に対する完全な自信の喪失と屈辱を忘れることができなかった。どのみち哀れな自分に対する噂は広がり、ブラッドリーの耳にもじきに入ることであろう。それならば、いつそ自分を傷つける前に別れてしまふのが得策ではないだろうか。ブラッドリーとの晴れやかなひと時が過ぎると、決まって過去の恥辱が彼を再び暗い気持ちへと引き戻すのであった。それでいて、今の崇史にはブラッドリーがなくてはならない存在になりつつあった。まるで未来が喪失してしまったかのように落胆している気持ちに、いくら何でも希望をもたせてくれるのは彼より他いなかった。

ブラッドリーといるといかに自分がこの世の中で必要な存在であるか、そして、誰一人として存在価値のない者はいないことを教えてくれるのである。

崇史は今もまた、今晚ブラッドリーに会う為に、出かける準備をしていた。それは簡単なものであった。というのは、ブラッドリーは明らかに服装や香水といったものには無頓着でせつかくお気に入り香水をつけようと彼はその違いに気が付かない。前回、崇史は美容院でカットをした後にデートに出かけたのだが、髪型の変化に気が付いたのは別れる直前の事であった。そうだった全ての事は崇史の心を何かほっとした気分させ、安らぎを与えた。

様々なブラッドリーのやさしさによって、今度こそは別れてしまおうという決心が、毎回デートの約束の時間が近づくにつれすっかり脇へ追いやられ、彼と会える喜びが心の全てを支配するのであった。

同じ部屋にいたルーカスは崇史の上機嫌な様子を見て安堵した。ルーカスは数週間前の夜に、すすり泣きを聞いて以来、すっかり意気消沈してしまった彼を心配していた。時折、彼が発する深い溜息には心が痛んだ。ルーカスには崇史が大きな苦悩の中にいる事は明白だった。それにも関わらず、自分には何もできないこと、何か彼の聖域には踏み込めないのをもどかしく感じていた。

それが最近、特に今日の崇史はいつになく浮き足立っていた。

「今日もまた外出かい？彼女ができたのかな？」

ルーカスはからかった。

「そうかもね。だとしても、今はトップシークレットだから、君には話せないよ」

崇史は大声を出して笑いごまかした。

「やはり、男には女が必要だよ。タカシが彼女と別れ、落ち込んでいる時は心配したけど、とにかく元気になって良かったよ」

崇史のあやふやな答え方をルーカスは肯定の意味合いで受け取ったようだ。崇史はあえてルーカスに対して否定はせず聞き流した。

彼らの会話を聞いてジェーンは安堵した。李から崇史が落ち込んでいると聞かされて以来、彼女は彼を心配して気にかけていた。でも、彼はもう大丈夫そうですね。

崇史が居間を出て行く時、ルーカスはからかうようにはにかみ、彼の目は、俺は全てお見通しだよと語っていた。そして、力強く「グッドラック！」と見送った。ジェーンは崇史を玄関まで見送った。そして、「李があなたをとて心配していたわよ」と告げ、彼を力強くハグした。

李の話聞いて意外な感じがした。そういえば、もう随分長い間彼と会っていないように思った。

ロンドン日は日が暮れるのが早い。ほんの少し前までは、明るい日差しが辺り一面を照らしていたのに、気が付けばうつすらと夕日が射し、しばらくもたたないうちに、街灯がいつせいに光りだして夜空が都市を覆った。

崇史は先を急いだ。何か事故があつたのか、一向に進まないバスを降りて、地下鉄に飛び乗った。時計の針はもう約束の時間を指している。彼は少し遅れる旨のメールを送信して、仕事から自宅に帰る人々で大混雑をしているプラットホームをなんとか抜け出し、エスカレーターを駆け上った。地下鉄に乗っている間雨が降っていたのか地面は濡れていた。彼は水たまりの水が跳ねないように注意しながら待ち合わせの場所へ大急ぎで走っていった。

崇史は百メートル程先のブラッドリーを確認した。彼は待ち合わせ場所のイタリアンレストランの中には入らず、店の外で自分が来るのを今か今かと待っているのが見えた。お互いの顔はつきり認識できるところまでやってくると、ブラッドリーの顔はぱっと輝き

喜びに満ち溢れた。

「ようこそ御出で下さいました」

ブラッドリーはからかいながら、仰々しくレストランの中に崇史を招き入れた。座席はすでに景色がよく見える二階の窓際に予約されていた。彼らは数分間お互いに何も話さず見つめ合った。ブラッドリーと崇史の視線が絡み合い、何かこそばゆいような恥ずかしいような感覚を味わった。ブラッドリーはこらえられなくなって笑い出した。

その時のブラッドリーの顔は少年のように生き活きとしていた。彼には全てがおかしいらしく、つまらないありきたりな事までも興味ありげに崇史の話に集中し、ある瞬間は笑い、次の瞬間は憤慨し、または彼を勇気づけた。

ブラッドリーと会わなかった崇史の平凡な二日間は、彼にとってはドラマチックな出来事に変貌したのであった。今日のブラッドリーの話は仕事の愚痴が大半を占めたが、それでいて、彼の語調から実際は、彼は仕事を愛し、心から上司を尊敬していることが感じられた。その為、彼の愚痴には不快なものは一切感じられず、それは逆にコメディのような面白さが多分に含まれていた。ブラッドリーは失敗も悲しみも全て喜劇に変える天才であった。

彼らは二時間ほどたつぷりとイタリアンを味わい、楽しい時を過ごした後、店を出てテムズ川沿いを散歩した。そこは美しい夜景、幻想的な風景が広がっていた。この光景は崇史が夢見た映像そのものであった。それが今、現在進行形で動いているのである。

崇史はブラッドリーの誇らしげな顔を見、彼の低い男らしい声で

語れている話を心地良く聞いていた。何て幸せなひと時なのだろうと彼は思った。

だが、そんな時ですら、深い悲しみが突如心の中に現れて崇史を襲った。それはウイリアムに会いにテートモダンに向かっている最中に、思い描いた風景であった。その時の幻想と今現在進行中の時間は完全に重なり合った。崇史は一瞬、ぎょっとしてブラッドリーを見た。

今自分の横にいるのは確かにウイリアムではなくブラッドリーである。彼はほつと肩を撫で下ろした。だが、その安心もすぐに吹き飛ばされ、次の悲しみが彼を襲った。

あの時、どうしてウイリアムは来てくれなかったのだろう。僕はずっと彼を待っていたのに。きっとブラッドリーも僕を置いてどこかに消えてしまふに違いない。あらゆるウイリアムとの思い出が深い悲しみとなって、心の深淵から込み上げて来た。それは憎しみや恐怖ではなくとてつもなく巨大な悲しみであった。

そして、悲しみはいつしか不安となって崇史を襲った。彼には悲劇の再来が刻々と近付いているように思われた。これから先、何もかもブラッドリーに話さなければならぬ日が必ずやって来る。いつまでも避けてばかりはいられない。そう思うと、涙が急に込み上げてきて泣くまいと必死になっている崇史がいた。

彼は『僕を一人にしないで』とそつと心の中で呟いた。

その時、ブラッドリーは輝かしい大英帝国史を誇らしげに語っていた。

「見えるかいあのベルファスト号を・・・」ブラッドリーは自分の幸せと輝かしい大英帝国の歴史とに高揚していた。彼は完全に自分が描いている世界に陶醉していた為、崇史の異変には気が付いていなかった。

話のクライマックスが過ぎ、崇史の方を見ると、彼は横にはおらず、数歩後を歩いていった。彼の顔を覗き込むと青白く、数滴の涙と不安げな表情があった。ブラッドリーはびっくりして、何が起こったのか全く分からず、きつと自分が何かしでかしたのに違いないとあたふたした。

「どうしたんだい、俺が何かをしたかい。傷つけるような事を言っただかい。お願いだから答えて」

二人は地面にしゃがみ込み、ブラッドリーは慰めるように背中を摩った。崇史は震えていた。涙の音だけがブラッドリーの耳に響き、それ以外は何の音も聞こえなかった。彼はもの凄いいスピードであらゆる可能性を詮索した。そして、次の結論に達した。俺はタカシを無視し彼には何の興味もない話を延々としていたのだ。何て俺は愚か者だろう。彼は崇史を深く傷つけ、こんなにも悲しませたことに恐怖し青ざめた。

「すまなかつたよ。君には全く興味の無い事を長々と話すなんて、馬鹿だつたよ」

ブラッドリーは自分で自分の頭を殴った。

崇史は彼の誤解に驚き、あまりのやさしさに感動が込み上げてきた。彼は全てをふっきったように急に晴れやかな顔になってブラッドリーの顔を両手で挟みながら、「その逆だよ。僕は今、あなたの

話に感動しているんだよ。素敵な話をどうもありがとう」崇史は涙の訳について嘘をついたが、彼の話が素敵なのは確かであった。

ブラッドリーはうれしくて、崇史をきつく抱きしめて、高く持ち上げた。彼は単純な男である。崇史の言った言葉をそのまま受け止め、自分が崇史の涙に焦った事を笑い、また彼を感動させた自身身を誇らしく思った。

「びつくりした？」崇史は声をあげて笑った。

そうだ、僕は何を悲しんでいるのであろう。あれは過去であって、現在僕にはこんなにも大きな幸せがあるのに。それに、ブラッドリーとウイリアムを同一視するのは失礼きわまりないではないか。万が一彼が僕の元を去ったとしてもそれは自分が嘘をついているからであって、彼の責任ではない。よって、僕はその事を受け止めなければならぬ。だが、全てを話すのはもっとずっと先にしよう。崇史は少しでも長くブラッドリーとの幸せな時間を持ち続けたいと思った。

彼らは大きく深呼吸して周りを見渡した。そこにはライトアップされたロンドンブリッジとベルファスト号が過去の栄光に照らされていた。何て美しい光景だろう。でも、決して栄華なるものは過去の代物だけではなく、今のロンドンにはまったく新しい栄華物語が展開されているのも事実である。それ故に、ロンドン市民、英国民は今もなお誇り高く生活をしているのである。それに、この国にはまだまだ世界が見習わなければならぬものがたくさんあるのかもしれない。

その時ディナークルーズが二人の目の前を通り過ぎた。崇史は感動と高ぶった気分で思わず船上の人々に向かって手を振った。彼ら

もそれに応え、ある人は大げさに、また別の人は小さく手を振った。彼らもまた、彼らそれぞれの思いに昂揚しているようであった。「きつと、彼らはアメリカ人だよ」ブラッドリーが笑いながらそう言った。

崇史はこの幸せがいつまでも続きますようにと、見えない無数の流れ星に向かって手を合わせた。

ブラッドリーはG・A・Yクラブに行こうと崇史を誘った。崇史にとって久々のナイトクラブである。「そういえば、長い間踊りに行っていなかったなあ」少しずつ傷は癒され、前向きな気持ちで勝つていくと、勇気が或は興味が増幅され新しい事をどんどんしたくなるものだ。それに、G・A・Yは崇史のお気に入りのナイトクラブである。きつとそこには自分の知っている人がいるに違いないけど、堂々とすれば良い。崇史は自分自身を勇気づけた。

久々のクラブにわくわくする気分が胸の中から沸き上がってくるようであった。少しずつ、心が修復され生気が蘇り、新しい自分へと向かっているように感じた。

ブラッドリーは腕時計を見た。G・A・Yがオープンするにはまだまだ時間があった。そこで、彼らはそのクラブの近くのKuバーでオープンまでの時間、暇をつぶすことにした。

Kuバーには大勢の男達でいっぱいであった。すでに、テンションは上がっていて大声で騒いでいる人もいる。彼らはそんな騒々しい一階を避け二階へとあがった。運良くちょうど席があいたので奥の方の座席に座った。席を確保した後、ブラッドリーはビールを取りに階下へ降りていった。

笑顔で彼を見送った後、崇史は凍り付いた。彼と入れ替わりにウイリアムが二階に上がって来るではないか。最後に見た彼と少しも変わらない姿のウイリアムがそこにいた。彼もまた席を探しているようで、店内を見渡しすぐに崇史が座っている席を見つけた。

ウイリアムは一人だった。崇史は射るように彼をじっと見据え、ウイリアムは氷のように冷たい、勝ち誇ったような軽蔑したような視線でそれに応えた。彼らはお互い少しの間、微動だにできなかった。ウイリアムは先に不気味な薄ら笑いをして目を逸らした。崇史のほうはウイリアムが目を逸らした後も、彼から目を離す事ができなかった。

崇史は窒息しそうになった。呼吸することすら忘れてしまっていた。ウイリアムが視界から外れた後も、崇史は意識が混乱して瞳孔が大きく見開いたまま固まってしまった。

まず最初に激しい憎悪が崇史を襲った。何か復讐をしなければ。彼を罵倒し恥をかかせるなら今だ。崇史の目はウイリアムを追っていた。だがその考えはすぐに陰を潜め、恐怖の映像、すなわち彼の不良仲間達が自分を襲ったシーンがまざまざと脳裏に蘇った。崇史はぞつとして周りを見渡したが彼らはおらず、ここにいるのはウイリアム一人であった。

ウイリアムは少しも崇史の方を見ようともしない。それは、後ろめたい気持ちからか、鬱陶しいと思っっているからか、理由は分からない。

次に崇史の内に現れた感情なるものは不思議な感情、ウイリアムに対する憎しみと恐怖にも関わらず、理性が警笛をならしているにも関わらず体全体が彼を求めているかのようで、体は彼の微細なこ

とまでも思い出した。彼の薄い唇の感触、長く柔らかいペニス、彼の体臭から口臭まで記憶していた。それらはウイリアムと別れた後、ずっと崇史を覆っていた不快な感情とは全く別種類のものであった。

もしかして、僕はまだ彼を好いているのかもしれない。そう思った瞬間多量のアドレナリンが湧き出し、全身がウイリアムを求めていた。どうにかしてもう一度、彼に抱かれたい。そして、その最高の瞬間で時間を停止させたい。彼だって人間なのだから、どうしてこうなったのか真相を知りたいではないか。だが、それと同じくして表れたのは巨大な屈辱で、崇史は恥ずかしさに震えた。

『僕は敗者です。僕は捨てられたのです』

崇史は最後に見たウイリアムのあざ笑うような、完全に見下した目を思い出した。

『あゝアゝ。僕を助けて下さい』

これらの意識の混乱はわずか数十秒の間に起こり一気に駆け抜けた。悲しさと恥ずかしさで彼はパニックに陥りそうであった。崇史は恐る恐るウイリアムの方を見ると、彼が振り向いた。その目は忌々しそくに汚らわしいものを見る目であった。

崇史は仰天した。彼はあり得ない程に深い深淵に落ちて行き、ぞつとする程に自分自身が無価値な人物に思えて身震いした。彼はもう二度とウイリアムの方を見られなかった。

崇史は真っ青な顔をして、逃げるように席を立った。その時、ブラッドリーの事は全く念頭になかった。とにかくウイリアムからできるだけ遠くへ離れたい。このままだと意識が砕け散ってしましい

そうだった。今の彼は冷静になる事ができなかった。自分が何を思い考えているかがまるで分からなかった。彼は急ぎ足で階段へ向かった。

「臼井君」その時自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。崇史は反射的にその声のする方を振り向いた。そこには克也と李そして彼らの友人達がいない。臼井君？崇史ははっとした。何故に克也は僕の名前を名字で呼ぶのか？そもそも彼と初めて出会って以来、一度もそう呼ばれたことはなかったのに。崇史は彼らが意地悪く自分を見ているのに気が付いた。ある者はウイリアムの方を見、そして再び崇史を見、肩を窄めた。彼らが今何を想像しているのかは明白だった。

崇史は惨めであった。克也までもが自分を軽蔑し、彼らのゴシツプのネタにするなんて。もう駄目だ。何もかも終わりだ。それでも崇史は彼らの視界から出るまで可能な限り胸を張って堂々とゆっくりと階段に向かって歩いた。

李はあたふたしている自分を演じた。まるで離れて行く崇史を追うかのように小走りに近寄った。だが、崇史が見えなくなると、克也達の方に振り向き小馬鹿にしたように鼻で笑い、同意を求めるかのように彼らを見つめた。

彼らから見えない所まで来ると、崇史は逃げ出すように出口へ向かった。引き止めようとするブラッドリーをも強い力で振り切って駆け出した。ブラッドリーは何が起こったのか訳が分からず呆然としていた。とにかくウイリアムがいるこの場所から逃げ出さなければ。それに、忌々しい克也達からも。

オールドコンプトンストリートを走り抜けレスタースクウェアま

で無我夢中で走った。崇史は走りながら様々な映像、そして、思いが頭を駆け巡った。彼の頭の中にはウィリアムが自分を見下す映像と、克也そして彼の友人達が自分をあざけり笑う姿が交互に現れ彼を襲った。人間とはなんと恐ろしい生き物なのか。そして、自分は何と愚か者なのか。その後もずっと走るのを止められなかった。彼は人間のおぞましさをから逃げていたのかもしれない。

崇史は泣いていた。彼はもう一度克也の誕生日会を思い出した。克也はやさしさから執拗に自分を誘ったのだと思っていた。でも、今ならばつきりと分かる、彼は単に僕とウィリアムに関する噂の真相を知りたかっただけなのだ。その証拠に克也はあれ以来、一度も僕に連絡してこなかったではないか。今、崇史は克也をこれまでとは全く違った視点から見ている。彼を尊敬し、憧れていた自分が情けなかった。「あゝ」震える声でこう叫んだ。何か自分ではとうてい理解するのが不可能である人間のどす黒い精神の塊に怯えた。全く分からない。これからどのように生きていけば良いのだろう。この瞬間、崇史の心は混沌とし、ただ得体の知れない何かに恐怖した。

パニック状態の崇史はネオンや人ごみにはつとし急に立ち止まった。異様な雰囲気を漂わせている崇史に誰も気が付いていないようだ。各々がただ各々の世界だけに興味、関心をもつ世界が存在する。誰も赤の他人には興味を持たない無関心な人々。崇史はまさに彼らにとっては無価値、不必要な人物であった。というよりもそもそも彼らの意識の中に入り込む余地すらないのだけれども。

崇史は我に振り返り冷静さが少しずつ戻って来た。だが、心臓はまだ高鳴ったままだ。どうして僕はあんなにも慌ててしまったのだろう。どうしてそれ程までにウィリアムを恐れるのか。彼は自分自身が何とも情けなく思った。どうにもこうにも悔しかった。このハードルを超えなければ平安は遙か彼方である。それに、なんて忌々しい存

在、崇史は克也を思い出し、怒りと軽蔑の気持ちで、吐き下がした。ブラッドリーはようやく崇史に追いついた。ブラッドリーはかなり焦っていた。驚いた口調で、

「いつたい、どうしたんだい？」と尋ねた。

「いや、別に何ともないよ」と崇史は無理に笑顔を作った。今の彼の顔にはあまりにも不自然すぎる笑みであった。

「何も無いって言ったって、君の顔は蒼白だよ」

それに崇史の体は震えていた。もう何もかもこれでおしまいだ。今までありがとう。そう思うと涙が溢れ出てきた。悲しすぎる終焉である。

ブラッドリーはすぐ側にあるマクドナルドに崇史を引き入れた。

「ごめんなさい。つらいことがあまりにもたくさんありすぎて、精神が不安定で僕自身どうすればいいか分からないよ」

崇史は今までにウイリアムとの間に起こった事を語り出した。ブラッドリーは真剣に話を聞いているようでその顔にいつもの笑顔はなかった。

「ありがとう正直に話をしてくれて。これからは俺も君を支えていけるように頑張るから。どんなことがあっても、君をいつまでも大切にするよ」

ブラッドリーの手は崇史の手を強く握っていた。彼の顔はまるで

崇史の一連の不幸を自分の事であるかのように思い、悲しみに溢れていた。彼はこの話をうつすらとは知っていた。ロンドンは大都市ではあるがゲイ社会のゴツシップの伝達は早い。そもそもブラッドリーは崇史を崇史がウイリアムと会う以前から知っていたのだ。もちろん崇史がウイリアムに恋をしていた事も知っていた。

「でも・・・あまりにも精神が混乱していて、もしかして、まだ彼のことを好きかもしれないんだよ」崇史はウイリアムの名前を言う事はできなかった。

ブラッドリーは崇史を心底かわいそうに思った。こんな目にあってもなお、まだあの男を忘れられないなんて。

「たとえ、君が別れようとも。俺は諦めないからね」

いつもの冷静で落ち着いているブラッドリーも崇史の激しい心の移り変わりを見て正直驚いた。だが、躊躇せず、ブラッドリーのやさしさや平和な気持ちが崇史を守らなければ、助けてあげなければと決意させた。だが、ウイリアムの陰が崇史からいつまでも離れようとはせずに、精神面においても健康面においても蝕んでいるように思えるのは、彼を悲しい気持ちにした。

ブラッドリーはこれからどうするべきかを真剣に考えていた。崇史を見ると涙の中にも本当に嬉しそうなほつとしたような微笑みを認め、『きつと大丈夫だよ』と自分に言い聞かせた。じきにあの男への執着が消え去る事を祈ろう。たった今、ウイリアムへの気持ちがまだ消え去ってはいないという告白には正直落ち込まれた。それは、自分が彼より勝ってはいないということなのか。それとも、タカシは自分以上にあいつが好きなのか。晴れ晴れした表情を取り戻しつつある崇史とは対照的に彼は不安でいっぱいだった。ブラッ

ドリーにとって何よりも重要なのはタカシが自分を愛しているかどうかであった。

その後、彼らはHIVの検査日程を決めた。

「恐れる事はないよ、現実を直視してそれに立ち向かっていけるかが大事なんだよ。イギリスでは検査は無料だ。恥ずかしことなどないよ。君が患者を蔑視していないのなら君自身も堂々とくらししていくべきだよ。仮に今、俺がHIVを告白したらそれが原因で俺を嫌いになるのかい。君がそうでないのなら他の人もそうでないんだよ」

ブラッドリーの言葉は力強くまた筋が通っているように思えた。だが、それなら今日の克也はどうなるのだろう。彼は既に僕を裏切ったではないか。そうは思ったが、今の崇史はブラッドリーのやさしさで充分であった。もう他に何も必要ではないように思った。崇史はブラッドリーにならどんなことがあっても、ずっとついていけるように思った。なぜなら、自分とウイリアムとの不潔で屈辱的な過去が、ブラッドリーとの交際の障害にならなかったばかりか、彼が真剣な目で僕を支えてくれると言ったではないか。こんなにもやさしい人物が今までに自分のそばにいたであろうか。崇史は今の自分がとつても幸せだと思った。

その夜、二人は初めて夜をともにした。ブラッドリーのエッチはやさしさにあふれ、相手を思いやるような感じだった。射精の瞬間崇史は快感を味わった。今まで常に感じた射精後の後ろめたさのよくなものはなかった。崇史が落ち着くのを待って、ブラッドリーも射精した。その後間もなく彼らは眠りに落ちた。

克也と李それに彼らの友人達は今晚目撃した崇史とウイリアムの

光景について遅くまで噂し合った。彼らは大いに盛り上がっていた。そもそも、一部の人々にとって他人の不幸は面白おかしく感じるものだ。克也や彼の仲間が崇史を好ましく思っていないからなおさらである。彼らは十分に崇史を軽蔑し、馬鹿にした後、満足したかのように席を立ち、G・A・Yに向かった。李もまたこの時間を大いに楽しんでいた。崇史を見下し、ゴシップのネタにすることによって彼らとの一体感を感じ、優越感に浸れたのである。李は自分も彼らに馬鹿にされ笑いにされていることを知らない。想像すらしていないのである。なぜなら李はもう彼らの一員であり仲間であると信じていたからである。ただ、ある人物は李には崇史を軽蔑する資格がないと感じていたし、またあるものはそもそもほんの数ヶ月前まで笑いにされていた李が崇史を馬鹿にするのを滑稽に思っていたのも事実である。そして、李は他人即ち崇史を彼らとともに馬鹿にする事によってのみなんとか自分の存在意義を確立できていた。だが、そんなことでは彼らの中での自分の存在を維持し続ける事は不可能である。他人を利用するのではなく自分自身が意味ある存在にならなければ自分の居場所は確立することはできない。残念なことに、李はまだその事実を知らない。彼は哀れにも必死になって崇史を嘲笑するしかないのである。ひとたび、話題がゴシップから別のテーマへと移ると、彼はもう何も発言できなくなるのである。

だが、なぜか克也は李を支持した。彼の前では誰も李の悪口を言うものはいなかった。ただ、誰もいつまでも李が克也のお気に入りであり続けることはあり得ないと思っていた。彼らの関係が解消されるのは時間の問題である。なぜなら彼らを結びつけているのはただ一つ崇史のゴシップだけだからである。それでも、李はこれまでの人生で初めて自分から必死に努力しているのも認めなければならない。彼は確実にスリムになりつつあったし、活力に満ちつつあった。だが、彼に残されている時間はあとわずかである。それはもうまもなく、克也の脳裏から崇史の存在が消失するからである。

第10章

崇史はあまり眠られなかった。恐怖？それとも、緊張？どのよう
に表現すればよいのかは分からないが、今までに経験したことな
いような、心が極限にまで張りつめた状態とでもいおうか、とても
この精神状態では眠られそうにない気がした。

彼は一刻も早く検査の結果が知りたかった。なぜなら、たとえ結
果がどうであれ（陰性であれ陽性であれ）、それを知る事によつて
精神の安定を得られるような気がしたからだ。

だが、果たして、陽性であつた場合も心が休まるであろうか？と
んでもないように思う。そこからは想像を超えた悲しみと不安があ
るに違いない。とても、安定という言葉では表現できないように思
う。その言葉ではなく、諦めという表現が適切ではないだろうか。

今の崇史は希望と絶望の間を歩き来していた。陰性であることを
想像すると、希望に満ちた明るい未来のイメージが次々と頭の中に
現れ、その瞬間は何と幸せであろうか。だが、それはかりそめの気
休めにすぎない。それは真実の映像ではないのだ。もう次の瞬間に
はその幸福な気持ちは打ち消され、なんともいえない不安が彼を襲
うのである。その後、崇史は恐怖におののきながら答えのない想像
を延々と続けていた。

それに引き換え、ブラッドリーの幸せそうな寝顔は！！！崇史は
妬ましそうにすやすやと軽いいびきをかいて、気持ち良さそうに眠
っているブラッドリーを見た。

『彼が何と言おうと僕の苦しみが分かるはずがない』

『彼は僕を愛し、支えると言ったけれど、この病気はそんなに生易しいものではないのです』

『これはね、この病気を持っている、或は感染しているかもしれない人にしか分からないのですよ』

崇史は今にでもブラッドリーを起こして、大声でそう怒鳴ってやりたい衝動に駆られた。

だが、崇史は今一瞬心に現れたいたらだちにびっくりして、その卑しい感情を急いで打ち消した。僕はなんてつまらない人間なのだろう。こんなにも自分にやさしく接してくれて、しかも、あの言葉（僕を支えてくれる）といったフレーズは本心から出たに違いないのに。その事は絶対に確かである。なぜなら、その言葉を言った時の彼の表情は真剣であり、軽々しく言ったのではない重い響きがあったではないか。

「彼に心から誤りなさい」「君はまだまだ精神的に大人になっていないですね」「いつまでも自己中心的なのだから」崇史の心の中の住人が次々に崇史を非難する言葉を投げかけた。彼はそれを打ち消すかのように大声をあげた。

その時の崇史の顔は狼のように鋭い目つきをし、息が荒々しかった。そして、彼は本物の獣になってしまったかのようにであった。ブラッドリーを噛み殺さなければ。彼も道ずれにしてやる。僕の体内に潜むウイルスを彼に感染させてやるのだ。もし、僕が感染者ならばブラッドリーも僕と同じ道を歩まなければならない。

『それでいいですか。あなたはいつまでも僕を大切にすると』

たではないですか』 『それを今証明して下さい』

気が付けば、ブラッドリーが驚いたように自分を見つめていた。僕は一体何を想像し、何をしていたのだろうか。もしかして、本当に噛み付いてしまったのかもしれない。崇史は慌ててブラッドリーの全身を見た。そこには、いつもと変わらぬ健康そうに輝いている身体があった。僕は何もしていなかったのですね。崇史はほっと安堵した。それに、ブラッドリーは僕が何を想像していたのかを知らない。それでも、崇史は後ろめたい気持ちで、彼の目を直視できなかった。

ブラッドリーは全身汗だくの崇史を丁寧にタオルで拭き、やさしく全身にキスをした。彼の目は同情のやさしさと満ち溢れていた。そして、彼の目は涙でいっぱいであった。その後、彼は何度も、何度も崇史を強く抱きしめて慰めた。

「恐ろしい夢を見ていたんだね。かわいそうに」

「俺が君と替わってあげられれば。何とかしてあげられれば」

ブラッドリーはそう言って溜息をついた。

彼のやさしさに触れた崇史は自分のおぞましさに激しく震えた。

崇史は自分の心に訳が分からなくなったのだ。

崇史は自分の心は純粹だと思っていた。彼は自分こそはモラルの中心かのように思っていた。もしも、この世に天国と地獄があればきっと天国に行けるに違いないと。そして、彼は神のごとく自分を基準に他者を裁いていた。いつもそうだった。でも、でも、でも、彼は動揺した。もしかして、自分の考えてきたことが間違っている

のならば、何をもって世の中の善悪を判断してよいのか。

崇史はその時思った。ウイリアムは彼自身の考えでもって、正しいと思つて、行動していたはずだ。僕は彼が許せなかった。殺意すら覚えた。もしも、あの場面に彼の悪友？がいなければ、そして、彼より自分の腕力が勝っていたならば、間違いなく僕は彼を刺していただろう。そして、力のある限り何度も、何度も。そうです、僕は殺人者なのです。僕は彼を殺さなかったのではなく、殺せなかったのです。そうであるならば、あく分らない。誰がウイリアムを悪魔と決めつけたのですか？誰がそう証明したのですか？

それに、今自分の目の前にいるブラッドリーは本当に天使なのですか？それは自分に対してやさしかったから？都合がよかったから？もしも、ウイリアムの考え方が世界の基準だったら、彼を基に自分がとつた行動を見直したらどうなるのか。

崇史はずつと思つていた。この世界にはなんとストレスが多いことかと。これまでに何度、屈辱と挫折に涙し、また、人間達がとつた行動に気分が悪くなったことか、ぞつとしたことか。その時、自分は彼らを間違いなく見下していた。軽蔑していた。許せないと思つた。彼らはきつと地獄に落ちるに違いないとさえ思つた。だが、それは本当だろうか。誰彼も、自分こそが正しいと思つて行動し、自身を基準に日々の生活を送っている。ただ誰もそれを意識すらしていないに違いない。そう考えるのであるならば、彼らも僕を疎ましい存在だと思つていたのかもしれない。だとするならば僕が受けた屈辱は、ずっと幸せに感じられなかった二十数年間は果たして彼らの、僕に歯向かう彼らのせいなのだろうか。それとも、僕自身の問題なのか。

崇史はますます分からなくなつた。今まで築いてきた二十数年間

の人生が音をたてて崩れかけていくかのようであった。それは彼の不安定な精神状態から起因しているのか？それとも？

崇史はその後少しも落ち着くことができなかった。ブラッドリーは崇史の体をやさしく摩り、まるで子守唄のような落ち着いたトーンで何かの物語、そして、彼の物語を語っていた。いつしか崇史は眠りに落ち、それを見たブラッドリーも再び深い眠りについた。

いったいどれくらい眠ったのだろうか？もしかして、ほとんど眠っていないかったのかもしれない。崇史の手は強くブラッドリーの手で握りしめられていた。それは眠ってもなお『君を支える』と言った彼の言葉を表しているかのようであった。崇史はゆっくりとその固く絡まりあった手を解いて、ベッドから起き上がった。

ブラッドリーの体温と自分の体温とではかばかほてっている体を冷ましたかった。そして、先程の疑問を再度考えてみたかった。

崇史はそつと寝室のある二階から一階へと下りていった。その途中、彼は自分が今とつている行動が間違っているように思った。なぜなら、階段を一段一段下りていく間に、霊的な寂しい寒気がいつそう強くなっているかのように感じたからだ。彼はその冷気が怖かった。それが全身にまわりつき自分の体を覆っている。先程までの熱い体温は跡形もなく消えてしまった。

再びどんどん悲しみに包まれていく自分を感じた。それは、まるで自分がそこから逃げようと必死にもがいても、ますます深みに嵌り、逃れられない状態にいるかのようであった。だが、自分は何かに向かって進み続けている。二階に戻るべきなのにもかかわらず、彼は地獄へと足を進めているのである。

『誰か助けて下さい。僕の足を止めて下さい』

その時、庭の方で何かが割れる音がした。崇史はどきりとして、その方を見ると、知らない誰かが自分を見ているではないか。彼は恐怖で叫んだ。だが彼のそれは音が伴わず、彼の喘ぎ声、ばたばたしている音が空しく響いた。

崇史はぞつとして、そこから逃れようと、必死に足を動かそうとするも一歩も進まなかった。数センチと進んでいない。「神様」無我夢中で念じている彼であった。「誰か助けて下さい」「ブラッドリー早く来て」

崇史はもがきながら目を覚ました。そこにはじつと自分を見下ろしているブラッドリーの顔があった。

「大丈夫かい？もう朝だよ」

ブラッドリーの目は心配そうに崇史を見つめていた。そして、彼はやさしく崇史の頭を撫でた。

「おはよう。何かすごく怖い夢を見ていたんだよ」ブラッドリーは心配そうな声でそう言った。

崇史は早くこの落ち着かない気持ちに終止符を打ちたいと思った。それにしても、何て長い三ヶ月だったろう。でも、もうすぐそれも終わるのだ。それも後ほんの少しの時間で。まだ人生の入り口で、まだ少しも人生を謳歌していない段階で、この病気に感染するわけにいかない。それに僕にとってはやはりウィリアムは悪人なのです。あんな奴の為に人生を台無しにしたまるものですか。崇史の感情は昨夜とは違って激しく燃えていた。もしかして、怒り、あるいは

憎しみの感情もまた生きる力を与えるのかもしれない。

彼らはそそくさとシャワーを浴び、服を着て、軽い朝食をとって家を出た。その間、彼らの間にはほとんど会話は無かった。崇史は誰とも会話をする気分ではなかった。そつとしておいて欲しかった。

あまりにも早くに家を出てしまったようだ。検査結果がでるまでまだ半日以上もある。そうはいつても、部屋の中でじっとしているのは落ち着かないのだ。彼らはとりあえず電車に乗ってセントラルロンドンに向かった。結果がでる時間までそこで何をするのかは何も考えていなかった。それでも、何か体を動かしていないとどうにもならなかった。

騒がしい満員の列車の中で彼らは沈黙していた。ただ彼らの手はしっかりと握られていた。だが、崇史の心の中は様々な思いでいっぱいであった。恐怖？その段階はすでに通り越していた。今はただ納得できない気持ちがある。彼の心を占めていた。なぜに僕がこのような精神状態を経験しなければならないのか。あまりにも不公平ではないですか？ いったい僕が何をしたいのか？ つかっていない、幸せを経験したことの無い人というのは、こうまでも連続して苦しまなければならぬのですね。

決して、逃れられない深みとでも言おうか。何度振り払っても、何度頑張っても問題を解決しても、次から次へとまた別の新たな問題が降りかかってくる。崇史は大きな溜息をついた。それは重く深いものであった。

彼の溜息を聞いてブラッドリーはいつそう強く崇史の手を握りしめた。『あゝやめないと』何度も繰り返して読んだ本には、マイナスな思考は更なる良くない状況を運んで来ると書いてあったではない

か。さあさあ、目の前には素晴らしい未来が広がっているかもしれないのですから。それはもうすぐそこですよ。

このように深く思い悩んでいるうちに、彼らが下りるべき駅「ピクトリア駅を通りすぎてしまった。たとえ下車したとしても、何もすることがなかったのだからそんなことはどうでもよかった。それに、まだ検査結果がでるまで七時間もある。

崇史とブラッドリーは適当な名前も知らない駅で列車を下りて、あてもなく道を歩いた。

V & A 博物館の前で日本人観光客であろうか、場違いな程にきやびきやぴとはしゃいでいる。きつと卒業旅行に違いない。彼らはセンスの良い服を着て、新しい靴を履き、流行のヘアスタイルに髪をセットし、そして、輝くような幸せなオーラを発していた。いったい何がそれ程までに彼らを楽しませているのか。まるで生きているそのこと自体が彼らに幸せと活力を与えているかのようであった。

それとは反対に崇史とブラッドリーは博物館とは場違いな程に、深く落ち込み、暗いオーラが彼らを覆っているかのようであった。

全く両極端な彼らを行き交う人々は不思議そうに眺めていた。

彼らには何をそんなに、何の原因で彼らを悲しませているのかわからなかった。ただ、彼らはそれぞれに違った場面を想像していた。ある人は、二人の恋の別れを、またある人は「事業にでも失敗したのかしら」と、そして、皆一応に彼らに同情し、「かわいそうに、何があつたか知らないけれど頑張るのだよ」と思っていた。彼らには充分に人を思いやる余裕があつた。なぜなら、今私達はロンドンにいるのですから。そう、私達は成功者です。はるばるロンドンに

やって来るほどには恵まれているのです。でも、そうはいつでも、彼らの心も気の毒な二人の青年に浸食されていくかのようであった。

だが、すぐ側に顔を向けると、光り輝く生き活きとした集団があった。浮き浮きした男女が彼らには分からない言葉で楽しそうに、それはまるで鳥の音のよう、はしゃいでいる。彼らの快活なエネルギーは先程の暗い気持ちを完全に消し去ってしまう力を持っていた。今はもう、彼らの記憶から崇史とブラッドリーの姿は完全に消え去っていた。彼らの脳裏には、若々しい集団と自分の若かりし最高の瞬間とを照らし合わせ、重なり合わせていた。あの頃は何かの素敵だった。あゝ青春は何て素晴らしいのかしらと。私にも忘れられない甘い一時があったのですよ。また別の男性は彼の二十歳前後の武勇伝を回想し心が踊った。明るいエネルギーは多くの人々をも幸せにする力を持っているのである。

ブラッドリーは崇史を本当に気の毒に思っていた。そして、自分はいったい崇史の為に何ができるであろうかと毎日のように考えていた。それなのに自分は少しも彼の力になってやれないかのように感じていた。だが、事実はその逆で、崇史はブラッドリーに対して心から感謝していたし、彼がいなかったらどうなっていたか分からないと思っていた。

ブラッドリーは彼なりに崇史について考え、自分自身もまた苦しんでいると思っていた。そして、間もなく新しい未来が始まると。彼は崇史が恐らくはHIVに感染していないと考えていた。この病気はそんなに簡単には、一回のセックスでは感染しないと自信を持って言えると自分を安心させた。それに、もしそれだけのことで感染しているのならば崇史はあまりにも不運である。

ブラッドリーは物事を崇史よりももっと楽天的に考えていた。そ

れは彼が感染者でないからではなく、物事全てにおいてである。彼はそれほどにはこの世の中は不平等に作られていないはずだと強く思った。

ブラッドリーと崇史は黙って俯いたまま物思いに耽っていた。彼らは自分達が何時間も、V & A博物館の入り口にあるベンチに座っている事すら気が付いていないのかもしれない。今彼らはどこで何をしているのかはまるで重要ではなかった。次々に館内へ入っていく観光客や学生達が不思議そうに彼らを見ているのに気が付かなかつたし、扉の内側から警備員が不審な目で彼らを時折、チェックしているのも知らなかった。結局彼ら二人は一度もV & A博物館の中に入ることもなく、その場を後にした。

彼らはビクトリア保健所の待合室の中にいた。時間の進み具合は普段よりもずっと遅く感じた。待合室には崇史と同じように不安な表情をして検査結果を待っている人々が大勢いた。不安定な精神で周りを見ると、誰もが神様にすがっているかのように見える。決して動揺しているのは自分だけではないのですよといった風に。今、彼らがいる待合室は清潔で落ち着いた雰囲気で作られて、少しも暗い所がない。きつと心理学的にデザインされているに違いない。まず最初に、ブラッドリーの名前が呼ばれた。彼も崇史を勇気づける為に一緒にHIV検査を受けたのだ。彼は結果を聞かずとも陰性であることは間違いなかった。次に崇史の名前が呼ばれた。彼らはそれぞれ別々の部屋で結果を聞く事になっていた。判決が、全ての自分の未来の鍵が目の前の扉の向こう側にあるのだ。崇史は恐る恐るゆっくりと医務室の中に入って行った。

崇史が席につくなり彼を待ち受けていた女医がとつても嬉しそうに、やさしい声で「良かったですね、陰性ですよ」と微笑んだ。崇史のほっとした表情を見て彼女はまた微笑んだ。もしも、結果が陽

性であったなら彼女はどのような表情をするのだろう。それを患者に告げるのはとてもつらい仕事のように思えた。なんだかあまりにもあっけなかった。こんなにも短時間で終わるものなのか。きっと陽性であるならば、これからいろんな説明を受けたりするのだろうけど。それにしても結果を聞く直前までイメージしていたような、とてつもなく大きな感動なるものは感じなかった。

病室から出て来る崇史の嬉しそうな顔を見て、結果が陰性である事が一目瞭然であったが、崇史の口からはつきりと結果を聞いたあと、ブラッドリーは安心したように彼の肩を強く叩いた。ブラッドリーはとっても嬉しそうであった。崇史の方は？もちろん彼は幸せであった。でも、それは予想していた程には大きなものではなく、ただ不安や緊張がなくなっただけのもの、すなわち今まで通りに生活は続くのであって、決してマイナスにはならないがプラスにもならない、そんな冷めた見方も心の中の一部にはあった。少なくともこれからやらなければならなかったかもしれない多大な労力は省かれたわけだが。

二人は幸せそうに手をつないで席を立った。待合室にはまだ不安げな顔をして結果を待つ人々が大勢いたし、また新たな患者も数人入って来た。ブラッドリーは彼らをとつても気の毒に思った。張りつめた緊張を何とかほぐしてあげたい、少しでも勇気をあげたい、何か力になってあげたいと思った。彼は最後にもう一度振り返って「グッドラック」と心の中で叫んだ。

「結果が陰性であれHIV患者の事は忘れてはいけないよ」彼らはそう誓い合った。

時計は六時を指していた。彼らは遅すぎる昼食をとった。久々に健康的な空腹を感じた。まるで何日間も食事をしていなかったかの

ように、もの凄い勢いでがつかつと食事を詰め込んだ。空腹が満たされるとともに先程の冷めた見方から、少しずつじわじわと感動が心の中から沸き上がってくるのを感じた。二人とも嬉しくて高揚した気分からか、その後ビクトリア駅までずっと止まることなく話続けた。その会話の全ての内容が彼らにはおかしく楽しかった。その姿はまるでお昼時、博物館の前にいた若い日本人グループと同じリズムのようであった。

その後、崇史は少し一人になりたかった。誰にも邪魔されずに頭の中を整理したかった。彼は帰りの列車の中で、眠っている振りをした。彼らが降りる駅までは十五分ほどしかないがとても貴重であった。崇史は率直に素直に自分が感染していなかった事に対して神様に感謝した。そして、彼を煩悶させてきた原因であるウイリアムに対しても考えた。今、一つはつきりと言えることは少しも彼を憎んでいないと言う事だ。ウイリアムと出会った時は遙か遠い過去の事であったような気がした。それに、その少しずつ薄くなりかけている過去の記憶は少しも崇史に痛みを与えなかったばかりか楽しい思い出？そこまで言うとおかしいかもしれないが、まるで自分の若い青い青年時代の過ちを思い出すかのような感覚であった。彼との様々ないざこざがあったからこそ今の感動があるのかもしれない。そして、もっと前からそう思える自分であるべきだったと思った。そこには少し成長した彼がいた。

そう思った途端、それまでの緩やかな感動から一気にち切れなげの感動、感激が崇史を覆った。これで、僕は解放されたのですね。彼の目前に広がる未来がぱつと明るく輝いたかのようであった。今、彼は過去のしがらみを完全に断ち切ったのである。

崇史は駅からの道のり、自分の横を並んで歩いているブラッドリ―をいつもよりも誇らしげに見ていた。これで彼とともに新たな道

をスタートできる。なんと素晴らしいことだろう。

それではいったい何が変わったというのであろうか？ 崇史は手を胸にあてて考えてみた。まずは安心感、これで感染していた場合に考えられる様々な不安、負担を負うことはない。他には？ 痛みや苦しみはないですね？ その他には？ 病気で苦しんでいる人々の気持ち但至少でも分かるようになったと思います。他には？ 他には？ 彼は少しの間考えた。何か漠然とはしているけれど、燦然と輝く未来が僕にはあります。崇史はそう強く自分に言い聞かすように断言した。すると、心の深淵から自分をあざ笑うかのような声が聞こえた。

「君は何も変わっていませんね」

「いいえ僕は変わりましたよ。十分に、十分すぎるほどに苦しんだのですから」

それっきり、心の声は途絶えた。そして、崇史は急いで付け加えた。

「ちょっと待って下さい。僕には今、人間の心があります。他者を思いやるやさしくきらきら光る心があるのです。もうどんな事があっても僕は挫けません。人々の為にきつと何かをやり遂げてみせます。絶対に証明してみせますから」

だが、もう心の住民はおらず彼の必死な懸命な決意には何も答えなかった。

その晩、ブラッドリーは上機嫌であった。

ブラッドリーはとめどなく話し続けた。これでいったい何本目の

ビールであろう、彼は異常な程大量のビールを飲んだ。普段はそれ程大酒飲みではないのに。彼はもう目の前には何の問題もない事、それに、これから崇史と共にやるうと思つたいろいろな事が実際に始められる事に有頂天であつた。そして、彼の浮き浮きした心は、ブラッドリーを更に心地良くさせていった。『今晚はコンドームを付けずに、全身で崇史を味わおう！』彼は崇史の純真な体を思い浮かべた。

そう思つた途端、急激にブラッドリーの性欲は頂点に達し、崇史を持ち上げ、寢室へと急いだ。

そこで彼らは貪り合うように愛し合つた。それはこれまでのやさしいエッチではなく野獣のような、欲望を前面にだしたかのような愛であつた。

李はとまどつていた。なぜなら克也の態度が明らかに以前と少しずつ変わり始めているからだ。それに伴い、彼が友人と思つていた人達も自分を邪見に扱うようになってきているように感じた。ただ彼は確信を持てなかつた。なぜなら今までと同じく彼らと行動を共にする時間が一日の大半を占めていたからだ。だが、以前と同じようにはそれを楽しく感じる事ができず、日々の生活にも満足できなくなつていた。それに、もう誰も崇史の話題に関心を示すものはいなかつた。今、僕と彼らを結び付けているは何だろう。彼はぼんやりと疑問に思つた。李はたつた今大量に買い込んだスナックの袋を無意識に開けようとした。だがそれを食べるのをぐっと堪えた。今、これを食べるとまた以前の自分に逆戻りしてしまうかのように思つたからだ。今、僕は試されているんだ。李は気持ちが進まないながらも克也のフラットで開かれているパーティーに向かつた。

ちょうどその時、なにげなく目の前のセントジエームズパークの

湖畔を見ると、ジェーンの彼氏「ジャック」が自分の知らない女性と抱き合っているではないか。それには明らかに愛する気持ちが含まれているように見えた。トニーはぞくぞくと震えた。再び神は僕を見捨てはしなかったのだ。彼はもう随分と長い間会っていない崇史とジェーンを思い浮かべた。これでまた彼らと関係を始められる。彼は様々なストーリーを思い描いた。先程食べるのを諦めたスナックの封を開け、ポテトチップスを食べながらゆっくりと歩いた。そして、思いついたかのように携帯でジャックと女性の写真をまるで風景の写真を撮っているかのような風を装って撮った。そのまま克也には今日は体調が悪いのでパーティーには参加できないといった旨のメールを送り、ゆっくりと崇史のフラットに向かって歩き始めた。

トニーはまず崇史と秘密を共有したかった。だが、ようやく崇史のフラットに着くと、そこにはジェーンしかいなかった。先程見た光景を今、自分の目の前にいるジェーンに告げられた。それは何と最高の瞬間であろう。ジェーンにまるで死刑の宣告をするかのごとく裁定を下すのだ。彼女の今後は自分に委ねられている。僕は今、彼女をどうにでもできるのだ。だが彼はぐつと我慢した。せつかくのチャンスが無駄にはいけない。以前克也に対して崇史を利用したように、今度はこの情報を崇史と関係を再構築する為に使わなと。それに、崇史は自分が今まで克也達とともに彼を馬鹿にしていたとは知らない。李の頭の中は全て自分の事ばかり念頭にあって、少しも、ジェーンや崇史を思いやる気持ちなどなかった。ジェーンがこの先どのような思いをするだとか、崇史が自分がたてた噂によって随分と傷付いたといった事実については何も感じる事はなかった。結局のところ、他人を思いやる気持ち抜きには親友を作れないということも李はまだ知らない。

第11章

トニーは崇史が帰ってくるのを待ち伏せしていた。崇史がフラットに戻ってくると、彼を脅かすかのように突然飛び出し、にたにたした顔を急に深刻そうな顔に変えて、「タカシ、久しぶり。聞いたよ。今、カッコいい男性と付き合っているんだってね。羨ましい限りだよ。それはそうと、ジェーンについて大変な情報があるんだ」「君も何があつたか知りたいかい」と言った。

崇史は李の無理に作ったかのような深刻な表情の中に意地悪くジェーンに関する何かを楽しんでいる気持ちがあるのを見逃さなかった。「悪いけど、僕は興味ないよ。何かあつたらジェーンから直接聞くよ」

李はその答えを聞いて慌てて崇史の手を引っ張って、フラットの中に入ろうとするのを遮った。そして、強引に木陰まで彼を連れて行き「ジャックが知らない女性とキスしていたのを見たんだ」と一気に言った。李はより衝撃的な話に聞こえるようにキスをしていたと嘘をついた。崇史は一瞬驚いたが、すぐに話をそらした。「そういえば、君はなんだか魅力的だよ。随分と痩せたんじゃない？それと、僕のこと心配してくれてたそうじゃないか、ジェーンから聞いたよ。ありがとう」彼はジェーンの噂話を李とする事に嫌悪感を抱いた。なぜなら、それはほんの少し前に自分が経験した悲劇とあまりにも合致するからだ。でも、今聞いた話が真実だったら僕はどうすればいいのだろう。きつとジェーンは凄く傷付くに違いない。「その話はジェーンには言わない方がいいよ。僕も聞かなかつたことにするよ」李はむっとして「君はなんて冷たい男なんだろう。ジェーンが心配じゃないのかい。僕たちで何とか彼女を救えるよ」と大声で言った。「本当にジェーンが僕の助けが必要な場合、僕はなん

だつてするよ。でも、まだ今はその時じゃないんだ」と反論を許さない口調で崇史は真剣な眼差しで李に言った。李は崇史を鼻であしらひ、急ぎ足でその場を離れた。

崇史はジェーンを気の毒に思ったが、僕は本当に彼女を救う為に何でもできるだろうかと自分を疑った。なぜ、これほどまでに李の提案を拒絶したのだろう。李が言ったように僕は彼女を心配していないのかもしれない。ただ、この類いの話、すなわち不特定の人物と交際関係を持つといったような話を聞くそのものが嫌なだけかもしれない。でも、李の話が事実だとして僕にいったい何ができるだろう。ジェーンに助言することが彼女にとつていいとはとても思えない。それとも、ジャックに警告する？そんなことしたところで愛が冷めるはずもない。もしかして、ジェーンが秘密に気が付くまでに彼らの関係が自然消滅するかもしれない。それに、今まで一度だつて李の話が本当であつたためしがない。きつとそつだ。彼は自分が注目されたいだけなんだ。崇史は自分の都合の良いように李が嘘をついているに違いないと自分を納得させた。

李は自分の試みが完全に打ち砕かれた事にむしゃくしゃしていた。克也がなぜ崇史を気に入らないかが分かつたような気がした。あいつは普通と違うんだ。物事の考え方が少しずれているんだ。だから彼の周りにはいつもいらさせられる。それに聖人ぶつている態度が許せない。今にきつとあいつを後悔させてやる。李は間もなくジェーンに真実を通告する決意をした。彼女を破滅させてやる。きつとタカシは後悔するであろう。なぜもつと真剣に僕の話に耳を傾けなかつたんだろうと。そして、彼は聖人でなかつたと気が付くんだ。聖人ぶつた悪魔だとね。彼は意地悪くにやついた。彼はより確実にする為、ジャックと名前の知らない女性について調べる事にした。そして、まず「ジェーン、久しぶり。ちょっと気になる事があつて。最近、ちゃんとジャックと会つてる？」と意味ありげ

なメールを送った。

ウイリアムと出会い、過ごした日々が遙か遠い過去の出来事のように思える。時折ふとした拍子に彼との思い出の断片が脳裏をよぎることはあるのだが、それは悲しみや恐怖とは全く別のものであった。その感情とはなぜ自分がそれ程に極端な行動に出てしまったのかという反省と、物思いに耽っていた頃の自分のあまりに幼すぎる精神状態を恥ずかしく思う気持ちであった。

だが、その感情をも今の幸せな気分が完全に凌駕していた。そして、あの時に比べ、今の自分は比較にならない程に精神が成長、成熟し、充実していると、崇史は、鼻歌を歌いながら自動車を修理しているブラッドリーを見て何度もそう思った。

この今自分が感じている幸せなるものは以前待ち望んでいたものとは違っていた。ブラッドリーは決して白馬の王子様にはなり得なかった。彼の思考範囲は自分のそれと重なり合い十分に理解できるものだった。何か雲の上の超越した神秘的な存在ではなくて、彼は明らかに地上の人間であった。だがこれこそが自分にとって必要なものであることを今の崇史は強く理解していた。本当に価値ある人間とはブラッドリーのような人物なのだ。もしも、ウイリアムと出会わなかったら、今程にはブラッドリーの素晴らしさに気付かされなかったかもしれない。

そして、崇史は容易にブラッドリーとの未来像を想像できた。それは実現不可能な夢とは違って、限りなく手の届く範囲のもののように思えた。実際、今の彼の脳裏にある未来のイメージとは、大きな庭付きの家にブラッドリーと共に仲良く過ごしている自分の姿であった。それは、スポットライトに照らされ、世界中の人民に注目され、羨望と嫉妬の眼差しで見られている、まるでハリウッド俳優

やスーパーモデルになった架空の自分の姿とは全く別者だった。以前の崇史は、空想の世界ですらその功績は決して自分で成り上がったストーリーではなかった。そこには、必ず何かあり得ない偶然、何億分の一の幸運が自分に降りそそぎ、第三者（それは必ずハンサムで美しい人物であった）によって作り上げられた自分であった。だが、今の崇史は、そして、今後の彼は何より自分自身が主体となつて作り上げる姿である。ただ現在の崇史はまだ計画のほんの入り口にいるにすぎなかったが。それでも、家の庭は着実に崇史が思い描くような花園に変貌しつつあったし、室内も少しずつ彼の趣味へと変えられていった。そんな平凡な歩み、それはこれから永く続くブラッドリーとの未来の大きな第一歩のように思えた。

彼らは修理を終えた自動車に乗って、週末の郊外へ買い物に出かけた。すでに、ブルーウォーター（大型ショッピングセンター）は人々でごった返していた。彼らは食品を一つ一つ手に取り相談しながら、今晚の夕食の食材をかごの中に入れていた。その後、花屋では別に買うわけでもないのに気に入った花の苗を手にとって「どこどこに植えたらどうか」と相談した。結局、買う予定がなかったのに彼らはヨーロッパアンティークとジュリアンを三鉢も買ってしまった。この大きなショッピングセンターを端から端まで軽いとは言えない荷物を持って、商品を眺め財布と相談しながら何時間も過ぎた。全ての買い物が終わった後、昼食を食べにイタリアンレストランに入った。崇史はあまりおいしいとは言えないのに周りの人々は満足げな顔をしていると思った。「こんな食事に十五ポンドも払うなんてイギリス人はどうかしているよ」外食をする度に彼は他の外国人がするようにそうイギリス人を馬鹿にした。実際は以前のイギリスとは違って容易に美食にありつけるにも関わらず、彼の頭は過去の通念に支配され続けていた。昼食後、彼らは映画を見た。食事をしたすぐ後だというのに、ブラッドリーはビッグサイズのポップコーンとコカコーラを買った。崇史はそれを見て、驚き呆れる

一方で、自分がイメージする欧米人像に合致していたので「やつぱりな」と満足の笑みを浮かべた。

このどこの家庭にもあり、どこにでもある光景の中の、このひと時がこんなにも楽しみを感じるなんて。崇史は自分があまりに満足しているので立ち止まって周囲を見渡した。彼のすぐ脇には無数の人々が行き来している。家族連れ、カップル、それに老夫婦、友人仲間であろう若者のグループ。どの顔も自分と同じ顔をしているではないか。彼はその事実衝撃を受けた。この何でもない感情を自分は忘れていたのだ。いやいや、味わった事すらなかったのだ。だが、僕はついにそれを手に入れたのだ。

車の中で、トイレに行ったブラッドリーを待っているとソフトクリームを持って彼は戻って来た。ブラッドリーはとっても美味しそうにそれを舐めている。とってもセクシーに長い舌を使って。その姿はなぜかあまりにも輝いて見えた。どうして、どうして!!!彼そして、その他大勢の彼ら。どうして皆そんな素敵な笑顔をしているのだろう。一秒一秒ごとに感動を刻み込んでいるような姿。それに、四十代くらいの移民であろうか英語がうまく話せないウエイトレス。崇史は昼食をとったイタリアンレストランにいたウエイトレスを思い出した。忙しく働いている彼女にも輝くオーラに包まれているかのように見えた。もしかして、今の彼女の頭の中には、彼女の子供達が懸命に勉強している姿があるのかもしれない。そう、彼女は家族の為にこの異国の地で、大きな言葉のハンディキャップをもつものともせずに頑張っているに違いない。崇史は勝手にそう決めつけた。イングリッシュスクールの友人は大きくはない一部屋に四名で暮らしている。だが、彼の目の輝きは自分のものとは比較にならないほど誇りに輝いていた。崇史の驚きは膨らんでいった。何が彼らの原動力なのだろう。どうして僕はそれを今まで見過ごしてきたのか。すぐ目の前に幸せのもととなるものが転がっているというの

に、自分は気が付かなかった。その時の自分には決して届きそうもない夢ばかりを空想していた。それなのに、実現の為に何一つ動こうとしなかった。

彼らは帰宅後、早速先程購入した花々を庭に植えた。また一つ家に命が増えエネルギーが満たされる。崇史は植えたばかりの花々を見て微笑んだ。

その後、崇史は今日発見した感動の源をノートに書き留めた。そうしなければ、せつかく見つけた大切な心の動きを忘れてしまいそうで怖かった。だが、それは一言ではとても表現できそうになかった。彼は感動したシーン、そして、彼なりの考えを何行にも箇条書きにし、そして、繰り返しそれを読んだ。その大急ぎで脳裏に思いつくままに書かれた文章ではとても今日の感動を表しきれていないとは思ったけれども、決して忘れないように何度も心の中でその感動を思い出して、心に記憶させた。

ブラッドリーはさかんに崇史に自分の家に住むように勧めた。崇史もぜひそうしたかったし、ここ最近の週の三日は彼の家に泊まっている。フラットとの往復にも時間がかかるし、交通費もばかにならない。ただ、彼はどうしてもフラットを離れられなかった。というのはルーカスがあと一ヶ月あまりで彼の故郷プラハに帰るからだ。親友である崇史はぜひとも最後まで彼とともに暮らしたかった。それに、直前にフラットを出て行くなんてそんな非道なこととはしたくない。ルーカスは崇史にとって初めてのヨーロッパ人の友人であった。あまりにも遠い存在であったヨーロッパ人の存在を身近に変えてくれた。あれ程に大きな壁があるように思えたのが、実際話をしてみたり、関係をもったりすると価値観や考え方に日本とヨーロッパとはそれほどの大きな違いは存在しなかった。思想の根底概念は同じとは言えないまでも近いと思った。何年も前に自分探しに行っ

たインドや中国で感じたようなカルチャーショックは受けなかった。

ルーカスはロンドンを離れるのを悲しむどころか帰国するのが待ち遠しそうであった。彼によるとロンドンには全く未練がないそうだ。崇史が彼と別れるのを辛く悲しんでいる時でさえ、彼の顔からは微笑が消えなかった。それどころか崇史の悲嘆の表情に満足さえ感じているようであった。ルーカスはそれによって、自分の存在価値を再認識しているのかもしれない。彼から何百回と聞かされたお国自慢、それに彼の帰国の喜びの表情からどんなにチェコ共和国が素晴らしいのだろうと思った。そして、会話の度事にルーカスは崇史を自分の故郷に招待すると言った。「どうしても、素晴らしい俺の国を見せたいんだよ」心からそう思っているようであった。崇史は「本当に行きますよ」と返事をした。間違いなく行くであろう。彼らには日本人に対してするような変な遠慮は必要ない。本来に来て欲しいから誘ったのであって、礼儀や建前からの発言ではない。ここでは、日本独特の複雑な詮索は不要だ。それに、ルーカスのように誠実でやさしい人物を生んだ国だからきつと素晴らしい所に違いない。それでも、少し不安が残ったので、崇史は「僕は必ず君の故郷に遊びに行くよ。ホントにそれで良いんだね？」と念を押した。

国の印象は出会った人によって大きく左右されるものだ。その証拠にウイリアムとの事があって以来、崇史は、イギリス人は冷淡な国民であると決めつけていた。イギリスに対して憎しみさえ抱いた。なんて言っただって、イラク戦争を支持した国ですもの、ひどく凶暴な国だことと言った風に。彼は日本もイラク戦争を支持していた事を都合よく忘れた。僕達国民は支持していないのですからと言いつつ。それが、ブラッドリーと出会った後はまるで別の印象、英国民はとても暖かく親切な国と感動さえしてしまう崇史であった。そう思うと見えるもの全てがそのように見え、それを裏付ける様々な

証拠すら列挙できるのである。例えば難民を受け入れる姿勢、死刑がない法律であったり、たくさんのチャリティーショップであったりする。

崇史はルーカスが強く自分の国に対して誇りを持っているのを新鮮に感じ、また羨ましくも思った。日本にはあまり見られない種類の感情だ。日本ではそれは禁忌とは言えないまでも強い愛国心を持つととしない人が多い。特に直接教えられている訳ではないが、日本は何か自信なさげだ。「どうして？」ルーカスは疑問に感じ、訳が分からないよと言った風に、崇史に質問を投げかけた。「日本は経済大国でG8の一員ではないのか。あと数多くの世界企業作り上げたじゃないか」彼はいくつもの日本企業の名前を上げた。それに、大戦での功績までも。韓国や中国が持つ日本に対する印象と同じように、彼のドイツに対しての印象は良くなかった。それにも関わらず、日本の戦争史は彼ら欧州人には遠い存在であるようだ。でも、崇史はそれを今まで誇りに思った事もなかったし、誇れる対象になりえるとも思わなかった。また別の国のクラスメイトの女性は日本に対しては美しい自然を思い描いていた。崇史はやはりそれも誇りには思えなかった。

崇史は改めて日本について考えてみた。確かに日本には素晴らしい所がたくさんあるように思える。でも、やはりマイナスな事柄がたくさん頭に浮かぶ。逆に、もしも自国に対して強い誇りを持っているならば京都や奈良の町並みがここまで破壊されることはなかったかもしれない。それに、日本の各地でどんどん美しい自然が姿を消している。破壊された自然と不揃いな町並み、そして計画性のない日本の未来像。これが答えですよ。彼は重い溜息をついた。

崇史はいろいろ考えながら、分厚い使い古されたノートを閉じた。

「誇りか」「一人一人が誇りを持つと何かが変わるかもね」と一人呟いた。窓から庭を覗くと、ブラッドリーが鼻歌を歌いながら草木に水をやっている。彼は今朝からずっとご機嫌であった。

李とジェーンはスターバックスのテーブルに向かい合って座っていた。ジェーンの顔は沈みがちで元気がなかった。「トニー、重要な話があるってなんなの」彼女は李が何を話そうとしているのか察しがついたが、恐る恐るそして自分が疑っている事が間違っていないようにと祈るような気持ちでそう言った。「実はジェーンに言うて良いものかどうかわ分迷ったんだけど。本当に聞きたい？」李はうつすらと涙を浮かべながら小さな声で確認した。ジェーンは頷いた。「僕、ジャックと知らない女性がキスしていたのを見たんだ」彼女はそれを聞いても驚きはしなかったが、自分がなんとなく感づいていた事が裏付けられたようで谷底へ突き落とされたかのような気分であった。彼女はしばらく何も言えなかった。どう答えていいのか分からなかった。ジェーンは泣いてしまいそうなのを必死に堪えて「やっぱりそうだったんだ。うすうす気が付いてはいたんだけど、でももういいわ」と言った。彼女の頬を一筋の涙がしたたり落ちた。トニーは彼女の手を強く握って、彼女の背中を摩った。「僕にできることは何でも言つてよ」李は彼女の涙を見て、そして彼女にやさしい言葉をかけることによって、彼の気持ちは高揚した。なんとか彼女を救ってあげなければ、ジェーンの本当の友人はタカシではなく僕だ。信じられない事だが、李は自分がジェーンを奈落の底に突き落とした事実を忘れていた。彼は今、心から彼女の親友を演じていた。

李はジェーンが落ち着くようにと、席を外しトイレに向かった。少しの間、そっとしてあげようと。彼はジェーンを傷つけたジャックが許せなかった。そしてどうしてこのような事態になってしまったのだろうと怒りが込み上げてきた。だが、すぐに自分がその原因

であるのを思い出した。そう言えば、僕が彼女に死刑を宣告したよ
うなものだ。ジャックがキスしていたなんてちよつと言いすぎたか
な。彼は一瞬後悔したが、自分が二役を演じていたのを思い出して、
なんだかおかしく声を上げて笑った。座席に戻る間、彼の顔からは
真剣な表情は消えていた。もう、先程のやさしさや、ジャックに対
する怒りは完全に消えていた。それより、自分がおかしかったのと、
ジェーンの悲劇をかわいそうに思いながらもそれを楽しんでいる
自分がいるのがまたおかしかった。

座席に戻るとジェーンはもうそこにはいなかった。李は再び、ち
よつと言いすぎたかなと後悔したが、彼女だって以前さんざん僕を
馬鹿にしたんだからと、自分を正当化した。当然の報いなんだ、彼
女は懺悔しないと。僕が気が付いていないと思ったら大間違いだ。
彼の心情は次々に変化していった。

ジェーンはとぼとぼ歩きながらやつぱりそうだったんだと思っ
た。それでもまだ彼女はジャックを信じていた。その根拠は？なぜ
なら今日ジャックと会う約束を昨日メールでかわしたばかりだから
だ。若干以前より冷淡になったように感じるのは確かだが、きつと
まだ彼は私を愛してくれているはずだ。そう思うと今から会いに行
くのが楽しくなった。彼女は約束の時間に間に合うように急ぎ足で
彼の住む大学の寮に向かった。それは大英博物館のすぐ側にあった。
ジェーンは近くまで来ると門の所まで迎えにきてくれるように電話
した。だが、携帯電話は繋がらなかった。彼女は不安にかられなが
らも再度電話をかけてみた。結果はやはり同じであった。寮の門に
つくといつもは閉じられている門が今日は開けられていた。きつと
誰かが閉め忘れたに違いない。そして、驚いた事に、彼の寮の玄関
の扉も閉じられていなかった。その為彼女は容易に彼の部屋の前ま
でたどり着いた。ジェーンは恐る恐る部屋の扉をノックした。何度
ノックしても応答はなかった。今まで一度も彼は約束を破った事は

なかつたし、電話が繋がらない事もなかつた。彼女はつい先程李から聞いた話を思い出し急に不安にかられた。もしかして、彼は部屋の中にいるのかも。それも私の知らない誰かと。彼女は絶対に扉を開けてみせると強く思った。ジエーンは管理人の部屋に行き、とても心配そうな顔でジャックと会う約束をしていた事、応答がないので何か起こったのかもしれないと事情を話した。そして、管理人は彼女に外で待つように言い、ジャックの部屋の中を確認した。「安心して下さい。彼は部屋にはいませんよ」ジエーンは彼の言葉を聞いても全く安心などできなかった。彼女はそのままジャックが帰ってくるのを待とうとすら思ったが管理人が自分を不審そうな目で見ているのに気が付いた。彼女は慌ててその場を去った。

ジエーンは執拗に何度も繰り返しジャックに電話した。だが全く繋がらなかった。落ち着く事ができず彼女はウエストエンドに何をすることもなく向かった。まるでそこに行けばジャックに会えるかのように。そして、絶対に彼を見つけてみせると強く思った。その間にも何度も電話をかけた。その時、突然電話が繋がった。そして、電話はとられた。だが、もう次に瞬間には電話はきられた。ジエーンは再度急いで電話をかけ直したが、再び電話は繋がらなくなっていた。ジエーンの頭の中には様々なシーンが駆け巡っていた。ジャックは私を避けようとしているのかしら。それとも、彼の側にいる知らない女性が彼が電話に出るのを拒んでいるのか。そのような想像が彼女をますます不安にさせいららさせた。ジエーンは十分後に再びジャックに電話をした。今度は電話が繋がった。だが、その電話はとられることはなかった。再び電話をかけるとまた電話は繋がらなくなっていた。彼女の怒りは頂点に達した。まるで自分が弄ばれているかのように思えた。

今のいらいらしたやり場のない気持ちをなんとかしたかった。彼女の不安な気持ち、そしてジャックに対する怒りは彼女を苦しませ

た。ともするとジャックを待ち伏せしようかとも思ってしまったのである。これが女性達をストーカーへと変貌させるなんともやりやうがない気持ちなのかしら。もし、ジャックが私に対して愛が冷めたのならはつきりそう言ってくればこのような気持ちにはならなかったのに。それなのにこんな事をするから、私はますます不安になるのだ。彼女はウエストエンドから再びジャックの寮の近くに戻り大英博物館の周りをぐるぐると歩き続けた。ジェーンはこの先どうすればいいのか全く分からなかった。

どうしようもなく、再度電話すると、思いがけず電話はとられた。「なんで、ずっと電話にでくれなかったの？私はずっとあなたを待っていたのよ」と怒鳴りつけた。「ごめん、電源が切れてしまつて。今、充電しているとこなんだ。また、電池がなくなつてしまつから、すぐにきらないと」彼女はそれには答えず暫く沈黙が続いた。「今、僕はオックスフォードの友人の所にいるんだ。彼にどうしても会いたいと執拗にお願いされて。どうしても断りきれなかったんだ」ジェーンは彼の言葉が信じられなかった。「だったら、そうと連絡してくれなきゃ、それに昨日のメールであなたは私に今日会おうと言つたのにそれはどういうこと」「ごめん、でも俺は今朝会えない旨のメールしたけど」「メールなんて届いていないよ。それにどう考えても突然私の承諾なくキャンセルするなんておかしいでしょ」ときつい口調で怒鳴つた。通行人が驚いて自分を見ていた。だが、そんな事はどうでもよかつた。「私は今寮の側にいるから、今すぐに会いに来て。そうでなきゃ許さないから」ジャックが何か言おうとすると「早く来て。今日の事謝りなさい」「謝りなさいよ」ジャックは大きな溜め息とともに「ごめん、俺が悪かつたよ。でも今からロンドンに向かうのは無理だよ。じゃ電話きるから」電話が切られる直前、ジャックの背後から女性の笑い声が聞こえたような気がした。ジェーンはむなしく一人取り残された。ジャックと話せたことで安心するどころかますます不安になり、怒りが増幅した。

この日それから何度電話しようかと電話が繋がる事はなかった。ジエーンは怒りのままにとても長いメールを書きジャックに送信した。彼女は全く彼の言った言葉が信じられなかった。彼がオックスフォードの友人の所にいるなんてあり得ない。彼女は何時間もジャックが帰ってくるのを待った。時計の針が深夜の一時を指した。ジエーンはくやししく、悲しく、そしてむなしくずたずたになりながらその場を離れ、バスを待った。ちょうど自分が乗るバスが到着しようしたその時、向かいに停車したバスからジャックが降りてくるのが見えた。それを見て、ジエーンは大声で「ジャック」と怒鳴った。彼女は道路を横切り彼のもとに突進した。そして、ジエーンは思いつきり驚き立ちすくんでいるジャックの頬をぶった。

ジャックは呆然とし、暫くの間、俯いたまま何も話す事ができなかった。寮に戻ってくる学生達がおかしそうにその光景を眺めていた。

ジエーンはジャックの携帯をひったくり、通信記録を確認し、女性に電話をかけ繋がるとジャックに携帯電話を返し、「早く、別れて。早く別れるって言いなさい」「早くしなさい」彼女の声は周辺に響き渡った。既に、観衆は膨れ上がっていた。皆、事の成り行きを眺めている。ジャックは恐怖のあまり何もできなかったが、ぼそぼそと消えそうな声で「別れて欲しい」と電話の相手に言った。

ジエーンは再度電話をひったくり「聞こえた？ジャックはあなたと別れたいそうよ。二度と彼に近付かないで」「そういうと彼女は携帯電話を道路に叩き付けそれは無惨に壊れた。

ジャックはパニックになりそうだった。そして、ジエーンに恐怖した。ジャックは大声で「何をするんだ」と怒鳴った。「今夜の君

はむちゃくちやだよ」

ジェーンは鬼のような形相で「私が？何言っているの？あなたが悪いのよ。あなたが約束を破るから。あまりにもひどすぎる。卑怯だよ。私は絶対にあなたと別れないから」そう言い捨てると彼女は一度も振り返らずにバスに乗り込んだ。

一人取り残されたジャックはなんとか落ち着こうとバス停のベンチに座り込み頭を抱えた。そして、無惨に飛び散った携帯電話の残骸からSIMカードを取り出し、側にいた男性から携帯電話を借りそれに自分のSIMカードをはめ込んだ。その後すぐに、***に電話をし、彼女を慰め、謝罪した。ジャックは思うのである、例えば今***と別れたとしても、今日のようなジェーンを見た以上もう二度と彼女を愛せないと。あんな異常なジェーンを想像すらできなかった。俺は堂々とジェーンと別れてみせる。今日の事でジェーンと別れる事を正当化できるのではないか。俺には権利がある。

ジャックは自分の釈然としない曖昧な態度が彼女をそこまで追い込み、今晚のような異常な行動をさせてしまったとは考えもしなかった。彼は彼女を傷つけないから彼女自身で気が付くように少しずつ冷淡な態度をとっていたのだ。それでもいつこうに俺から別れようとしな、即ちあまりにも鈍感であるから、今日は突然彼女に無断でデートをキャンセルしたんだ。さすがに、ジェーンも気が付くかと思っただけだ。

彼は少しも悪びれる事なくいかにしてスムーズに別れられるかを思案した。

ドンドンドンドン、ドンドンドンドン。

夜の十二時を過ぎた頃、ドアを激しくたたき音でセックスは中断された。ブラッドリーは慌ててガウンを羽織り、階下へ降りて行った。

なぜ来客はベルを鳴らさないのでしょうか。いったい何事だろう。その間にもドアは鳴り響いている。崇史はぞつとした恐怖を覚えた。もし何かあればすぐに警察を、救急車を呼ばなければ。彼も急いで服を着ながら携帯電話を持ちイギリスの緊急時の電話番号を思い出していた。

突然ドアをたたき音が止み、それと同時になにやら東南アジア訛の英語の叫び声が聞こえた。声のトーンはとても高く若い。崇史は一層怖くなって足音をたてないように階下へ降りて行った。彼の頭の中はホラー映画さながらであった。今までロンドンを危険な都市だとは思わなかった。だが、この瞬間、彼が何度も聞かされて来た恐怖、それはニューヨークやロサンゼルスでの凶悪事件を思い出した。そして、もしかしてウイリアム一味かも、そう思うと彼は恐怖で立ちすくんだ。

だが、崇史の目に写った映像は恐怖ではなく悲しい冷たい映像で、彼はブラッドリーの前に立っている青年から目が離せなかった。彼（青年N）は紛れもなく数ヶ月前、ウイリアムのフラットの玄関に立っていた自分そのものであった。Nは限りなく深い悲しげな顔を、絶望のもうこれより他の選択肢がない程の張りつめた様子で、ナイフの先をブラッドリーに向けていた。崇史には、彼は決してブラッドリーを刺せないことは分かっていた。なぜか崇史はブラッドリーよりもその男の子を助けてあげなければという思い、彼への同情の方がまず先に沸き上がった。

青年とは対照的にブラッドリーは怯えた様子もなく落ち着いた調子で、

「何度も説明した通り、俺はもう君を愛せないよ。俺達は無理なんだ」と冷たく言い放った。

それを聞いて青年は発狂し震える声で、

「どうしてですか、僕はまだあなたを愛しています。あなたの意見は受け入れられないです」と叫んだ。

崇史は同情した。何かその男の子がとつてもかわいそうになった。それと同時にブラッドリーに対する不信が込み上げてきた。崇史はなおもその子から目が離せなかった。青年Nは崇史がようやく視界に入ったかのようで、視線が合った時、一瞬たじろいだ。だが、次の瞬間、彼は大声で叫びながらナイフを持って崇史に向かって突進していた。階段の中央で様子を伺っていた崇史は、反射的にそれを避けた。だが、その鋭い刃は彼の腕をかすり、血が服に滲んだ。

あつげにとられ、ブラッドリーは何もできなかった。彼は初めて崇史が一部始終を見ていたのに気が付いて、先程までの冷静さはどこかに消え、彼はすっかり慌てふためいていた。ブラッドリーは崇史を助け起こして包帯を腕に巻いた。幸いにも怪我は軽傷（かすり傷）であった。崇史はその間中敵意のこもった目でブラッドリーを睨めつけていた。だが、彼はそれには気が付かず、目を合わそうともしなかった。彼の態度はどこか他人行儀でそっけなく、「さあ、これで大丈夫だよ。君はもう寝室に戻ってなさい」と、ブラッドリーは有無を言わさぬ断固たる口調で命令した。

崇史はその語調が癢に障った。まだ、何も説明されていないし、

このままではとても戻れない。ブラッドリーのパートナーである自分が話し合いに参加できないなんて全くもって理解できない。崇史はいらいらと足音を立てながら二階へ上がって行った。部屋の片隅では青年Nは自分のした事に怯え、震えていた。

崇史は夜遅くまで眠りにつく事ができなかった。階下ではまだ口論が続き、そして青年のすすり泣く声が聞こえた。彼の声は鈴のように美しいアクセントで、その響きがさらに悲しみを増幅していた。その鈴のような青年の英語を聞きながら崇史はようやく眠りについた。だがその睡眠はわずかの間で、再び叫び声で目が冷めた。いたい彼らの間で何が起きているのだろう。つい先程までは突然の出来事で彼の思考は麻痺し、正常に機能していなかった。だが、ほんの短い睡眠ではあったが彼の脳は再び活発に蘇った。何かとつても憂鬱な出来事が進行しているのではないか。それは今後の自分にも大きな影響を及ぼすに違いない。崇史はベッドの上で足をかがめて物思いに耽った。そもそも青年Nのあの深刻な表情、その原因は何なのだろう。もしかして、自分も数ヶ月後にはそうになっていたかもしれない。僕はまた悲しみの餌食というのか？いやいやそれはあり得ない。ブラッドリーはウイリアムとは別種類の人間だ。

崇史はいらいらした。それは自分の運命に対してであった。どうしてこうもうまくいかないのか！！今日、僕は大きな発見を、幸運のもととなる世紀的な発見をしたばかりではなかったか。それは手の届く所、あるいはもう自分のものになったのも同然であった。だが、またしてもそれは僕から離れようとするのか。

崇史は自分の人生の展開に対して、むかつき激しい怒りを憶えた。だが、彼の記憶は徐々に薄れていき、いつしか深い眠りについた。

どれくらい眠ったのであろうか。崇史は目が覚めるとベッドの上

に座ったままの姿勢であった。どうゆうわけか自分の横にブラッドリーいなかった。いつも朝が弱く寝坊しているのに。今日は何かあったのかなと思えば微笑んだ。彼はすっかり昨晚の事を忘れていたのだ。それは単なる悪夢として脳裏で処理されていた。

だが、腕に痛みを感じ見てみると、包帯が巻かれてあった。

崇史は突然、胸騒ぎがして、同時に昨夜の全ての記憶が蘇った。それは何とも言えない悲しい感情が伴っていた。彼は心配になって恐る恐る、（彼の脳裏には必死に打ち消そうとしながらも、血が飛び散っているような凄惨な場面が表れていた）、階段を降りると、青年Nとブラッドリーが抱き合って眠っていた。崇史はあつけにとられた。全く予想だにしない映像が目の前にあった。崇史は何か見たいいけないものを見てしまったかのように、びっくりしてドアを閉めた。何が何だか訳が分からなくなって二階に戻って、ベッドの上につつ伏せになった。あそこであの二人は何をしていたというのだろう。あの映像は何を意味するのか。崇史は先程見た二人が抱き合ってソファアの上で眠っている姿を再度思い出した。彼が見たのは僅か一瞬で数秒ほどにしかならなかった。まず彼らは服を着ていたはずだ。それに彼らの表情は？詳しい内容はあまりの衝撃と動揺で思い出せなかった。たった今見た彼らの姿は「何度も説明した通り、俺はもう君を愛せないよ。俺達は無理なんだ」とブラッドリーが言った言葉と矛盾していると思った。あゝあの二人の関係はいつたいどうなっているのだろう。そう思うといかに自分がブラッドリーの過去に無関心であったかを思い知らされたような気がした。

崇史はこれ以上考える事を諦めた。もうストレスを抱え込むのはまっぴらである。彼は必死に青年Nとブラッドリーを憎む気持ちを打ち消そうとした。なぜなら僕はまだ事の真相を何も知らないのだから、判断しようがないではないか。そのように自分自身に言い聞

かせるも体は全く別の行動をとっていた。崇史は服装や日記、そして数冊のお気に入りの本をいらいと投げ入れるように鞆に詰め込み、ドアを力一杯叩き付けて肩を怒らせ家を出た。彼の耳元には扉が閉まる大きな音がいつまでも反響していた。ばかばかしかった。全てが、そして、自分自身に対しても馬鹿らしく思えた。いったい自分は何をやってきたのか。そして、その結果は？崇史はもうどうでも良かった。さっさとフラットに帰っていつも通りの生活に戻ろう。もうここには二度と戻って来ないであろう。さようなら。

ブラッドリーは焦っていた。目を覚ましたら自分の体に絡み付くようにNが眠っていた。その上、自分の体も無意識にNにぴったりと密着し、腕は強くNを抱きしめていた。最初ブラッドリーは自分が抱きしめているのは崇史であると錯覚した。だが、その体のライオンは大きく違っていた。

ブラッドリーは荒っぽくNを突き放し、崇史が眠っている二階へ駆け上った。だが、その部屋にはすでに彼の姿がなかった。ブラッドリーの体全身に悪寒が走った。何て事をしてしまったのか。直感でこれは取り返しのつかないことになるかもしれないと思った。

ブラッドリーは急いでベッドの脇にある電話をかけようと受話器を取るが、Nの手がそれを引き止めた。ブラッドリーは激しい怒りの籠った目でNを威嚇し、手を離すように無言で警告をした。だが、青年Nはあざ笑うかのように手を放し、一瞬ブラッドリーの口元が歪んだその時に電話線をちぎり噛み砕いた。『もう永遠に電話はかけられませんね』Nはそうして一階へ降りていった。ブラッドリーはその小柄なNに対して恐怖すら覚えた。何をしようにも彼の意思を曲げることはできない事は知っていた。もう耐えるより他、道はないのである。恐ろしい事に携帯電話は粉々に壊されていた。

以前に一度、ブラッドリーは怒りの爆発によりNを殴った事があった。その結果は？何も変わらなかった。それどころかNは不気味に微笑み、前よりも一層彼の異常な行為は増長するのであった。

ブラッドリーは何度もNに精神科に行く事を勧めた。一度一緒に行った事もあった。でも、彼の根本的な性格を変えることはどうしてもできなかった。どうして彼はこのような偏屈な性格を持ち合わせているのか。過去にいったい何が起こったというのか？或は家庭環境にでも問題があったのか？それとも、彼の性格・性質は先天的な生まれながらにして備わっているものなのだろうか？

詳しいNのバックグラウンドは何も知らない。でも、確かに彼の通常は他の一般男性と何も変わる事なく、いやそれ以上にやさしさに溢れ、素敵に輝いているのである。Nの魅力に引かれ何人も男性が過去に彼と付き合った。だが、どれ一つとして長続きはしなかった。ある時、突然彼らはNの奥底に秘められた得体の知れない説明のつかない性格を知るのである。

今回もいったいなぜ、Nは突然和やかな家庭に侵入し平和な環境を破壊するのであるのか。全くもって説明がつかない。Nはそれを見て楽しんでいるのか。彼には道徳なるものがないのか。

ブラッドリーはNと別れた後の恐怖の一ヶ月間を思い出してぞつとした。俺にはどうする事もできなかった。大柄な体をしたブラッドリーとほんの子供ほどの大きさのN、彼はまるでオオカミが野うさぎを恐れるかのように恐怖した。Nはいつもつきまとい、どこであろうと遠慮なく発狂した。彼のやさしげな顔と、鈴のような声はいつでも決まってブラッドリーを悪人に仕立て上げた。彼らを知らない人々はほとんど全員がNに同情を寄せた。彼はブラッドリーがいかにも悪い人物かを説明するまでもなく、勝利を手に入れるのだ。

そして、最後にはお決まりの自殺を演じる。一度なんて洗剤を飲み込んだことすらあった。そんな事をされると、もうどうにもこうにもしようがない。

Nの行為は明らかに嫌がらせてであった。いわゆるストーカーである。この恐怖は経験したものでなければ分らない。今、目前にいるNは華奢な弱々しい男の子である。この男の子をどうして怖がるのかと笑うかもしれない。だが、力の強弱では説明はつかないのである。悪い事に彼と付き合った事のない人はみな天使のように見えるNを信じ、あたかもブラッドリーを悪者のように決めつけてしまっているのである。

ではなぜブラッドリーは救われたのか。それは、Nに新たな恋人ができたからである。未来の被害者がブラッドリーの代わりとなった。大方Nはまた捨てられたのであろう。

ブラッドリーはまたもやその恐怖体験が繰り返されるのかと思うと、何ともやりきれなくなった。彼は前回もNの出現によって大切な交際相手と別れるはめになった。また今回も同じ事が起こるのであろうか。

ブラッドリーは嫌悪感と怒りと哀れみの混ざったような目でNを見つめた。

もうどうしようもできないのではないかと思うとブラッドリーは愕然とした。だが、どんなことがあっても崇史とは別れたくない。絶対に別れない。「よし」と気合いを入れるかのように立ち上がり対戦の相手であるNと話し合う為に、居間へと戻って行った。

第12章

ブラッドリーは辛抱強く青年Nを説得し続けていた。青年Nはそれを上の空で聞き、まるでこの家にずっと住んでいたかのように、冷蔵庫から食材を、棚から調味料を取り出し、たんたんと朝食を作っていた。それらの調味料はNがずっと以前に持ち込み何度も使用したものである。なべやフライパンからは香ばしい匂いがし、すっかりおなかを空かしたブラッドリーは怒りが吹き飛んでしまいそうであった。それを、Nはかわいらしくお皿に盛りつけをし、テーブルに運んだ。彼はじっと見つめているブラッドリーに手伝うように目で指示した。

いつもは崇史が座っている座席に青年Nが座っている。それも、はっと見とれてしまう程のかわいらしい微笑みでじっと俺の方を見ている。だが、ブラッドリーはそんな誘惑に負けてしまうような男ではなかった。彼はうんざりしたように大きな溜め息をつき、今すぐこの家から出て行くように声を張り上げた。それを完全に無視し朝食を食べ続けるNの胸ぐらを掴み強引に立たせ、引きずるようにして、外へ放り出した。ブラッドリーは急いで居間に戻り、Nの荷物を持って再び玄関に戻りそれを彼に投げつけた。そのとき、ブラッドリーは泣いていた。やさしい心の持ち主である彼にとって残酷な行為をするのはとてもつらいことなのである。

Nはもう泣いてはいなかった。全てを悟ったかのように「じゃ僕は諦めるよ。あなたなら僕の気持ちを分かってくれと思うたのに」「どんなにずたずたな気持ちであなたに会いに来たのかあなたは知らないだろうけどね。僕もあなたにカレシができたなんて知らなかったんだ」ぐつたりと肩をおろし悲しみに震えながら、あたりに散らばった荷物を拾い鞆に詰め込んでいる彼の姿はあまりにも不憫だ

った。

そして、「悲しいよ。もうどうしたらいいの」と大声で叫んだかと思うとわっと泣き出してしまった。その姿を見て、彼の決意は揺らぎそうであった。だが、彼はNを見捨てて家の中へ戻って行った。

Nの泣き声はいつまでも続くかのようにであった。ブラッドリーは大きな溜め息をつき立ち上がり、Nのもとに戻った。そして、やさしく彼の背中を摩ってあげた。Nは彼の胸の中でしゃくりながら何度も泣いていた。そして、Nは約束をした。「ブラッドリー、いつもごめんね。もうこれからは君には迷惑をかけないよ」「最後のお願いを聞いてくれないかな?」「最後にもう一度僕を抱いてほしいんだ。あなたに抱かれていると僕も必要な人間だって感じられるんだ。絶対にもうこれからは迷惑をかけないって約束するから。お願い」

ブラッドリーはそれを聞いて驚いた。でも、Nの目は本気だった。それに、彼に約束を提案されたのは初めてだ。彼はNを信じようと思ったし、彼をそのままに放っておくのはあまりにもかわいそうであった。ブラッドリーはやさしく頷き、手をつかんで彼を立たせ二人は寝室へと向かって行った。

崇史は自分に安らぎを与え続けたブラッドリーとの間に、昨晚のような事件が起ころうとは夢にも思っていなかった。なぜ?何度も繰り返し昨日の数時間の出来事、そして、今朝見た衝撃的なシーンについて考えた。彼を非難したい気持ちが強くなる一方で、自分の行動に何かまずいところがあったのではないかという後悔の念が結局は最後に残った。

そして、崇史は何も言わず家を飛び出して来た事に動揺した。も

つとやるべき事があつたのでは。それに、後先の事を考えずに突発的に行動するのが、そもそも全ての失敗の原因ではなかったか。「あゝ、どうすれば良かったのだらう」彼は溜息をついた。僕の知識、経験は何も教えてはくれない。そうはいつても、もう元には戻れないのだけれども。

彼はもう一度隅々まで思い出し、ブラッドリーと名前も知らない東南アジア系の男の子の事を考えた。

まず宗史が最初に最も強く印象に残つたのはその青年Nである。彼の容姿は自分よりも遥かに魅力的であつた。褐色の肌に真っ黒な髪、それに整つた大きく真っ白な歯並び。彼は客観的に見て完璧な程にかわいかつた。みずみずしい唇、大きな瞳、何より鈴の音のような彼の英語。はつと立ち止まつて見とれてしまふ衝撃！！宗史は溜息をついてグラスに映る自分の顔を見た。「完敗」彼はそう呟いた。

宗史はあの青年の際迫つた声の響きを考えると、いったいブラッドリーと彼の間は何が起こつたのかという疑問と、ブラッドリーに対する疑い深い気持ちは何度も沸き上がってくるのだ。青年Nの声、それはただ事ではない声のトーンであつた。彼の興奮した、それでいて悲しげで絶望的な声はどうしても耳について離れなかつた。僕は何も知らなかつたし、何も知らされていなかつた。今、自分が持ち合わせているブラッドリー本人から聞かされていた話からは、何事も推測できはしない。それは不公平ではないか、僕は全てを告白したのに。もちろん、自分も交際の最初の段階で秘密を持っていたのは事実である。だが、今、僕は彼に対して何の隠し事もしていない。彼と青年Nとの間には、僕とウイリアムのように何か暗い残酷な過去でもあるのであろうか。例えそうだとしても、ブラッドリーは僕の過去を全て知つた上でも、なお受け入れてくれたではないか。

ブラッドリーは何も僕から強引に問いただしはしなかった。もし偶然の機会がなければ、僕はずっとウィリアムとの事を隠していたかもしれない。崇史はこのように何度も煩悶した。あまりにもブラッドリーについて、知らない事がたくさんある事に、今彼は愕然としていた。ブラッドリーに対する知識の少なさからどうにも正確な推測ができないのである。それは腹立たしくもあり、また想像をより悲観的なものにしていくのであった。そして、崇史はブラッドリーの中に自分の知らない部分（隠された秘密）がまだまだたくさんあるのかもしれないと考えてしまい、とても恐ろしい気分になるのであった。

何より彼を驚かせ悩ませたのは、ブラッドリーの本性である。青年Nの目は真剣であった。そこには嘘はなかった。そして、ブラッドリーの無言の弁解。Nはナイフを持ちながら必死にまだブラッドリーを愛していますと言ったではないか。それらから考えてみるとブラッドリーにも邪悪な一面があるかもしれない。彼はいかにして青年Nの心を傷つけたのだろう。もしかして、これから先、自分もあの青年と同じような境遇に立たされないと限らない。

でも、でもである。この数ヶ月間、ブラッドリーには何も疑わしい点はなかった。彼は純粹そのものであった。彼は僕を慈しんでくれたではないか。それは今まで決して経験した事のないやさしさであったはずだ。自分が得た彼のやさしさから考えるとブラッドリーは青年Nを無慈悲に放ってはおけないような気がする。だからブラッドリーは仕方なしにNを介抱しているだけなのだ。彼にはNに対する真の愛などあるはずがない。崇史はブラッドリーが冷たく「もう愛せない」と言い放った言葉を思い出した。この異常な事態が収まれば必ず元の平穏な生活が戻ってくるはずだ。そうであるならば、僕はいつたい何をそんなに恐れているのか。もしも、万が一（あり得ないが）ブラッドリーとは別れなければならぬ運命なの

かもしれないが、それがどうしたというのであるうか。崇史は無理に強かった。だがすぐ次の瞬間には別の感情が現れてきた。仮にブラッドリーがNを放っておいて僕を選択したとしても、僕はNのあまりに悲劇的な悲しみの顔（それは自分がまさしくウイリアムに見せた表情そのものである）を見た以上、決して今までと同じようにブラッドリーを見られないかもしれない。僕は他人の不幸の上で幸せになるうとは思わない。それに、ブラッドリーが真に天使であるという保証はどこにもないのだから。

いったいどこに真実があるのだろう。一人でいくら考えても、ますます問題が複雑になって解決しない事は明らかであった。そうかといって、ブラッドリーの家に今戻る勇氣はなかった。彼はきつと僕がいなくなったことに驚いているに違いない。反省し、後悔しているかもしれない。今にでも携帯が鳴るようにも思った。きっと彼は僕に対して弁解し、許しを請うであろう。

だが、崇史の心の中の住人は『いやいやブラッドリーは君に幻滅しているはずだ。なぜかって？彼が一番君を必要としている時に、君は彼を放って逃げ出したのだからね。君は自己中心的な人物なのだよ。君は少しも自分では気が付いていないようだが。そもそも、今、何を考えているかね？私には分かるよ。君自身の未来についてであろう。決してブラッドリーのではない、君を中心にして回っている世界を考えているはずだ』と崇史を冷酷に非難した。

そうに違いない。自分には欠けている点がたくさんある。崇史は今回は心の中のもう一人の自分の声が尤もなように思った。崇史は決心が揺らがない内に、勇氣を出せと自分自身に気合いを入れて、ブラッドリーの家に向かった。まずブラッドリーに謝罪しよう。いつも忍耐強く全てを受け止めてくれた彼をうつつちゃらかして逃げ出したのですから。僕も何が起ころうともそれを受け入れなければ。

崇史はそう強く心に誓った。そしてこれまでのあやふやな自分ではなく、はつきりとした明瞭な自分を創造していかなければ。そうしなければ自分の暗澹とした運命を遮断できない。それに、新たな光輝な運命はすぐそこにあるのだから、それを逃してはならない。彼は懸命に次々に現れる不安を追い払い前進した。それでも、もしかして僕は無視されるのでは？もう自分の居場所がなくなってしまうていたらどうしよう、など次々に様々な苦しい思いが彼を襲った。

崇史はウィンブルドンに向かう列車のなかで、彼と出会ってから数ヶ月間を思った。それはやさしく心温まる思い出であった。もうこれで充分ではないか。これ以上に何を望むのか？僅かな間ではあったが僕はブラッドリーに感謝しなければ。この数ヶ月間は人生の中で最も心が満たされていたではないか。そうであるならば、僕は今現実と向かい合わなければ。全てをはつきりさせなければ。

ブラッドリーの家には四十分ほどでついたが、崇史はなかなかドアを開けられなかった。まるでブラッドリーと青年Nの二人の仲睦まじい関係を、目撃してしまうのが怖いかのよう。もうこれじゃ完敗だよ。彼は思いきってベルを鳴らした。何も返事がなかった。意地になって何度鳴らしても応答がなかった。彼らは外出したのかな。それとも何かあったのかな。崇史は鍵を取り出して恐る恐るドアを開けた。そこには人がいる気配がなかった。崇史はゴミが散らばっているキッチンを整理してメモを残した。それは簡単なもので、疑った事に対する謝罪とブラッドリーに対する信頼の情と感謝の気持ちであった。そして、できるだけ早く連絡をくれるようにと付け加えた。

崇史はちよつと甘く書き過ぎたかなと思いつつも、そのメモを壁に貼付けて、荷物を取りに二階にある寝室に向かった。家の中は静まり返って物音一つしなかった。そういえばこの家にいる時はいつ

もブラッドリーと一緒にだつたんだなあと崇史は彼の笑顔の隅々までを思い出して微笑んだ。崇史は完全に閉め切つてはいない寢室のドアを開けた。

崇史は一瞬、恐怖で叫びそうになった。彼の瞳孔は大きく開かれ、凍り付いた。彼の目に写つたのはブラッドリーの焦りきつた表情であつた。ブラッドリーの顔はまさしく「しまった」と叫んでいた。ベッドの上で彼はたったいま口づけをした青年Nを突き放して、立ち上がった。彼らは全裸だつた。崇史を睨みつける青年Nの顔は勝利に勝ち誇つていた。Nは、「これでもう貴方達はおしまいだね」とそう崇史にウインクした。

この凄まじい屈辱の光景を目の当たりにしたにもかかわらず、崇史は恐ろしく冷静であつた。その顔は能面のように冷たく、無理に全ての感情を押し殺しているかのようにであつた。彼は音も立てずに部屋に入り自分の荷物を取つて、一度もブラッドリーの方を見ずにその部屋を出た。心の中ではブラッドリーが自分を追つて来て謝罪するのを望みながら。そうしてくればきつと全てを許すであろうと思ひながら。実際ブラッドリーはそうした。慌てふためいた彼は崇史を追つて玄関まで走つて来た。ブラッドリーはまだ全裸であつた。勃起したペニスは萎んでいた。

ブラッドリーは崇史の手を掴み、体全体で強く、強く抱きしめた。その顔には涙が溢れていた。まるで、崇史が自分から離れていくのを恐れているかのようにであつた。「誤解なんだよ。今から全ての事情を説明するよ」

だが！ブラッドリーの口臭はいやらしい匂いがし、彼の体臭は青年Nに汚染されていた。

崇史は冷ややかな顔、それは悲しみに溢れていた！で一瞥し、「こんな時にどうして？僕の気持ちも考えずに、よくもこれ程にひどい仕打ちができたものですね。あなたの精神を疑うよ」彼はそう言い終わると、ブラッドリーの左の頬を殴った。信じられなかった。自分が人を殴るなんて。人を殴る行為を生まれて一度もしたことがなかった。崇史は自分がたつた今、起こした行動に驚いてブラッドリーを見た。彼は左の頬をさすりながら頂垂れていた。「ほんとうにすまない。これには理由があるんだ。お願いだから俺の言うことを冷静に聞いてくれないかな」と懸命に訴えかけるように言った。彼の顔は真剣であった。

崇史は頷いて、「痛かった？こんなことをしてごめんなさい」そう言って履きかけた靴紐をほどいた。

だが、彼が再び家の中に入ろうとすると青年Nが昨夜したように、またしても恐怖の悲鳴を上げ床に崩れ落ちた。ブラッドリーはそれに動揺してはいたが、毅然とした態度で彼を引っ張り上げて、「もういい加減にしるよ」と怒鳴りあげた。

青年はますます激しく叫び発狂した。彼は崇史の足に縋り付き泣き出した。

「僕はブラッドリーに捨てられたんだ。彼なしでどうやって生きていけばいいんだい」

崇史はうろたえた。いったい自分はどうすればいいのか全く分からなかった。この男の子の精神は病んでいるのか、それともただの演技なのか判断できなかった。

だが、ブラッドリーは先程とは一転してやさしくNを抱きしめて、

Nは彼の頬にキスをした。そして、Nはブラッドリーの顔に痣を見つけると、きつと崇史を睨んで「何をしたの」と叫んだ。

崇史は彼らをそのままにして家を出た。後ろからは彼らの泣き声が聞こえる。それは全てに絶望しているかのような響きであった。ブラッドリーは追っては来なかった。僕は今、引き返すべきなのだろうか。僕なら彼らを何とかできるというのか。でも、なんたる異常なシーン。

引き返さなければ。そして、ブラッドリーを慰め、Nを助けてあげなければ。崇史は再度扉の方を振り返った。彼らはまだ抱き合っていて涙を流している。それを見て彼は戻れなかった。憤怒？ 憐憫？ それとも？ 彼は怖かったのである。

崇史はただひたすら歩き続けた。歩く事が彼の心を慰めてくれるかのように。今の彼は不思議な程悲しみを感じなかった。何か心の中にぽっかりと穴が開いた状態とでも言おうか。怒り、そして悲しみを通り越した精神状態を彼は今経験していた。崇史は運河沿いのベンチに座って肘をついて、一つ一つ丁寧に考えた。あれはいったい何だったのか？

崇史はブラッドリーを少しも疑いはしなかった。彼は聖人である。それは間違いない。それでは青年Nが異常だという事か？ ウィリアムと同じように、自分には絶対に理解不能な類いの人物なのか？ ただ演技をし、ブラッドリーから離れようとしたくないストーカーなのか？ ベッドの上で彼が見せた敵意の入り交じったウイंकを思い出した。だがそれは本当だろうか？ ただ、僕がそう思っているからそのように見えただけかもしれない。彼は、本当は無垢な青年で、純粹にブラッドリーが好きなのかもしれない。ただ、たとえそうだとしても彼のとった行動は異常すぎる。でも、ほんの数ヶ月前、自分も

彼と同じようにナイフを持ってウィリアムの前に立ったではないか？

崇史は溜息をついた。結局自分には幸せが来ないってことかな。勇気を出してブラッドリーの家に行ったというのに、結果は惨憺たるものであった。やる事なす事全てがうまくいかないのだから。さあ今自分はこの事実を受け入れなければ、そう自分に誓ったはずではないか。でも、あの時は自分がまるで勝利者のような気分、そうなるかのように思っていたのに。今それは幻想となって遠のいてしまった。

いったいこれからどうすれば良いのか。運河の流れをじっと見、水の音を聞きながら、そして、畔で楽しそうにサッカーをしている青年達を見ながら、彼は少しずつ暗い心持ちになった。彼が何度も追い払った想念。それが再び彼を襲った。自分は目の前で楽しんでいる若者達には永遠になれない。どんなに努力したところで僕は彼らの一員にはなれないのだ。崇史は断言できた。これまでに一度でも自分は心から満足できたか。もちろん答えはイエスである。だが、たとえ心の満足を得られたとしても、彼らのそれとは違うのである。彼らを感じ、普通に体感している日々の充足なるものは、自分の記憶のなかには見つける事はできない。自分はいつも何かが違う。本質的に彼らとは異なっているのである。それが為に僕は永遠に幸福を得られないのだ。

いつも何か事を始めると必ず障害が現れる。わずか半年の間に二度の失恋とは何て事だろう。恋、そもそも恋をすることそのものが許されざる行いなのか。数々のドラマ、数々の悲劇、それは人を愛するが故に起こってきたではないか。テレビニュースを見て下さい、新聞を読んで下さい！一日として悲劇を見ない日はあるだろうか。浮気、不倫、強姦・・・これは愛と言えるのだろうか。誰かを犠牲にする愛なんてあってはならない。そもそも、誰が恋の対象、結婚の

相手を一人に制限したのか。それが為に嫉妬が生まれ、人を憎み、殺人まで起こるのではないか。あく分らない。その上、たとえ人に恋をするのを止めたところで人生の平安など決してこない。崇史は財布の中に入っている僅かばかりのお金を見た。これじゃ生きてはいけない。銀行口座にもたいして残高はない。どんなに心が沈み、落ち込んでいても、病気をしても明日は仕事に行かなければ。

もし仮にロンドンには来ず日本の実家にいたならば、これ程までに苦しまなくて済んだのかもしれない。そもそも、日本を離れようとした決意は真なる幸せを得る為ではなかったか。だが、その決意は間違っていたのかもしれない。自分と同じように、原因や目的は違っても（ある人はお金を稼ぎに、ある人は勉学にまたある人は・・）究極の目的は皆、幸せを勝ち取る為にこの都市にやって来る。その数たるは計り知れない人数だ。彼らは皆、成功しているのだろうか。それは分からない。どちらにせよ自分はそうではなかった。それならばいつそ実家に引きこもっていた方が良かったのかもしれない。そうすれば何の障害にも会うこともなかったかもしれない。いやいやそれはあり得ないではないか。もう忘れたのですか？どれ程強く外国に逃避しようと思ったかを。ロンドンに来る為に必死にアルバイトして資金を貯めたではなかったのか。何が自分をそうさせたのですか？崇史は自分の中の最も辛い過去を思い出し、嘔吐した。あの頃のじめじめした過去を考えると、とてもあそこには留まれなかったし、今はまだ戻れない。彼はまた深い溜息をついた。

彼はストレスを避け空想に逃避しようとした。その世界では自分はいいつも中心にいた。誰彼もが僕を注目し羨望的であった。最も心休まる場所それはやはり自分の中の世界である。崇史はいつもそのような場所をセッティングし、クールに着飾ったまるで別人のような自分を登場させた。そこはテレビのトーク番組であった。そこで、僕は堂々と輝かしい自分の人生を語っている。それをうっとり

しながら聞き入っている大勢の聴衆がいる。そして、また別のシーンでは僕は観衆を前に美しい歌声を披露していた。だが突然、その幸せを遮断するかのように暗い影が頭を過った。とうとうこの世界にまで悪魔が侵入してきたのだ。崇史は自分の運命が無性に物悲しいものを感じた。はるか以前、それは小学生いやもつと前だったかもしれない、その頃からずっと何年間も僕を苦しめていた存在。それは、高校生になる頃ようやく克服したはずであった。その最も残酷な住人がまたしても心の中に現れた。何の権利があつて彼はまた僕を苦しめに戻つて来たのか。あゝこのいまましい存在、僕は何度両親に告白しただろうか？だが、誰一人として理解してくれなかった。それ故に解決しようともしてくれなかった。変人扱いされるのが落ちだった。この存在は決して幽霊などの霊的な存在ではなく、自分自身なのです。この存在は己を傷つけ、ずたずたにし、心を弄び、そして、遂には己を死へ導こうとする。それは、自分の悲しみや孤独感が作り出した化け物なのかもしれない。だが、それはもう何年間も自分の中に現れなかったのに。その出現は今の自分の状態を表しているのか、それとも、未来の自分を予知しているのか。どちらにしても喜ばしくない徴候であるのは確かだ。

そして、心の奥底に眠っている数々の暗い記憶の固まりがどつと頭に降り注いだ。『誰かこれを止めて下さい。僕はもう納得し、全てを受け入れ、解決したのです』『それなのに、なぜまた僕を苦しめるのです。本当は、僕は何も納得していなかったとでもいうのですか。どれだけ、僕は涙し、我慢したことか。それでも、僕は事実を受け止めたのですよ』『僕はいつも孤独だった。誰からも愛され、両親に溺愛されていた兄妹とは違うのです。どんなに悲しかったか』崇史は、一度は整理し受け入れた過去、自分自身に言い聞かせ何とか納得し永遠に忘れ去ろうと決意した過去、それらを閉じ込めていた巨大な格納庫が音を立て崩れているのを知った。そう、もうどこにも現世には心の平安を完全に感じられる所はないのである。そう

気が付いた時、「もう諦めなさい」と氷のように冷たく心の中の悪魔が呟いた。

その最後の寂しい響き「諦めなさい」を聞いた時、崇史はぞつとした。過去幾度も追い払って来た最悪の想念。それがまた再び自分の元に戻って来るとは。すなわち幸福を得る究極の方法たるものはあり得ない。様々な実践が悉く裏切られてきた。それならば、その不幸の原因たるものを封じこむしか方法はないのである。

自分にはその勇氣はともあるように思えない。果たして、僕は自分を殺せるだろうか。自殺は他殺となら変わりはない。他人を殺すのがあらゆる想定外であるように、自殺も最終手段ですらない。自殺は強い意志なくしてはとも実践できない。それに、それはとても美しいものとは言えない。崇史は知っていた。自殺なるものが周りの人々にとつてもなく大きな悲しみをもたらし、何かどこまでも深い暗黒を残す事を。

崇史は幾度も想像した。仮に自分が死ねば、自分を苦しめた人達は悲しみ後悔するであろうと。自分は美化されるに違いないと。だが、実際はそうではない。それは恐怖であり、否定であり、その自殺した者を思い出す事すら、苦痛になるかもしれない。いったい、それによりいくつの家庭が崩壊していったであろうか。

だが、それを自分は全てを理解している。偉大な決行者達を除いても、自殺を実践するものは皆、どれだけ自問したであろうか。しかし、彼らにはそれ（自殺）しかもう残された道がない故の決断なのである。

果たして自分はその大勢の決行者達と同じように、この世を捨て去るのを許されるであろうか？ 考えてみるとまだまだやるべき事が、

あまりにもたくさん残されているように思った。では、人は何が為にこの世に生まれてくるのであるのか。何か理由があるに違いない。でも、誰もそれを知らない。本当に死ねば次の世が待ち受けているのか。それとも、全くの無なのか。それも、誰も答えを知らない。

崇史はそこで思考を止め、立ち上がった。彼は危険すぎる自分を恐れた。このままではおかしくなってしまう。彼はとりあえず再び歩き始めた。

ジェーンは大雨の中、ジャックの寮に向かっていた。彼女は今朝、彼から今晚どうしても会いたい旨のメールを受け取っていた。ジェーンがバスを降りるとジャックが迎えにきていた。手には大きな紙袋があった。彼はすぐ側のイタリアンレストランに彼女を連れて行った。そして、すぐに「これずっと置きっぱなしになっていた君の荷物だよ。そろそろ持って帰ってくれないかな？」袋の中には彼女の歯ブラシや洗面用具それに寝間着があった。それが何を意味するか彼女には察しがついたが、それを無視して、「そうね、私もそろそろ持って帰ろうかと思っていたのよ。そもそも、寮には部外者は泊まれないからいつもどきどきしながら泊まっていたしね。もし管理人さんに見つかったら大変だから」「これからは私の部屋に泊まることにしましょう。今晚にでもあなたの荷物を持って行きましようか？」彼女は満面の笑みと輝くような眼差しをジャックに向けた。ジャックはそれを聞いて大きな溜め息をつき、目をそらした。「そうそうこの夏一緒に計画していた旅行のパンフレット持ってきたよ。お金ももう振り込んでおいたから。今回のツアーは格安ツアーだからお金の返金はできないのよ」ジェーンは嘘をついた。ジャックがまた大きな溜め息をついて、何か言おうとするのを彼女は遮った。

二人は食事を終えると、「今日は割り勘でいいかな？今お金がなくて」いつもはジャックが支払ってくれるのに彼女は不安になった。

二人はジャックの部屋に向かった。途中、ジャックは何度もジェーンの方に振り向き何かを言おうとしたが言えなかった。二人が部屋に入ると、いつものようにジェーンはキスをしたがジャックはそれに応えなかった。そして、じっと彼女の目を見つめて、「ごめん俺はもう君を愛せないよ」と俯きながら小さな声でぼそと言った。

ジェーンは激しく首を横に振った。「絶対に別れないから。好きな人がいればはつきり言ってくれば私もそれを受け入れたけど。あんなふうにならずと私を侮辱し翻弄されたら、許す事はできないわ」

「違うんだよ。別に俺には君以外の女性とは付き合っていない。それは君の誤解だよ。正直に言うけど、先週の君の態度は異常だったよ。あんなのを見てしまったらもう俺には無理なんだ」彼は涙を浮かべ苦しげな深刻な表情を彼女に見せた。それはまるで悪いのは自分ではなくジェーンなんだよ、だから仕方がないんだと言っているかのようであった。

ジェーンは力なく頷いた。悔しくて、悲しくて体が震え涙が出た。でも、現実を受け入れなければと自分を納得させた。「分かったよ。これからはお互いの道を進みましょう」

彼女の言葉を聞いて、急にジャックの顔は晴れ晴れとして、「ありがとう、もし君が良ければ、僕の友人を紹介するよ。君も一人じや寂しいだから」

ジェーンは彼の無神経さが信じられなかった。そもそも別れる為に私を呼び出したなんて、なんて失礼なんだろう。もう何ヶ月も私を騙してきたのかと思うと許しがたかった。「君があまりにも俺を愛していたから言いだせなかったんだ」「君を傷つけたくなかった」彼から発せられた様々な言い訳が何度も耳を反芻した。彼女は誰か

とこの苦しみを共有したかった。そして、どこでどう間違ったか何度も考えてみた。結局の所、人の心をコントロールすることなどできない。自分自身の心ですら思い通りにならないのだから。だから自分以外の誰かを好きになつたからといってジャックを責めることなどできない。でも、たとえそうだとしても彼がとつた行動はあまりにも思いやりにかけている。彼自身はそれをやさしさと誤解しているようだけど、私からすればそれは彼のずるさであり、ごまかしであるように思った。彼は私に対して冷たくする事によって、何ヶ月も私を苦しめた。そして、恐らくは私から自然に別れる事を望んだに違いない。彼は自分が問いつめられるような場面を避けたかたに違いない。なんて自分勝手な、意気地ない男だろう。

その日から二度とジャックから連絡がくる事はなかった。そして、ジャックの交際相手が自分のよく知っていた旧友である事も知つた。それに、彼と彼女によって自分が風変わりな鬼女に仕立て上げられていることも噂で聞いた。一度は自分を好きになつた相手なのに。

ジェーンはとてつもなく大きな悲しみの中にいた。どうして人間は悲しまなければならぬのか。どうして人間は悲しむという感情があるのか。そして、彼女は無性に寂しかった。この寂しさを、苦しさを誰かと共有できたなら。だが、彼女は誰も思い浮かべることができなかった。崇史やフラットメイトも彼女の脳裏にはなかった。もしも、母親が生きていてくれたなら。ジェーンはうつすらと涙を浮かべた。彼女の母親はもう何年も前に自ら命をたつた。ジェーンは知っていた彼女が激しい苦痛と絶望の中にいた事を。そして、いつも寂しそうにしていた事を。彼女は母親を無限大に愛していたと断言できた。母親もその事実を知っていると思っていた。だが、果たしてその気持ちは彼女に届いていたのだろうか？

私は本当に彼女の苦しみを理解していただろうか。母と彼女の絶

望を共有していただろうか。決してそうでは言えないかもしれない。あの時、彼女が自ら命をたつ程に深刻だとは考えなかった。彼女の深刻な悩みを上空で聞いていた事すらあった。ジエーンは何年間も繰り返し、悩み続けてきた後悔と懺悔の気持ち、それはジャックとの出会いによっていくらか軽減されたその気持ちだが、今は以前より更に大きくなって戻ってきていることに気が付いた。自分を含め人間はなんて残酷な生き物なのでしょう。幸せと安らぎをもたらしてくれたジャック、母親が私と彼とを出会わしてくれたんだわと勝手に思い込み、運命の相手なんだわとも感じていたのに。母は今どう暮らしているのだろうか。天国で幸せを感じられる生活を送っているだろうか。

私は決して、母が望むような事をしていなかった。彼女は無性に寂しかったに違いない。人間を救えるのはやはり人間の心なのだ。私の心全てで愛を表現していたなら、いかに彼女を思い、彼女を必要であると伝える事ができていたならば、彼女は命を自ら絶つような事はなかったのでは。たとえそう（死を選択する）であったとしても、愛のかたまりのようなものを携えて天国に行けたのでは。

私は今、誰かの助けが必要です。このままではおかしくなってしまうそうです。でも、私にはその資格がない事も事実です。愛のたくさん詰まった心が欲しい。母親がいつも私にくれていたような愛が今あったなら。ジエーンは故郷の南アフリカを思い浮かべた。そこには父親と兄夫婦が住んでいる。私の父親は決して母親の代わりにはなれない。母親を思い出す時に感じるやさしく暖かい感情は、彼を思い浮かべる時には感じないので。彼と話をしていると予想外の返答が、それは私をとて不快にさせるもので、二度と彼には相談するべきではないと思わせるものである。

ジエーンは父親を思い浮かべ、その不快な感情が母親との思い出

を汚染するようで、彼女は考え込むのを中断した。そして、ふと前を見ると自分と同じ年頃の女性がにこにこ幸せそうに父親と手をつないで歩いていて。あゝ何て素敵な光景。なんて羨ましい姿かしら。でも、彼女は再び自分に強く言い聞かせた。私は母を殺したも同然の事をしたのだ。私は彼女を救い出す事ができたにもかかわらず、そうしなかった。そうなのです。私は今とても苦しい。ようやく天罰がきたのです。私はもっと苦しまなければならないのです。あゝ早く母親のもとに行きたい。そこで、彼女に言いたい。私がいればただあなたを愛しているかを。あなたは決して一人でない事を。間もなくあなたのもとに参ります。待つて下さいね。

崇史とブラッドリーはあの日以降、再び合う事はなかった。最初、崇史は携帯電話を肌身離さず持つていて、いつブラッドリーから連絡がかかってきてもすぐに応答できる状態にしていた。何とか彼からの連絡が欲しかった。今のこの精神状態を救えるのはブラッドリーしかないのである。だが、一週間たった後、崇史はもう再び彼と話せるなど思いもしなかった。

崇史はますます生きる事に悲観的になり厭世的になった。何者も彼に活力を与える事はできなかった。ただ、彼は何の気力も持たず、ただ仕方なく？無意識に仕事をし、勉強を続けていた。いったい何のエネルギーが彼をそうさせていたのか？それはただ生きる為にそうしていた。少なくともその時の崇史は生きようとしていた。

だが、崇史の思考は完全に止まってしまったかのような。彼はブラッドの変化に何も気が付きはしなかった。ルーカスがしょっちゅうケンブリッジに行く事も、デイビッドにチエコ人の彼女ができたことも、ジェーンがどこかに消えてしまったかのように、めったに居間にこなくなつた事にも、何も気が付かなかった。英語塾でも、新しいクラスメートにまるで関心を示さなかった。

一方、ルーカスはというと彼は帰国準備や帰国前後についてのプランが忙しく、崇史と会う機会が激減していた。たとえ会ったとしても、今の彼には崇史を気遣う余裕がなかったかもしれない。デイビットは彼女ができた事に有頂天で毎晩遅くまで帰って来なかった。そういう理由で誰もがお互いに無関心であった。

そのお互いに無関心であることがますます崇史を孤独にし、狂わせていった。彼の暗い想念の拡大は、誰にも邪魔されることなく自分自身も気が付く事なく進行し、彼の心は蝕まれていった。そして、その頃もう死はすぐ側にまで差し迫っているかのようにであった。

崇史は携帯電話の電源が切れてしまっている事を知ったが、充電することに意味を感じなくなっていた。数週間前とは違って自殺を考えるのに何の躊躇もなく、その実行はそれ程難しいことには思えなかった。現に、ほんの数日前に始めたばかりのウェブ上での自殺同行者探しで、難なく三名の自殺希望者に出会えた。それどころかもうすでに自分と同じように相手を探している複数の人物がいた。彼は自分が今考えている事が決して特別なことでないように思えた。

崇史は強い意志ではなく、流されるままに、他の自殺者達とともに死を迎える事を決めた。

その時、ブラッドリーは必死だった。なぜなら、崇史の携帯電話はつながらず、フラットはいつも無人だった。彼は焦った。もしかして、崇史を永遠に失ってしまうかもしれない。ブラッドリーは「もう一度チャンスを下さい」と何度も神様に祈った。最後に崇史といた日に自分がかつきりとした態度をとらず、あいまいな態度をしたことを悔やんだ。まるまる一週間崇史に連絡しなかったのは愚かであったと思った。だが、その時ブラッドリーは自分自身が被害者

であつて、自分こそが誰かの精神的な助けが必要であると思つていたのだ。なぜなら、青年Nが異常者であることは周知の事実だと思つていたからである。よつて、崇史が自分に何の連絡もしてこないことに憤りすら感じていた。だが、今、冷静になつて考えてみると、自分がNについて何も彼に説明してこなかつた事を思い起こし、崇史は全ての事実を知らなかつた事に気が付いた。そうであるならば、心に最大の傷を負つているのは崇史ではないか。俺はなんて大きな過ちをしてしまったのであろうかと彼は悔やんだ。

ブラッドリーは崇史が通っている英語塾にも行つた。だがそこでは個人情報教えられないと門前払いであつた。そこで、彼は何日間もずつと崇史が登校するのを見張つていのだが、彼は一度も現れなかつた。その後、ブラッドリーは崇史の職場に行つたが、つい二日前に彼は辞めてしまつたという。『あゝタカシに会いたい。たとえどんなに罵倒され侮辱されてもいいから会いたい。心から謝罪したい』ブラッドリーは崇史のやさしい思い出に心を打つた。自分と出会つた時に彼はすでに傷ついていた。彼は泣いていた。それなのに自分はまたも彼を裏切つてしまつた。僅かの間二人の男によつて裏切られたなんて、彼はどんなに深く傷ついている事だろうか。今すぐに会つて強く抱きしめたい。本当に申し訳ない事をした。

ブラッドリーは以前したようにロンドン中を探し始めた。彼は崇史がよく行く場所を熟知していた。だが、今回はどうしても探し出す事ができなかつた。ブラッドリーは「俺は決して諦めませんよ」と心の中で力強く叫んだ。

第13章

崇史は「わー」と叫び声を上げながら目を覚ました。何かとんでもなく恐ろしい夢、何が何だか訳が分からない、表現する事が不可能な圧倒的な恐怖で、気が狂いそうになりながら飛び起きた。今のは一体何だったのだろうか。夢の断片を拾い集めながら、悪夢の内容を思い出そうとした。だが、何一つ思い出せない。一体僕は何をそんなに怯えているのだろうか。崇史の体は全身汗だけで、恐怖と寒さに身を震わせていた。「あゝ恐ろしい！何て事！」「誰か僕を守って下さい」彼の脳裏は混乱し、誰もいない部屋の中で救いを求めるかのようにそう叫んだ。そうしているうちにも何か恐ろしい物体、塊が自分を地の底へ引きずり込もうとしているかのような恐怖を感じた。でも、彼はそれが何なのか全く分からなかった。ただ言えるのはそれがぞつとするような何かであるという事だけだ。

「ぎゃー」崇史はけたたましい叫び声を聞いて、反射的に声がした方を見た。何と、背後の白い壁上に阿修羅が立体的に浮かび上がり、自分を鋭い目つきで睨め付けているではないか。もうおしまいだ。崇史に絶望的な悲壮な感情の波が押し寄せ、それは世の終末が目前に広がっているかのような気分させた。彼は少しの間、体が凍り付いたかのように動けなかった。きつと彼（阿修羅）こそが死神であり、彼が自分を地獄へと導いていくのだろうか。そうに違いはない。崇史は半ば己の運命を諦め、頂垂れながらも、彼を振り切り、急いでカーテンを、そして、窓を開けた。崇史は明るい日差しを浴びたかった。新鮮な空気を吸いたかった。そして、人々が歩く姿を眺めたかった。だが、外は嵐のように風がきつく、大雨が降っていた。それに、乞食を除いて誰も歩いている人はいない。ただ、もう一度、恐る恐る白い壁の方を振り向くと、阿修羅の姿は跡形も無く消え去っていた。崇史はどっと疲れたかのように、床に崩れ落ち、

額に手をあてるととても熱かった。もしかして、あの死神は自分の熱が作り上げた幻想だったのかもしれない。

時計の針はまだ朝の五時を指していた。今日もルーカスのベッドには誰もいない。崇史は誰かに会いたかった。このまま一人でいると恐怖と寂しさで、頭がおかしくなりそうであった。彼は自分の部屋を飛び出してジェーンの部屋をノックした。彼女のやさしい笑顔を期待して。だが、彼女の部屋には誰もいなかった。ロックされていない部屋の中は彼女にしては不自然な程に乱雑であった。そういえばもう何週間も彼女を見ていないような気がする。なんだか、彼女の物悲しい部屋は崇史を余計に不安にさせ、彼はその感情の波を避けるかのように、急いでドアを閉めた。デイビッドは？彼の部屋のドアは最初から開いたままだった。

崇史の恐怖は少しも和らげられる事無く、洗面所に向かった。部屋の冷たい空気とシャツに染み込んだ汗によって冷やされた体を暖めたかった。彼は蛇口を最大限に開けてバスタブにお湯を入れた。その間、暖かいインスタントスープをマグカップに入れて、ラジオとテレビをつけた。物音一つしない静まり返った部屋は、機械から流れてくる音によって、少々賑やかになり、ほんの少し緊張が解れたかのよう。そして、スープと暖かいお湯はかちかちになった体をリラククスさせた。崇史はほっと溜息を付いた。だが、何者かがつつと自分を見つめているような、そんな不気味な感じがずっと彼に付きまとった。彼はまた急に怖くなって洗面所のドアを開け放しにした。その後、たっぷりと時間をかけて体を暖め、ゆっくりと丁寧にふかふかしたタオルで体を拭いた。そして、彼は服を着ながら鏡に映る自分の姿を見た。そこには、自分の姿の他に、知らない誰か、第三者が映っていた。

「あゝ」「もうやめてくれよ」「僕をどうしようというのかい」

崇史の不安定な精神が起こす様々な奇怪な現象はますます彼を狂わせていった。

崇史はばたばたと出発の準備をし、フラットを出た。もうこれ以上ここには留まれない。このままだと発狂しそうだ。彼は薄気味悪い部屋に永遠の別れを告げた。外はまだ薄暗く、人通りも少ないが、少しも彼の心を晴らさなかったが、部屋の中にいるよりかはずっとましだった。ただ、予定の時刻よりも随分と早く出て来てしまった為に、時間を持て余した。それといって何もする事が無い。崇史は片手に暖かいコーヒを持って、それを飲みながらビクトリア長距離バスステーションに向かった。

崇史はその道中一体何を考えていたのだろうか？彼の脳裏からはまだ今朝の恐ろしい夢の断片的な映像が離れなかった。きっと、その数々のシーンこそが死んでから自分がまず向かう世界なのだろう。自殺すれば地獄へ行くと何度も両親や祖父母から聞かされていた。まさに彼らが語っていた世界が今朝見た映像なのだろうか？ただ彼は今朝見た映像のほとんど全てを記憶していなかった。彼は心に残ったぞつとする恐怖、表現できない恐ろしさから映像を推測するのである。だが、崇史は暗黒の他何も思い浮かべる事ができなかった。要するに地獄というのはまさに表現できない恐怖、怨恨、羞恥、挫折、蔑視、全てのマイナスのエネルギーの塊のようなものであるのかも知れないと彼は想像した。あゝ自分にはそこに行く勇氣などとても持ち合わせていない。あんな映像、気のなかでどうやって過ぐすというのか。そうかといって今の自分には何ができよう。自分を殺す事を断念して、一からやり直せというのか？「もう一度頑張らなさい？」崇史の頭の中にこの言葉が何度も反芻していた。どうやってこれ以上頑張れるのか？ありとあらゆる努力をしても結局得られたものは何も無かった。残ったのはただ悲しみと挫折と、屈辱だけであった。そんな自分に何の希望を持つてというのか。崇史は今ま

で生きた二十数年間を思い出した。その記憶の中には心から満足のいく幸せな期間があっただろうか。瞬間や時間ではなく完結された期間が！！もしも幸せな期間、完了された期間（それは数ヶ月でもかまわない）があったならば、それを糧に自分はもう一度頑張れよう。だが、それすら無い人はどうやって、何を頼りに歩んでいけば良いのだろうか？どれだけ悩んでいても決して誰も助けてはくれないじゃないですか。

崇史はその時ブラッドリーを思い出した。彼のやさしさが無性に懐かしかった。今にでも再び自分を助けに来てくれそうな気がした。だが、それはとても期待できそうにない。なぜって？僕はもう数週間も彼を待ったのですから。でも、崇史はブラッドリーのやさしさが偽善ではなく真実なものであると信じたかった。『どうか信じさせて下さい』

彼は重い溜息をついた。次々に溢れ出る様々な屈辱のシーン。僕は本当に頑張ったのですよ。もし神様が本当にこの世にいるのであるならば、もっと別の自分の姿があっても良いはずではないですか。

どちらにしても、僕は死んでみせる。これは精一杯の神に対する冒瀆だ、裏切りだ。神は悔い改めなければならぬ。彼（神）は、人間はあまりに不平等であることに気が付かなければならない。そして、人間はそんなに強い生き物でないことを知らなければならぬ。僕はあなたの失敗作ですよ。そうならば、なぜに死んでからも苦しまなければならぬのですか。でも、もういい。とことん苦しんでやる。苦しみ通してみせる。ただ、もうあなた（神）が望むように生きる事だけは我慢ならないのです。全ての人間が無条件に貴方を信じ、貴方を崇拜すると思っているのなら大間違いですよ。このままでは貴方は全てを失うかもしれませんよ。人間は貴方が思っている程には我慢強くはないのです。従順ではないのです。全て

の人間は公平に幸せになるべきなのです。崇史は一人怒り狂っていた。彼の頭の中には地獄絵がますます鮮明になるにも関わらず、それを受け入れる覚悟であった。

「やあ白井、どうした？そんなに深刻な顔をして」

そこには克也と彼の友人達がいた。彼らは泥酔していた。きっとクラブからの帰りに違いはない。皆にたにたし、意味ありげに崇史を見つめた。彼らは何か言いたげだった。そして、その中の一人が崇史めがけて唾を吐きかけた。今では、彼らの間で崇史とウイリアムそして、ブラッドリーの関係について噂が飛び交っているのは明白だった。

まさにその表情、崇史にとって鬱陶しく感じる彼らの動作、そして思考が一気に彼を現実世界に呼び戻した。自分と彼らのあまりにも大きな隔たり。全く交差する事の無い彼らの波長。もう崇史は彼らには何の興味も未練もなかった。それどころか憎しみすらあった。いやいや、それは軽蔑と表現すべきかもしれない。克也はもう親友でも何者でもなかった。彼の自分を見下し、侮辱する視線を見てからは。なぜに、僕は彼を慕い尊敬していたのか。なぜに僕は彼を見極めることができなかつたのか。ただ、もうその事すらあまり価値をなさない。それが今の自分にどう作用するといふのか。もう、僕は人間を知り尽くしている。彼らは特別でも何でも無い。どの人間も敗者には手を差し伸べない、それどころか、更に彼らをいじめて楽しんでいるのであるから。

崇史はそのまま何も返事をせずに、彼らを見無視して通りすぎた。背後からは自分を馬鹿にしたような笑い声が聞こえる。彼の目は涙ぐんでいた。とても悲しくて、空しくて、辛かった。いったい誰を信ればよいのでしょうか。たった一人でも心から信頼できる人がいれ

ば。でも、もうどうでもいい。今日で全てが終わるのだから。

だが、人生最後の日に克也に会ったのは良かったのかもしれない。なぜなら死を決定的なものにしたのだから。もうこの世には何も期待できない、望めない。よって未練は全くありません。たった一人でも天使がいれば変わっただろうに。それに幸せな完結された期間があれば。

崇史はビクトリア鉄道駅で最後の朝食をとった。絶望の精神状態でも、そして、間もなく死のうとしているのにも関わらず空腹を感じる自分が不思議に感じられた。周りを見ると駅の構内は早くも通勤客でごったがえしていた。どの顔も彼にはくたびれた顔をしているように見えた。でも、彼は知っていた。彼の目の中に映る誰もが自分にはない幸せの塊のようなものを持っている事を。そして、それを原動力に日々を生きている事を。崇史は彼らを妬ましく思いながらも、一層注意深く凝視した。彼ら一人一人の中にも悪の顔があるのだろうか。彼は克也を、ウイリアムを、そして、自分の父親までも思い浮かべ重い溜息を付いた。「人、人、人。あゝ全く」崇史はそう呟いた。

崇史は雑踏を避けるかのように、ビクトリア駅のすぐ側にある長距離バスステーションへ急いだ。だが、ここにも先程の鉄道駅、それにここへ来るまでの道中と同じく溢れんばかりの人々がいた。ただ、彼らの顔は崇史とは対照的に今から旅行に行くのか、或は故郷に帰るのか、皆一様に晴れ晴れとしていた。そんな彼らの明るい表情を見ていると自分が間違った方向に突き進んでいるかのように思えてしまう。ほんの数週間前、僕は大きな発見をしたではないか。幸せというのは自分の身近（すぐ側）にあるということ。それに、僕はもうその入り口にすらいたはずである。そのように考えていると、自殺する決意がほんの少し薄らいできたかのようにあった。あ

ともう少しで、僕も彼らと同じ領域に入れるのでは。崇史が一人出発ターミナルでベンチに座って行き交う人々を眺めていると、彼の心は暖まり、やさしい空気が彼を包み込んでいった。

だが、崇史はその甘い誘惑を追い払った。そして、彼は再度自分に言い聞かせた。「何度、同じ過ちをすれば気が済むのですか。このまま引き返せば、また悲しみが待っているだけです」「それに僕にはもう戻る場所も、友人もお金もないのだから」「自分を殺す事は容易い事ではない。とても揺れ動く心情では決行できるはずもない。精神が完全に麻痺しているか、或はとてつもなく強い意志がないととても無理である。

ちょうどその時、彼の乗るリバプール行きバスがターミナルに入ってきた。崇史は決意したかのように、決心が揺るがないように駆け足でバスに乗り込んだ。そして、もう一度誰にも邪魔されずにじっくりと考える為に彼は最後尾の座席に座った。そして、自殺する自分を恥じるかのように深々と帽子をかぶり、サングラスをかけた。

バスは崇史と数人の乗客を乗せてすぐに出発した。陽気な運転手は何やらバスのトイレの使用についてジョークを言っている。「トイレに人が入ると使用中のランプがつくので、トイレの中で鼻歌を歌わなくても大丈夫ですよ」と。幾人かの乗客が声を上げて笑った。崇史は彼らの陽気な雰囲気にはいらいらし、耳に手をあて塞いだ。僕と彼らは何かが決定的に違っているのだから、彼らに汚染されてはならない。決して彼らのようにはなれないのだから、騙されてはならない。そもそも、彼らそのものが世界に騙されているのかも。ただ、彼らはその事に気が付いていないだけかもしれない。ただ僕が彼らよりも敏感で聡明なのかも。どちらにしても、自分は神の奴隷にはならない。何の幸せも得る事のできないこの世では生きる意味

は何もない。

崇史はうつすらと涙ぐんだ。車窓から見える美しい田園風景の連続は彼の目には全く入らず、彼の脳裏にはこの世に生まれてから二十数年間の人生の白黒の映像が走馬灯のように音も無くぐるぐると回っていた。それは、とても悲しい映像でそれをただ何も考えずじつと物思いに耽りながら、彼はまるで傍観者のように眺めていた。時々ふつと母親のやさしい笑顔が脳裏を過った。そういえば、悲しい時、辛い時母親はいつも僕のをそばにいたっけ。きつと僕が死んだら彼女は気がおかしくなるだろうな。そう思うと不憫になり一層激しくむせび泣いた。世の中にはなんと死の決行に対して多くの障害があることだろう。母親が涙する映像ただそれだけでも、死を諦めるのに充分に思えてくる。きつと、それが母親の力なのだろう。だけど、もう駄目です。それでも、駄目なのです。今の僕の絶望感はそのをも超えているのです。彼は一人心中の中で呟いた。

長距離バスはいつの間にか到着地のリバプールに到着していた。崇史は運転手に声をかけられるまで、バスターミナルに着いている事に気が付かなかった。彼は運転手に対して無言でゆっくりとバス停留所を後にした。

待ち合わせ場所と時間を書いたメモを片手に、初めて訪れたりバプール港の中を、Jを探した。五、六分程あちらこちらと迷った後、約束の場所にすでに青いセダンに乗ったJは到着していた。一度も彼の顔写真を見た事がないのに一目見て彼がJだと分かった。何か恐ろしい悪霊にでも取り憑かれたかのような、まるで周りの人々とは波長の違う人物が立っていた。彼のオーラは今まで出会った誰よりもどす黒い色をしていた。そこにはあまりにも悲しい風貌の中年の男性が待っていた。何もかも全てに絶望してしまっただかのように見える。崇史は彼に挨拶をして、まるで慰めるかのように冷たい手

を強く握った。だがそれには何も反応せず「」は無言で車に乗り込んだ。彼は一見もう死ぬ前にして死んでいるかのように無気力であった。そして、その男は自身を奮い立たせる為にハシシを吸った。

崇史も彼の車に乗り込んで乗船した。船の中で崇史は正直、その男を見るのが怖かった。自分自身も死を決意しているというのに、「」には異質の異様さを感じた。彼が発狂するたびに自分もどうかしてしまいそうであった。変質者、こう表現してはいけないのであるがその異常な男を横にして、自分が正常に戻りつつあるかのように、彼と少し距離を置きたい、何とかもとに戻りたい気分にならなかった。だが、そのような精神状態も最初の数分で、その後は崇史の波長も「」の波長に飲み込まれ、彼もますます暗く深く深淵へ落ちていくかのようなであった。船は約四時間でアイルランドに到着した。イギリスから別の国に入ったというのに特に何の入国手続きもなくあっけなく異国に入った。

その後、彼らは最終目的地モハーの断崖に向かってアイルランド到着後も何時間もひたすら車を走らせた。ただ死という目的に向かって。その間、いやイギリスから「」はずっと無言であった。彼はもう死んでいるも同然のようであった。きっと死よりも恐ろしいと思える程の何かつらく大変な体験をしたに違いない。それ程にその男に気力がなかった。彼らには、もう迷いは何もなかった。

日が暮れて、雨空が一層アイルランドの平地を暗闇に包んでいた。その上、気温もどんどん下がっているようだ。それなのに、二人はエアコンをつけずただひたすら目的地に向かって車を走らせた。

夜の九時を過ぎた頃、ゴールウェイ南部の海岸沿いに、白い装束をまとった二人の女性が彼らを待ってじっと立っていた。真つ暗闇で明かり一つない中に浮かび上がる二人の姿は異様であった。マン

トを纏った彼女達の表情は全く見えない。

『もう後戻りはできない』崇史がそう思った途端一瞬後悔の念が押し寄せてきたが、それはまた難なく消え去った。とうとう自分も死を迎えるのである。彼らは車から降り、Jは白装束に着替え、四人は合流し荒野の中をクリフ目指してただひたすら歩き続けた。その間Jはずっと震えていた。そうかと思うと急にぱつと笑顔になる。まるで極楽浄土を見ているかのように。ぞつとするほどに真つ暗闇が果たしなく広がっている。星一つない夜空と激しい雨風、街灯も壊れている。お互いの顔も見えない。崇史はまだ一度も彼女達の顔を見ていなかった。声すらも聞いていない。同じ目的を持った者達は言葉すらも必要なく、意志の疎通ができるというのだろうか。その証拠に彼らは何の指図もなく、どこもしれない人生の終着駅に向かつてひたすら歩いていった。

彼ら四名はそのまま全てを心得ているかのように、亡霊のように荒野を歩き続けた。ただひたすら海を目指して。

崇史は列の最後尾を歩いていた。彼にはこの後どうなるか全く想像できなかつた。ただ遅れないように必死に彼ら三名の後を追っていた。崇史は雨に打たれながら自分の惨めさが悔しかった。必死に遅れないように懸命に歩きながらも、人生の最後の夜ですら、自分は残りの三名からは浮いているのである。その証拠に自分一人が白装束を着ていない、それに、今後どうなるのか何も知らないのは自分一人である。自殺と言う行為ですら、自分一人では成し遂げられず、彼らの後を追っているのである。彼の脳裏に浮かぶのは白装束に身を包んだ三人が円を描いて何やら儀式を行っている姿、そして、その中に入れないで、一人ぼつんと傍観している自分の姿であった。あゝなんと情けない。僕は何をしても駄目な男なのだ。結局は彼らの仲間にはなれないのでしょうか。僕は一人孤独に死んでいくの

だ。崇史の目は涙でいっぱいであった。でも、もうすぐ僕は死ぬのだ。これが、本来の自分の姿なのだ。一生かけて作った自分の姿がそれなのだから仕方がない。空想のなかの光り輝く自分ではなく本当の自分を受け入れて死ぬしかないのである。

崇史は諦め、決意したように顔を上げ前方を見ると、そこには深い、深い暗闇の中に更に深い暗黒の空間が扉を明けて待ち構えているようであった。これが、地獄への入り口なのですね。いや、この今、自分がいる瞬間、これがまさに地獄なのだ。彼は恐怖した。でも、今の崇史にはどうする事もできなかった。ただ、この人達に従おう。彼らと共に死のう。もう何も悔やまないです。そう最後の決心をした時、彼らは断崖絶壁に到着した。もう一時間以上は歩いたはずだ。目前には果てしなく続く、雄大な真つ黒な大西洋が広がっていた。そして、何も準備する間もなく、何も考える余裕もなく、Jは突然海に向かって飛び降りた。崇史はバシャっという音にびくつき、顔が引き攣った。Jはきつと死んだのだ。恐怖で失禁する崇史、彼は恐ろしさで体がぐにやぐにやになった。他の二人が自分を見ている。まるで自分がJに続いて飛び降りるのを促すかのよう。だが、彼の足は鉛のように重くどうしても動かせなかった。彼は彼女達から目をそらし泣きながらうつ伏せになった。そして、崇史は声を絞り出すかのように、お経を唱えていた。今になって急に死が怖くなったとでもいうのか。そうじゃない、ただ何かあまりにも恐ろしすぎる光景にびくついていただけだ。少し時間を下さい。もう一度最後の決心をする心構えをしたいのです。

そして、女性が続いた。「ぎゃ〜」あまりにも悲しすぎる心の深淵から出ているような悲鳴。あ〜もうやめて。死なないで。崖下を覗くと全く生気のない抜け殻のような死体が海上に浮いていた。あ〜なんて悲劇的な瞬間。これが死なのだ。崇史は再び一心にお経を唱えた。もう自分も飛び込もう、このまま最後に取り残されるなん

てご免だ。勇氣が少し薄れてきているのを感じ、今しかないと思つた。しかし、彼より先にもう一人の女性が飛び込もうとした。その瞬間雲の間から一瞬、月明かりが差し込み、激しい風が彼女の頭巾を空高く舞い上がらせた。「あゝ何て事!!!」その時、崇史はぞつとするような物悲しげな何とも言えない、いやまるで鬼のような顔、彼女の人間でない死人のような顔を見た。彼はまじまじと死の直前の人間の顔を見てしまった。「え、なんでどうして彼女が、いったいこれは」崇史は驚きのあまり今までの決意、悲しみ全ての感情が吹き飛んでしまった。そして、ただ一つの感情だけが彼の元に残つた。そう、その人物はまぎれもなくジエーンであつた。その時、彼ははつきりとその女性の顔を見たのだ。彼はあまりの恐怖で縮み上がった。だが、崇史はひと時も目をそらさず彼女の顔を見続けた。死人の顔をしたジエーン。一瞬彼女が自分を殺すかのような錯覚にさえ陥つた。だが、恐怖で逃げようとする意識とは裏腹に、崇史の手はしつかりと彼女の手を掴んだ。まるで自分の体に全く別の誰かが乗り移つたかのように。彼の中に唯一残つた感情とは、すなわち何としてでも彼女を助けなければ、というとてつもなく強い気持ちであつた。その気持ちは前者二人に対しては全く起きなかつた。だが、今の気持ちはジエーンを死なせては全くなかないという事、何としてでも守らなければという激しいものであつた。

振り払おうともかく彼女を必死で押さえ続けた。彼女の力はまるで死神が彼女を引つ張つているかのように、桁外れに強かつた。それは並の女の腕力ではない。崇史の細い腕は今にも折れそうであつた。彼は何度も蹴られ殴られた。だが、彼もまた何者かに取り憑かれたかのように、自分の意志だけではなくすごい力が働いているかのようにあつた。わずか数センチ先は崖で、少しずれば二人共々崖の下へ落ちてしまう。もし高所恐怖症の崇史が正気であれば、決してこんな大胆な勇氣ある行動はとれなかつたであろう。きつとその恐怖よりも死を選んだに違いない。

激しい格闘で崇史のサングラスは粉々に砕け、深々とかぶった帽子が頭からずれ落ちた。そして、ジェーンもまた崇史を見た。ジェーンも先程崇史が感じたように驚いた。彼女は大きな悲鳴を上げ、生きる事の意味をまるで悟ったかのように崩れ落ちた。彼女もまた彼を助け出すかのように崇史の手をしつかりと掴んで崖ぶちから遠のいた。

彼らはお互い同じフラットにしながら、お互いの悲しみについて何も気が付いてあげられなかった。お互いについてまるで無関心であった。彼らは泣きながら、「ごめんなさい」と何度も謝り合い強く抱きしめ合った。彼らは無関心の自己中心的な愛のない人達を憎み、冷たすぎるこの世の中を恨み、絶望した。だが、自分こそが傷ついた人物に声をかけてあげられなかった。しかも、ほんのすぐ側にいた友人に対してである。気付いてあげる事すらできなかったのである。彼らはその事実が付きパニックなりながらいつまでも泣き続けていた。崇史とジェーンはほんの僅かの距離でインターネツトをし、自殺の共犯者を募っていたのだ。「あゝなんて愚かな行為だろう。生きよう」「僕らは生きなければならぬんだよ」「崇史はそう言っただけでジェーンの体をやさしく摩った。

二人は大雨の中、夜が明けるまで震えながら抱き合っていた。お互いを慰め合うように、暖め合うように強く、強く抱きしめ合った。今度は生きなければという気持ちが二人を勇気づけた。崇史の耳にはいつまでも「と女性のあまりにも悲しい悲鳴が耳を離れなかった。僕は彼らに何もしてあげられなかった。助ける事ができなかった。

彼らは極度の興奮と疲労、精神の麻痺によって動けなかった。何か事を起こす、或はその場を離れようとも思わなかった。動くことよって崖下へ落ちてしまふのを恐れるかのように。そして、彼ら

はお互いの姿以外何も見えなかった。もしかして、それすらも見えていなかったのかもしれない。ただただ極度の緊張が彼らを覆っていた。

長い、長い夜が明け、村民が彼らと死亡者を発見し、その後複数
の警察官がやって来た。ようやく彼らはお互いの腕を掴むのを止めた。彼らの腕にはくつきりと深い手の跡が残っていた。興奮状態の彼らはしばらくの間、事情聴取に答えられなかった。

それにしても、とにかく自分は死ななかった。まだ死ぬ事が許されない、すなわち、自分が知らない、或は気付いていないたくさんの事があるように思った。なぜって、僕はジエーンを見殺しにするところだったのですから。果たして、僕は他人を非難できるだろうか。その資格を持ち合わせているだろうか。崇史は神を憎んだ、彼に対して意見すらした。だが、自分はまだ聖人ではなかったのだ。

崇史はベッドの毛布の中に深く潜った。様々な考えが頭の中を交差し整理できなかった。きつと睡眠が僕を安らかな気持ちにしてくれるだろうが、眠る前にどうしても、崇史は答えを出さなくてはならないと思った。だが、結局は答えなどない事は分かっていた。ただ、自分は死ななかった、そして、生きなければならぬのである。たとえ自分が望むような幸せが永遠に得られないとしても、僕は生きるしか仕方がないのである。そして、自分は今後、とても死を選択できないであろうと思った。なぜなら、実際の死はあまりにももの悲しいものであったから。

いったいどれくらい眠ったのであろう。部屋の中は真っ暗である。崇史はベッドの上に座り、同じ部屋のもう一つのベッドに寝ているジエーンを見て、彼女がまだ生きている事にほっとした。もし彼女が死んでいたら？そんな仮定は想像すらできないが、はつきりと言

えるのは自分とルーカスそれにデイビッドの責任でもあるのだ。だれも彼女の変化に気付いてあげられなかったなんて、なんとも悲しい事実である。そして、ジェーンもまた崇史と同じように、どうして崇史の悲しみに気付き助けてあげられなかったのかと深く懺悔していたのである。

その日の夜遅くに、崇史が泊まっているB&Bにブラッドリーがやって来た。どうやって警察は彼に連絡をとったのであろう。その時、崇史はブラッドリーが行方不明者として警察に届け出ていたのを知らなかった。そして、彼は崇史のフラットメイトのデイビットを通じて南アフリカのジェーンの父親にも連絡をとっていた。彼は部屋の扉をノックもせず強引に入り込んで来た。彼の顔は怒っていた。こんなにも強く怒りに満ちたブラッドリーを見るのは初めてだった。だが、崇史はこんなに幸せな瞬間を感じた事がかつてなかった程に嬉しかった。どんな彼でもいいから、どうしてもブラッドリーに会いたかったのだ。彼の怒りは崇史を見てすぐに吹き飛び、すぐく落ち込んだ悲しそうな顔をした。ブラッドリーは何も言わなかったがそれだけで十分だった。崇史は素直に「ごめんなさい」と謝罪した。

ブラッドリーは崇史を抱きしめて自分の顔で何度も彼の顔を摩った。

ブラッドリーは自分が崇史の苦悩の元凶である事、そして、何もしてあげられなかったことに強い憤りを感じていたのだ。その日はまるで崇史が突然自分の目の前から消えてしまうのを恐れているかのように、少しも彼の側を離れようとはせずに、ブラッドリーの手は強く、強く崇史の手を握り続けていた。

崇史とブラッドリーそしてジェーンはその後、一週間程アイルラ

ンドに滞在した。ゴールウェイからダブリンまでのドライブは素晴らしい景色の連続であった。青く澄んだ遙かな雄大な大西洋、大平原にそびえ立つ山々、そして、かわいらしいダブリンの町並み。彼らはすっかりアイルランドの虜になった。

この一週間、彼らはそれぞれ様々な事を考えていた。どうして、人間は生きなければならぬのか。ずっと考えてきた幸せなる意味とは？結局崇史には分からなかった。彼は決して人並みには幸せにはなれないように思う一方で、そう感じる事そのものが、人生なのではないのか。困難や悲しみなども全てのものを含めての人生ではないのか。人はそれぞれ違った人生を歩んでいる。それならば、僕は僕なりの道のりを歩んでいけば良いのではないだろうか。別に無理をして他の人々と同じ幸福を追い求める必要などないのだ。自分は自分であつて他人が自分の神にはなりえないのである。

崇史がずっと思い憧れてきた普通一般の、そもそも男子が感じる幸せ、それはもう彼の元には来ないのだ。たとえそれを手にしたとしても、それは単に擬似的なものであつて完全に同一のものでない。もう、幸せそのものを追い求めるのは止めようではないか。僕が追いつけてきた幸せは、本当に僕は欲しているのだろうか。幸せの基準はそれぞれ違うのであつて画一的なものではありえない。それなのに僕はそれが欲しかった。僕が最も忌み嫌っていた日本の価値観はそもそもそれを指すのではないのか。僕を追いつめてきた日本人の目、いつも僕を監視し続けてきた彼らの視線。僕は知っている、皆それを恐れている事を。「あなたは不幸ですか」「はい、そうですよ」「やっぱりね、だつて君は普通じゃないから」「このままでいいのかい？両親が可哀想だね」「母親の為にももつとまっとうな普通の道を歩みなさい」僕はもうそんなのどうでもいい。僕は僕の道を歩き出す。他人から見て不幸せでも僕はそこに幸せを見つけてみせる。僕はようやく分かったよ。画一的な価値観それが人生を破

壊するということを。でも、彼の頭の中は混乱し、答えにはまだまだ到達できそうになかった。だが、このアイルランドでの経験は何かを変えた。彼の人生についての考え方が大きく変わったように思った。

ダブリンにつくとジェーンの故郷南アフリカから彼女の兄夫婦がジェーンを迎えに来ていた。彼らはすっかり悲しみ動揺していたが、彼女の元気な姿を見るとほっとしたようであった。ジェーンも彼らに再び会って喜びに満ち溢れていた。だが、ジェーンは父親がこの場にいないことに落胆と怒りを感じずにはいらなかった。彼はつねに家庭を顧みなかった。無関心だった。彼には母に対してそうであったように私の苦しみ何て理解できないんでしょね。

それでも、もう彼女はそんなことどうでもいいわと、力強く崇史を抱きしめた。何か力強いオーラが彼らを取り巻いているかのようだった。「強く生きて下さいね」崇史は心の中でジェーンと自分自身にそうつぶやいた。

二組はそれぞれ別れた。崇史とブラッドリーはロンドンへ、ジェーンと彼女の兄夫婦はケープタウンへそれぞれダブリン空港から出発した。

最終章

崇史とブラッドリーがダブリンからロンドンに戻って、僅か一週間でルーカスがロンドンを離れ故郷チェコに帰国する日だ。

崇史は、ロンドンに舞い戻って来た時、いつもは乱雑な部屋がきれいに整理整頓をされているのには驚いたが、もう次の瞬間にはルーカスが間もなくプラハに帰る事実を思い出した。崇史はその時焦った。もうルーカスと一緒に過ごす時間が僅かばかりしか残っていないのだから。それに、こんな大切な時にダブリンで随分と長い時間滞在をしてしまった事に、自分は何て愚か者だろうかと後悔したが、時間を取り戻す事などできない。それに、今ルーカスはこの部屋にいない。何日間も誰もこの部屋にいなかったかのような様子だ。もしかして、彼はもう旅立ってしまったのか、そう思える程の静けさであった。

ルーカスがロンドンのこの部屋に戻って来たのがプラハ出発の三日前であった。それまでの四日間、崇史はいらいらしながら彼の帰りを待った。もしかして、もう永遠に会えないかもしれないと焦りもした。何度窓から彼の姿を探したであろうか。携帯の電源も切られている。一度などは勇気をだして、ケンブリッジにあるカーリーナのフラットに電話をかけたこともあった。そこにもルーカスもカーリーナもいなかった。だが、その電話で彼女の友人に、彼らは今旅行中である事、十日間程前までルーカスが彼女のフラットで寝泊まりをしていた事を知らされた。この事実、彼らは今、二人でどこかにいる、しかも、楽しんでるに違いないというイメージは一層崇史をいらだたせた。なぜに今、彼らは一緒にいる必要があるのだろう。チェコに帰国してからもいくらでも会える、ずっと一緒にくらすというのに。こんな精神状態で四日間が過ぎていった。

崇史は待ち飽きた。もう彼なんてどうでもいいやと自分に言い聞かせた時、ルーカスが帰って来た。ルーカスは部屋の中に崇史がいるのを見て驚いた。どうして彼は驚いたのか？それは崇史の恐ろしい顔を見たからか、それとも、そこに崇史がいるのを予期していなかったからか。ルーカスは手短かにリーナと故郷の友人と四人でパリに行っていた事、できれば崇史も参加して欲しかった事を説明した。

パリに旅行していただつて！何たる事！もう僕との時間が僅かしかないというのに、それなのにこんなにぎりぎりになって戻って来るなんて。何とか気持ちを落ち着かせて、ルーカスと笑顔で接して残り僅かな日数を良い思い出に残る日々にしようという気持ちに反して、崇史は悪びれた様子のルーカスを見ると食って掛かった。「僕は君をどれほど待っていたか知っているのかい！メールも何通送った事か！」

ルーカスは最初我慢強く聞いていた。「すまなかつたよ」彼は自分が大きな過ちを起こしたのは分かっていた。どれだけ、崇史が自分に好意を寄せているかも知っていた。それなのに彼はこのところずっとうつつちゃらかしにしていた。ルーカスは崇史がアイルランドに行っていたのを知らない。なぜなら彼はずっとこのフラットにはいなかったのである。よって彼は後ろめたく感じていたのだ。

だが、崇史が非難を一向に止めようとしないので、ルーカスもさすがにむっとして、「君だつてずっといなかつたじゃないか。君をパリに誘おうと思っていたのに」「それに、携帯の電源が切れているのだからメールを送っても仕方がないじゃないか」その後、ルーカスは怒りを押さえながら辛抱強く、お互いの時間がすれ違っていた事を説明した。

しかし、崇史は感情をコントロールできずに、手を振りかざして、怒りに顔を真っ赤にしながら、「君は僕の気持ちをもっと理解すべきだよ。どんな気持ちで君を待ち続けていた事か。君に感謝の気持ちを伝えたかったというのに」と叫んだ。崇史の言葉はまるで恋人に訴えかけるかのような響きすらあった。だが、彼にはそんな事はどうでも良かった。今は自分の心にある感情を全て表現したい気持ちでいっぱいであった。

崇史の目には涙すら浮かんでいた。きっと彼はまだアイルランドからの延長か精神が安定していないのだろう。それに、崇史にはブラッドリーという精神的な支柱があるというのに、彼は贅沢にもブラッドリーだけでは満足できなかった。崇史は自分が中心人物でなければならぬのかもしれない。彼の暴言（彼はまだまだ言い足りなかった。次々に溢れ出て来る感情を押さえられなかった）はスパーの袋をたくさん抱えたカーリーナとチエコから来た彼らの友人によって中断された。ルーカスと彼らは何か意味ありげな目配せをして肩をすぼめた。

崇史は彼らの行為に侮辱されたような気分になり、一層腹立たしくこのままではどうかしてしまいそうなので、ルーカスをできる限りの凄い形相で睨みつけ、寝室へ戻った。

開け放たれた扉から、キッチンで彼ら四人が困惑して、何やらチエコ語で相談しているのが聞こえる。時折、馬鹿にしたような女性達の笑い声も聞こえた。

崇史は自分が言いたかった事の半分も言えていない、それどころか十パーセントも言えていないと思った。怒りと悲しさに震えながら、彼は次に言ってやろうと思う言葉を考え、ルーカスを罵倒して

いる自分の姿を想像した。

彼はいつしか眠っていた。目を覚ますともう外は真っ暗で、食堂からは楽しそうな話し声と美味しそうな香りがしてきた。崇史は自分だけが放っておかれたようなやるせない気持ち、物悲しい気持ちになって、外に出ようと玄関へ向かった。それに、気まずい気持ちも彼を外へ駆り立てた。

キッチンの前を通ると彼らは急に話を止め、一斉に崇史を見つめた。カーリーナは急いで席を立て、一緒に夕食に参加して欲しい事、その証拠にすでに崇史の分もとっていますよと、彼のお皿を指した。そして、崇史の手を取って、「あなたを呼びに行ったけど、とっても気持ち良さそうに眠っていたので、起こさなかったのですよ。ごめんなさいね。さあ、ぜひぜひ、今からでも私達の夕食に参加して下さい」とカーリーナはやさしい瞳が皆に見えるように一堂を見渡し、同意を求めた。

崇史には彼女の態度が白々しく、また、彼女の瞳の奥に勝ち誇ったかのような敵意が見て取れるように感じたので、彼らを無視し外出したかった。だが、ルーカス、そして、彼の友人の真実のやさしさを断る訳にはいかなかった。

崇史はにつこりと微笑んで夕食に参加した。カーリーナは賞賛の眼差しで見られていた。なんとたつてこの頑固な気難しい若者を招待するのに成功したのですから。

気まずい雰囲気は最初の数分で、その後、崇史を除く四人は再び軽やかな楽しいリズムで、彼らの会話は盛り上がった。ただ、その内容は崇史には全く分からず、すなわちそれは先程から話されていた話の延長で、しかも、その会話は彼らの言葉で話されていた為に、

理解できなかった。

崇史は夕飯を食べながらじっと我慢した。お昼からの憤怒が少しも解消していないのに、更なる怒りが爆発しそうなのを必死に堪えていた。これはもしかしてカーリーナの嫌がらせかも、彼はそんな意地汚い想像すら憶えて、彼女の顔を見つめた。だが、彼らは会話に熱中して、彼女、そして、誰一人として少しも崇史に注意を向けるものはいなかった。ルーカスは？彼一人だけでも、気を使っただけでくれたら、他の誰の関心も必要ないのに。それなのに・・・、崇史は意地悪く、不満そうに彼を睨んだ。だが、少しも崇史の視線に気が付く事はなかった。もしかして、彼は意識的に僕を避けようとしているのだろうか。孤立した崇史にはその疑問を紛らわす、或は払拭する事は何も起こらなかった。彼の思考は一切邪魔される事はなかった。後、二日で別れるというのに、こんな悲しい仕打ちを受けるなんて。でも、崇史のルーカスに対する感謝の気持ちは少しも変わる事はなかった。それに、彼への愛（崇史は必死にこの感情を打ち消そうとしていた）も揺るぎないもの、彼自身驚く程強い愛であることを知った。崇史は思うのである、何て僕はばかな男で、自己中心的であろうか！と。だが、この一方通行の気持ちはどうにかこうにか解消したいという気持ちはますます強くなった。僕は少しも期待していない。ただ、普通に最後の別れを演出したいだけだ。そんな、最低限の事すら僕はできないのだから。

そして、とうとう終盤、彼のむしゃくしゃした感情は爆発した。崇史は自分が何を叫んだのかは憶えていない。ただ、目の前にいる彼らの驚いた顔とカーリーナの軽蔑した顔を忘れることができなかった。崇史はやってはいけないことをしてしまった。彼らの前でルーカスを罵倒したのである。ルーカスはじっと耐えていた。どれだけ恥をかいたことか。彼は怒りで声が震えていた。だが、ルーカスは少しも反論する事なく、「分かったよ。全て君の言う通りだ。さ

あ、行こう」そう言い残して出て行ってしまった。そして、まだまだ続きそうなパーティーは中断され残りの三人もルーカスを追って家を出た。その時の崇史を見たルーカスの顔は悲しげであった。

もうすぐルーカスと別れるというのに一体自分は何をしているのであろう。びっくりした様子で、啞然としている彼らの姿がまだ目から離れない。子供じみた自分の行動に情けない気持ちでいっぱいであった。

彼らが出て行った後、崇史は何もできなかった。ひっそりと静まり返ったフラットに一人取り残されていた。自分は何て無礼な大人気ない行動をしてしまったのかという反省と、どうして彼らは英語ではなく、全く理解不能なチエコ語を使ったのかという疑問が彼にまとわりついた。

怒りと反省の気持ちが強くなかなか自分から離れない。一時間経つた後、窓から外をのぞいた。ルーカスは、今晩はもう戻ってこないのかもしれない。きっと、そうに違いない。それとも、彼ら四人は、今晩はこの部屋で泊まるつもりなのかも。もしそうだとしたら、絶対に泊めてやらない、何としてでも追い出してやる。意地汚い気持ちだがまた再び頭をよぎった。だが、今はまずどうしてもルーカスに謝りたかった。

夜中の三時すぎにルーカスは一人で帰って来た。きついお酒の臭いがする。彼は少し酔っているようだ。だが、じっと座って自分の帰りを待っている崇史を見ると酔いは吹き飛んで真面目な深刻そうな顔になり、腕を組んで崇史を見下ろした。そして、ルーカスの顔にもまた怒りが見えた。彼の顔には、「いったい今日の君はどうしたんだい？どうかしているよ」と問いかけているかのようであった。

崇史はまるで自分がルーカスの恋人であるかのように感情を露にして振る舞った。たった数分前まで彼に心から謝罪しよう思っていたのにも関わらず、逆の行動を取ってしまった。

「ねえ？君は憶えているの？僕らに残された時間はもう二日だよ」崇史はルーカスを睨みつけた。そして、聞こえるように大きな溜息をつき、泣き出しそうな顔を見せ、反応を待った。

「すまなかつた。君がそんなにも俺を思っていてくれていたなんて」ルーカスは関心の無いような白々しい語調でそう言った。その後、崇史を軽く抱きしめて、さあ、これで満足したかい？というように彼を引き離れた。

崇史はその態度にむっとして、では証明してもらいましょうと、厭味たらしく、「じゃ、明日と明後日はずっと僕と一緒にだよ。誰にも君を渡さない」そう言ってポケットの中から紙を取り出して計画表を見せた。

ルーカスは驚いて、「ちよつと待つてくれよ。すまないが先約があつてね、カリーナと友人とでグリニッジに行かなきゃならない。もちろん君も一緒に来ればいいよ」彼の顔は強張っていた。彼は脅すかのように顔を崇史に近付けた。

「絶対それは許さない。何があつても行かせない。君は忘れていきますね、ずっと前に僕とミュージカル行く約束をした事を。僕はその実現をずっと待つていたというのに、何もしてくれなかった。だから、僕がチケットを買つたよ」そう言って劇場のチケットを取り出して彼の目の前に出した。

ルーカスははっとして約束を思い出したようだが、いらいらして

いた。彼は軽蔑し崇史を見下ろしていた。「行かないよ。今言っただようにもう約束をしたんだ。わがままを言わないでくれ」

その言葉を聞いた途端崇史は発狂し、カリーナとはいつでも会えるじゃないかと何度も叫び、泣きながらいかにルーカスが出来損ないの最低人間であるかをゆっくりと大きな声で張上げ、彼を罵倒した。

ルーカスの唇は震え、今にも崇史に殴り掛りそうであった。ルーカスはなんとか自分をコントロールしようとしたが、押さえる事ができず、その証拠に、彼の息は猛犬のように荒かった、顔色は真っ赤で、拳は握られていた。だが、彼は紳士であった。彼は殴ろうとするのを止めて、部屋から出て行った。そして、その後を追いかけようとする崇史に、「もう二度と俺の目の前に姿を現すな」と警告を与えた。実際、もし後少しでもルーカスを罵倒し続けていたら、彼は間違いなく崇史をボコボコにしていただろう。

ルーカスはその夜、台所で一睡もせず思い悩んだ。彼は当惑していたのだ。こんな姿の崇史を今まで一度も見つた事が無かった。彼は崇史を尊敬していた。それがどうしたというのか、今晚の彼は全くの別人のようであった。

崇史は史上最底の人間を演出してしまった事に愕然とした。これで、ルーカスとの関係も永遠におしまいだ。彼は涙を流しながら、ベッドで眠ってしまった。

翌朝、崇史は遅くに（十時頃）に目が覚めた。内容を憶えていないが何かとつても恐ろしい夢を見ていたようだ。全身汗びっしょりだ。予想通りもうルーカスはこの部屋にいない。きつとすでに出かけてしまったのだろう。

がっかりしながら台所に行くと、驚いた事に、そこには朝食を作っているルーカスがいた。

「昨夜はごめんよ。約束は断ったよ。友人はカリーナにまかせた。今日と明日は君とすごすよ」といってウインクした。

「さあ、食べるよ。君は今まで出会った友人とは少し違ったタイプだな」「俺は昨晚ずっと考えていたんだ。君には本当に感謝しているよ。どれだけ君に救われたか」

ルーカスは両手で崇史の顔を摩った。こんな事は今までされた事がなかった。目のすぐ前にはルーカスの顔があり、彼の息が生暖かった。

ルーカスはそのまましばらく、何かを考えていたようだったが突然唇にキスをした。彼の唇は薄く暖かった。

これはルーカスの精一杯のプレゼントであった。すぐに唇と手を離して咳払いをした。彼は自分がした行動に驚いているような表情をした。少しじっとして動かなかったが、何事もなかったかのように朝食を食べ始めた。

崇史にはこれで充分だった。もう何も要らなかった。これ程の感動を彼は得た事があつたらうか。たった僅か数秒の行為とルーカスが作った不格好な朝食は全てを表していた。崇史は今知った。ルーカスが昨晚どれほど自分の事を考え思い悩んでいたかを。崇史はじっとルーカスを眺めた。ルーカスは視線を感じながらも、気付いていない振りをして朝食を食べ続けていた。

「ありがとう。君の気持ちがあつてもうれしいよ。それと、昨日あんなわがママを言って申し訳なく思っているよ。君に対する思いでどうにもコントロールできなかつたんだよ。僕はもういいから、さあ、カーリーナとの約束を果たしてあげてよ。それと、昨晚は本当にごめんなさい。心から謝罪します」崇史は突然そう言つて微笑んだ。

「もういいよ、カーリーナや友人とはいつでも会えるし、今日は君と過ごすよ」

その後、彼らは何時間も語り合つた。それは、今までの思い出であつたり、これからの夢や野望であつたりした。

ルーカスの目はやさしく崇史を包み込んでいた。それは、兄が弟を見るような目であつた。ルーカスは昨晚、怒りで眠る事ができない為に、ネットカフェに行つて、何週間も読んでいなかったメールを整理していた。その中には、ジェーンの悲痛な叫び、アイルランドからブラッドリーがぜひ崇史とジェーンを迎えに来るようにと書いた強い願い、そして、その後にくる深刻な文面、そして、崇史がアイルランドで書いた長文の感謝と懺悔の文章、それに自分がゲイであることをカミングアウトした文章を読んだ。その時、ルーカスは自分に対する恐怖で全身が震えた。悔しかつた。彼はその後大急ぎでフラットに帰つた。彼はその途中大声で何度も叫んだ。自分が完成された偉人のように思っていたのに、それは自分自身が勝手に作り上げた虚像であつたのだ。俺は何者なのだ。目前に横たわる幸福によつて崇史の、そして、ジェーンの苦しみに少しも気が付いてあげられなかつた。それに、俺はアイルランドまで彼らを迎えに行つてやれなかつた。

ルーカスは急いで部屋の扉を開けた。つけっぱなしの電球の下で、

服を着たまま眠っている崇史を見た。彼の臉には涙が浮かんでいた。ルーカスはそつと涙を脱ぐって、毛布をかけた。どれだけ、寂しかったのか、友情に飢えていたのかを理解し心が痛んだ。そして、今日の日を崇史の視点で見つめ直してみると、自分がひどい残酷なことをしたのだとはっとした。

その後、彼らはずっと以前にした約束を果たした。それは切り詰めて節約の日々を送っていた最後の日に、彼らが思い描く贅沢な一日を過ごすというものだった。彼らはそれぞれ正装をして、彼らにとっては精一杯高級なフレンチレストラン（ミシユランには掲載されてはいないけれど）で夕食をとった。その後は？そう、ウエストエンドのビクトリアパレスシアターでミュージカル「BILLY ELLIOT」を鑑賞した。これは崇史がずっと以前からどうしても見たかった定番の作品だ。彼は「BILLY ELLIOT」を見ながらまるで全ての夢が叶ったかのように思った。その側でルーカスは満足そうな笑みを浮かべながら眠っていた。彼は夢の中を羽ばたいているかのようにであった。彼は昨晚一睡もしていなかったのである。ルーカスは他人を思いやるやさしい心の持ち主なのだ。

その帰り道彼らはバスには乗らずウエストエンドからホランドパークまで徒歩で帰った。ルーカスにとっては今夜がロンドン最後の夜だ。何度も、何度も歩いた道をもう一度噛み締めながら。そして、その道中何度もやさしい目で崇史を見つめた。

ルーカスはプラハに向けて飛び立った。ヒースロー空港のカフェで、崇史は感傷に浸っていた。それは、最後のシーン、この光景は生涯忘れる事はないだろう。ルーカスは崇史をしっかりと抱きしめ力強く手を握った。たったこれだけのことであったが、この感触にはあらゆるお互いの気持ちが含まれているのだ。

だが、明日から、いやいやもうたつた今から、ルーカスなしの生活が始まる。

それにしても、ルーカスは何と偉大であつたらうか。少なくとも僕にとつては！崇史は感動の気持ちとともに様々な映像が蘇つてきた。ルーカスと出会うまではヨーロッパは遙か遠い存在であつた。日本人と欧州人の間には見えない壁が存在するのではないかと崇史はそう結論づけていた。だが、実際にはそれは存在しなかつた。自分自身によつて造られた壁は、ルーカスとの偶然の出会いによつて脆くも崩れた。彼がいなければブラッドリーとの出会いもなかつたことになる。ルーカスとの出会い、経験を回顧し整理しなければ。

崇史は深い悲しみとともにフラットに戻つて来た。そこには、自分の帰りを待ちわびている人々、一人はデイビット、二人は彼の友人、一人はハベル、誰彼もルーカスについて何の質問もなかつた。彼らは彼らの時間を生きている。「もう、何時間も君を待たよ」「そう不平をもらした。彼らは崇史の部屋に移り住み三人で暮らし、ハベルはデイビットの部屋を使う、そして、崇史はこのフラットと別れてブラッドリーの家に移る事になつていた。そろそろ、彼が迎えにくる頃だ。

そう思つた途端、ブラッドリーは出張先のフランクフルトから大急ぎで歸つて来た。

「すまない、遅くなって。BA0907が機材故障で遅れちゃつた」そういう彼の顔は輝いていた。幸せでいっぱいといった風であつた。なぜなら、一週間ぶりに崇史に会えたのだから。ブラッドリーは崇史を強く、強く抱きしめて何度もキスをした。やっと、終わつたかと思うとまだ物足りないかのようにまたキスをし、顔を擦つた。

崇史のスイッチは入れ替わった。先程までの感傷はもうすでに過去の記憶となりつつあった。そして、ルーカスと過ごした日々は素晴らしい思い出となって永遠に刻み込まれた。ただ、それはもう現在進行形ではない。ハベルやデイビッドにはもう彼の陰すらも見えていない。彼らにとっても、崇史にとっても、一幕が終了し、新たな幕が開けるのである。

ブラッドリーは崇史のそれ程多くない荷物をトランクに入れ、崇史をまるで王子様のように扱い車に乗せ、彼らは新たな未来に向かって船出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8699n/>

ウエストエンド

2011年11月12日18時34分発行